

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）

九州電力株式会社鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

やす
安 良 遺 跡

2012年3月

鹿児島県志布志市教育委員会

序 文

本書は、九州電力株式会社鉄塔建替工事に伴い、志布志市教育委員会が実施した、安良遺跡の発掘調査報告書です。

安良遺跡では主に古墳時代と鎌倉時代の遺物・遺構が見つかり、多くの成果を収めました。

古墳時代の成果として、7世紀頃の堅穴建物跡や土器が見つかっており、約1,400年前からこの地が集落として利用されていたことが分かりました。

鎌倉時代の成果として、備前焼・常滑焼などの国内産陶器や白磁・青磁などの中国産陶磁器が見つかりました。古くから交易の拠点・要衝として繁栄してきた志布志地方の歴史的様相の一端が明らかとなる重要な資料となります。

本書が市民の皆様をはじめとする多くの市民に活用され、地域の歴史や文化財に対する関心とご理解をいただけるとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご理解・ご協力いただいた九州電力株式会社をはじめ、各関係機関及び発掘調査に従事・協力していただいた地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

志布志市教育委員会

教育長 坪田勝秀

例　　言

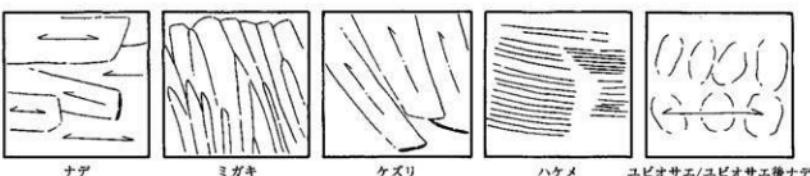
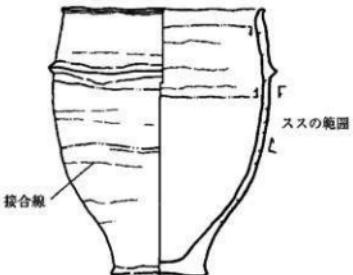
- 1 本報告書は九州電力株式会社鉄塔建設工事に伴う安良遺跡の発掘調査報告書である。
 - 2 本遺跡は鹿児島県志布志市志布志町安楽字勢園に所在する。
 - 3 発掘調査は九州電力株式会社の依頼を受け、志布志市教育委員会が実施した。
 - 4 発掘調査は平成23年5月18日から7月15日まで実施し、整理作業・報告書作成は平成23年5月23日から平成24年3月21日まで実施した。
 - 5 本書で用いた方位は全て磁北であり、レベル値は九州電力株式会社の工事計画図面に基づく、海拔絶対高である。
 - 6 遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。
 - 7 挿図の縮尺は各図面に示した。
 - 8 遺跡位置図等の地図は国土地理院発行の1:25,000地形図『志布志』、1:50,000地形図『志布志』、大日本帝国陸地測量部発行の1:50,000地形図（明治35年測量）を利用した。
 - 9 発掘調査における図面の作成は相美伊久雄と坂元裕樹が行い、写真撮影は相美が行った。
 - 10 遺構・遺物の実測・トレースは臨時職員の協力を得て、相美・坂元が行った。また、一部遺構図作成にデジタル技術を用いた。
 - 11 遺物の写真撮影は鹿児島県立埋蔵文化財センターにて、内園勝彦・吉岡康弘両氏が行った。
 - 12 本書の執筆・編集について、第5章第4節4の執筆を坂元が、その他の執筆及び編集を相美が行った。
 - 13 出土遺物及び図面・写真的記録類は志布志市教育委員会で保管し、展示・活用する予定である。
 - 14 発掘調査及び報告書作成の際には、以下の方々よりご指導・ご助言を頂いた。ご芳名を記すことで、謝意を表します（敬称略）。
- 波辺芳郎（鹿児島大学法文学部）、中村直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）、橋本達也（鹿児島大学総合博物館）、関明恵・東和幸（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、橋口亘（南さつま市教育委員会）、藤井大祐（鹿児島市教育委員会）

凡　　例

- 1 本文で用いた遺構記号は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき』（2010年刊行）に準拠し、以下のとおりである。なお、遺構番号は遺構の種類ごとに、それぞれ検出された順に通し番号を与え、報告書まで固定している。

SI：堅穴建物 SD：溝 SK：土坑

- 2 土層と土器の色調は『新版標準十色帳』に準拠した。
- 3 遺物挿図の網かけについて、縦文・古墳時代土器は赤色顔料部分を、古代の黒色土器は黒色部分を示す。
- 4 器面にススが付着しているものについて、平面図には2点破線で（一部破線のもの有）、断面図には欠印で示した（右図参照）。
- 5 土器等の調整痕の表現方法は下図のとおりである。



本文目次

<p>序文</p> <p>例言・凡例</p> <p>目次</p> <p>第1章 調査の経過</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1節 調査に至るまでの経過 第2節 調査体制 第3節 試掘調査 第4節 本調査 第5節 整理・報告書作成作業 <p>第2章 遺跡の位置と環境</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1節 地理的環境 第2節 歴史的環境 <p>第3章 調査の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1節 発掘調査の方法 第2節 番序 	<p>第4章 調査の成果</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">第1節 繩文・弥生時代の調査</td> <td style="width: 50%;">11</td> </tr> <tr> <td>第2節 古墳時代の調査</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>第3節 古代の調査</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>第4節 中世の調査</td> <td>25</td> </tr> <tr> <td>第5節 近世の調査</td> <td>32</td> </tr> <tr> <td>第6節 近代以降・時期不定の調査</td> <td>32</td> </tr> <tr> <td>観察表</td> <td>41</td> </tr> <tr> <td>第5章 総括</td> <td></td> </tr> <tr> <td> 第1節 繩文・弥生時代</td> <td>47</td> </tr> <tr> <td> 第2節 古墳時代</td> <td>47</td> </tr> <tr> <td> 第3節 古代</td> <td>49</td> </tr> <tr> <td> 第4節 中世</td> <td>49</td> </tr> <tr> <td> 第5節 近世</td> <td>52</td> </tr> <tr> <td> 第6節 近代以降・時期不定</td> <td>52</td> </tr> <tr> <td>写真図版</td> <td>53</td> </tr> <tr> <td>報告書抄録</td> <td></td> </tr> </table>	第1節 繩文・弥生時代の調査	11	第2節 古墳時代の調査	11	第3節 古代の調査	24	第4節 中世の調査	25	第5節 近世の調査	32	第6節 近代以降・時期不定の調査	32	観察表	41	第5章 総括		第1節 繩文・弥生時代	47	第2節 古墳時代	47	第3節 古代	49	第4節 中世	49	第5節 近世	52	第6節 近代以降・時期不定	52	写真図版	53	報告書抄録	
第1節 繩文・弥生時代の調査	11																																
第2節 古墳時代の調査	11																																
第3節 古代の調査	24																																
第4節 中世の調査	25																																
第5節 近世の調査	32																																
第6節 近代以降・時期不定の調査	32																																
観察表	41																																
第5章 総括																																	
第1節 繩文・弥生時代	47																																
第2節 古墳時代	47																																
第3節 古代	49																																
第4節 中世	49																																
第5節 近世	52																																
第6節 近代以降・時期不定	52																																
写真図版	53																																
報告書抄録																																	

挿図目次

<p>第1図 遺跡位置及び周辺遺跡図 (1 : 25,000)</p> <p>第2図 周辺地形図 (1 : 6,000)</p> <p>第3図 周辺環境の変遷 (1 : 60,000)</p> <p>第4図 番号区位置図 (1 : 300)</p> <p>第5図 遺構配置図・出土遺物分布図</p> <p>第6図 土壙柱状図</p> <p>第7図 土壙断面図</p> <p>第8図 繩文・弥生時代遺物</p> <p>第9図 墓穴建物跡1・2号平・断面図・遺物分布図</p> <p>第10図 墓穴建物跡1・2号出土遺物(1)</p> <p>第11図 墓穴建物跡1・2号出土遺物(2)</p> <p>第12図 墓穴建物跡1・2号出土遺物(3)</p> <p>第13図 古墳時代包含層出土遺物(1)</p> <p>第14図 古墳時代包含層出土遺物(2)</p> <p>第15図 古墳時代包含層出土遺物(3)</p> <p>第16図 古墳時代包含層出土遺物(4)</p> <p>第17図 古墳時代包含層出土遺物(5)</p> <p>第18図 古代遺物</p> <p>第19図 古墳時代～古代須恵器</p> <p>第20図 中世遺物(1) 土師器壺</p> <p>第21図 中世遺物(2) 土師器皿</p> <p>第22図 中世遺物(3) 須恵器・瓦質土器・国産陶器</p> <p>第23図 中世遺物(4) 国産陶器・滑石製品</p> <p>第24図 中世遺物(5) 輸入陶磁器・錢貨</p>	<p>4</p> <p>6</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>10</p> <p>12</p> <p>14</p> <p>15</p> <p>16</p> <p>17</p> <p>18</p> <p>19</p> <p>20</p> <p>21</p> <p>22</p> <p>23</p> <p>24</p> <p>26</p> <p>27</p> <p>28</p> <p>29</p> <p>30</p> <p>31</p> <p>32</p> <p>33</p> <p>34</p> <p>35</p> <p>36</p> <p>37</p> <p>38</p> <p>39</p> <p>40</p>
<p>第25図 近世遺物</p> <p>第26図 時期不定遺構配置図</p> <p>第27図 溝状造構1～5号及びピット平・断面図</p> <p>第28図 土坑1・2号平・断面図</p> <p>第29図 溝状造構1～3号出土遺物</p> <p>第30図 溝状造構4・5号・土坑2号・ピット出土遺物</p> <p>第31図 土坑1号出土遺物(1)</p> <p>第32図 土坑1号出土遺物(2)</p> <p>第33図 土坑1号出土遺物(3)・近世・時期不定遺物</p>	

表目次

第1表 周辺遺跡地名表	5	第15表 中世土器類観察表(1)	43
第2表 楩文・弥生時代土器観察表	41	第16表 中世土器類観察表(2)	44
第3表 楩文時代石器観察表	41	第17表 中世須恵器・陶器他 観察表	44
第4表 突穴建物出土土器観察表	41	第18表 中世輸入陶磁器観察表(1)	44
第5表 突穴建物出土須恵器観察表	41	第19表 中世輸入陶磁器観察表(2)	45
第6表 突穴建物出土鉄製品観察表	41	第20表 中世銭貨観察表	45
第7表 突穴建物出土石器観察表	42	第21表 近世陶磁器観察表	45
第8表 突穴建物出土磁器観察表	42	第22表 遺構内出土土器観察表	46
第9表 古墳時代土器観察表(1)	42	第23表 遺構内出土土器観察表	46
第10表 古墳時代土器観察表(2)	43	第24表 遺構内出土磁器観察表	46
第11表 古墳時代須恵器観察表	43	第25表 遺構内出土須恵器・陶器観察表	46
第12表 古代土器観察表	43	第26表 遺構内出土鉄製品観察表	46
第13表 古代土器・土師壺観察表	43	第27表 時期不定遺物観察表	46
第14表 古墳～古代須恵器観察表	43	第28表 近代及び時期不定遺物観察表	46
		第29表 中世前期輸入陶磁器組成表	50

写真図版目次

図版1	53	図版5 楩文・弥生時代遺物	57
空中写真		図版6 古墳時代包含層出土及び突穴建物群出土遺物	58
遺跡近景(西から)		図版7 突穴建物跡出土遺物(1)	59
東壁土層断面(溝2付近)		図版8 突穴建物跡出土遺物(2)	60
南壁土層断面(溝1付近)		図版9 古墳時代包含層出土遺物(1)	61
図版2	54	図版10 古墳時代包含層出土遺物(2)	62
西壁土層断面(土坑1付近)		図版11 古墳時代包含層出土遺物(3)	63
北壁土層断面(突穴建物跡付近)		図版12 古墳時代包含層出土遺物(4)	64
古墳時代土器(Ne68)出土状況		図版13 古代・中世遺物	65
常滑焼(No245)出土状況		図版14 古墳時代～中世須恵器	66
溝状遺構1～4号検出状況(西から)		図版15 中世遺物(1)	67
図版3	55	図版16 中世遺物(2)	68
溝状遺構1号発掘状況(西から)		図版17 中世遺物(3)	69
溝状遺構2号発掘状況(西から)		図版18 近世・時期不定遺物	70
土坑1号遺物出土状況(南東から)		図版19 溝状遺構1～3号出土遺物	71
古道検出状況(北から)		図版20 溝状遺構4・5号及びピット1号出土遺物	72
土坑2号検出状況(南から)		図版21 土坑1・2号及びピット4号出土遺物	73
土坑2号発掘状況(東から)		図版22 土坑1号出土備前焼	74
図版4	56		
突穴建物跡1・2号検出状況(南北から)			
突穴建物跡1・2号遺物出土状況(No29)			
突穴建物跡1・2号埋土状況(南北から)			
突穴建物跡1・2号発掘状況(南北から)			
突穴建物跡1・2号発掘状況(北西から)			

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

志布志市教育委員会（以下、市教委）は、文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

平成22年5月、九電不動産株式会社は、九州電力株式会社特別高圧送電線鉄塔建設66kv 大隅志布志線一部変更工事に伴って、3ヶ所の事業対象地内における文化財の有無についての照会を市教委に行った（平成22年5月21日付）。

これを受けた市教委は遺跡地図での確認及び分布調査を実施し、その結果1ヶ所について「周知の埋蔵文化財包蔵地」である「安良遺跡」の範囲内であることが判明した。そのため市教委は、当該地における開発には遺跡保存に関する事前協議が必要である旨の「回答」を行った（平成22年5月31日付）。

平成23年10月の工事開始を予定した九州電力株式会社鹿児島支店（以下、九州電力）より、鹿児島県教育委員会（以下、県教委）へ、文化財保護法第93条第1項に基づいて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の「届出」がなされた（平成22年11月2日付）。

これを受け、市教委は平成22年12月20日から翌年1月5日まで試掘調査を実施した。その結果、縄文～近世の遺物が認められ、その試掘調査の所見を「届出」に添付した。その後、県教委より九州電力へ、工事着手前の発掘調査が必要である旨の「通知」がなされた（平成23年1月21日付）。

その後協議の結果、記録保存を目的とした発掘調査を平成23年度に実施することが決定し、九州電力と市教委との間で業務委託契約が締結された（平成23年4月19日付）。

第2節 調査体制

1 平成22年度（試掘調査）

事業主体	九州電力株式会社鹿児島支店
調査主体	志布志市教育委員会
調査責任者	志布志市教育委員会
調査事務局	教育長 坪田 勝秀 生涯学習課長 津曲 兼隆 生涯学習課 文化財管理監 米元 史郎 文化財管理室長 竹田 孝志 兼指定文化財係長 上田 義明 主幹 村田 有子 主任主査 出口順一朗 主任主査 大庭 祥晃 調査担当 主査 相美伊久雄 理藏文化財調査員 板元 裕樹 臨時職員 追 さとみ 杉尾木の実

主任主査	出口順一朗
主査	相美伊久雄
調査担当 主査	
2 平成23年度（本調査及び整理・報告書作成作業）	大庭 祥晃
事業主体	九州電力株式会社鹿児島支店
調査主体	志布志市教育委員会
調査責任者	志布志市教育委員会
教育長	坪田 勝秀
生涯学習課長	米元 史郎
文化財管理室長	竹田 孝志
兼指定文化財係長	上田 義明
主幹	村田 有子
主任主査	出口順一朗
主任主査	大庭 祥晃
調査事務局	相美伊久雄
理藏文化財調査員	板元 裕樹
臨時職員	追 さとみ 杉尾木の実

第3節 試掘調査

試掘調査は平成22年12月20日～平成23年1月5日に実施した（作業員実勤3日・延作業員数15人）。調査は対象地に3×2mのトレンチを1ヶ所設定し、人力で掘り下げを行った。なお、進入路が確保できず、重機は用いなかった。

表土からアカホヤ相当層上面まで満遍なく遺物が出土し、コンテナケース4箱分に至った。ただし、縄文～近世の遺物が混在する状況であった。そのため、一括取上げを行った。なお、アカホヤ相当層上面にて精査を行ったが、遺構は検出できなかった。その後、いわゆる「チヨコ層」相当層まで掘り下げを行ったが、遺構・遺物は確認できず、そして掘削深度が2mに達したため、それ以上の調査は断念した。

同一包含層から縄文～近世の遺物が出土するという調査結果から、調査対象地は地形的に東側からの流れ込みによって形成された可能性が高いと判断された。

第4節 本調査

平成23年5月2～12日において、物品貸借の入札・契約、事務所設置用地の賃貸借契約、外業作業員の雇用手続きなど、調査開始のための準備を実施した。

発掘作業は平成23年5月18日～7月15日（作業員実勤28日）に実施した。延べ作業員人数は225名、調査範囲は120m²である。

調査対象地は竹や雑木が生い茂る荒蕪地のため、表土（Ia層）には竹の根がとても多く、人力による掘り下げは困難を極めることができた。そのため、Ia層下位の竹の根が減るレベルまで重機で掘り下げ、それ以下は人力で掘り下げた。

試掘調査時には表土とアカホヤ相当層の間には單一の包含層（Ib層）が設定されていたが、Ib層の掘り下げを行っている過程で、その下部に黄褐色を多く含む土が認められたことから、新たに「Ic層」を設定した。Ib層とIc層の違いは遺物の出土状況にも表れており、Ib層出土遺物は破片が小さく、摩滅しているものが多く、一方Ic層出土遺物は破片が大きく、摩滅しているもののが少ないという傾向が認められた。

Ic層を掘り下げた時点で、調査区西側と北東側に池田跡下鉄石を含む層の存在が明らかになったため、この層を「II層」とし、アカホヤ相当層は「III層」となった。

III層（一部II層）上面での遺構検出において、試掘トレンチが溝状遺構内に位置していることが判明した。アカホヤ相当層上面まで繩文・近世の遺物が混在して出土する理由が、溝状遺構の埋土を掘り下げていたためであることが分かり、試掘調査時の判断は誤りであったことが判明した。

南壁際に土層観察用も兼ねて、幅80cmの下層確認トレンチを設定し、地表面下2mまで掘り下げた。しかし、試掘調査同様遺構・遺物は確認できなかった。また、東・西・北壁際には幅80cmの土層観察用トレンチを設定した。7月15日に重機により埋戻しを行い、事業者側に現場の引き渡しを行った。

なお、例年より早く梅雨入りしたこと（5月23日）、そして調査区が送電線鉄塔の真下ということで、大雨・落雷等の気象情報に注意を払った。さらに、調査期間後半には梅雨明けしたこと（6月28日）、気温が上がり、加えて調査区が竹林の中にあって風通しが悪いこともあります、適宜休息をとる等、熱中症予防に努めた。

発掘作業終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第4条第1項に基づいて、「埋蔵物発見届」（平成23年7月25日付）を志布志警察署へ、「発掘調査実施報告書」・「埋蔵文化財保管証」（平成23年7月25日付）を県教委に提出するなど、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

発掘作業の具体的経過は、日誌抄を週毎に集約して記載する。

（5月18～20日） 九州電力担当者との現地協議・調査区設定（18日）、調査区内外の環境整備・重機による表土剥ぎ（19H）、Ib層掘下げ。

（5月23～27日） Ib層掘下げ、硬化面検出・写真撮影、遺物取上（1～304）

（5月30日～6月3日） 28・29日に台風通過するも被害なし。Ib層掘下げ、Ic層掘下げ（1日）、遺物取

上（305～1399）。

（6月6～10日） Ic層掘下げ、土坑（SK）1検出・掘下げ、II・III層検出後精査、竪穴建物（SK）・溝状遺構（SD）1～4検出・遺物取上（1400～1853）。

（6月13～17日） Ic層掘下げ、SK1・SD1～3完掘・写真撮影・実測、SI・SD4掘下げ、遺物取上（1854～2059）。15～17日雨天中止。

（6月20～24日） 20・21日雨天中止、SD4・ピット完掘・写真撮影、SK2・SD5検出、SI掘下げ、南壁下層確認トレンチ掘下げ、遺物取上（2061～2260）。

（6月27～30日） SD5・ピット完掘・実測・写真撮影、SK2掘下げ、南壁下層確認トレンチ完掘・南壁土層断面・実測、東壁確認トレンチ完掘・遺物取上（2261～2290）。

（7月4～8日） SK2完掘・写真撮影、西壁下層確認トレンチ完掘・東・西壁土層断面実測・写真撮影、SI掘下げ・貼床確認、II層掘下げ、遺物取上（2291～2488）。

（7月10～15日） SK2実測・SI掘下げ・写真撮影・実測、北壁下層確認トレンチ完掘・北壁土層断面写真撮影・実測・遺物取上（2491～2703）。器材撤収（13日）、調査区埋戻し（14日）、事務所設置用借地ロータリー作業（15日）。

第5節 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業について、一部（遺物洗浄・注記）を発掘作業と並行して5月25日より、志布志埋蔵文化財収蔵整理作業室（以下、志布志作業室）で開始した。

発掘作業終了後、志布志作業室にて本格的な整理・報告書作成作業に入り、平成24年1月にかけて、選別・接合・実測・トレース・遺構製図・写真撮影・原稿執筆・編集などをを行い、1月31日の印刷原本に係る契約後、本書の刊行をもって、全ての業務を終了した。

以下、整理・報告書作成業務の具体的経過を毎月に記す。

（5・6月） 洗浄、注記。

（7月） 洗浄、注記・分類・選別・土器接合・圓面整理。

（8・9月） 分類：選別・白帳登録・土器接合。

（10月） 報告書掲載遺物抽出・実測・原稿執筆。

（11・12月） 実測・トレース・レイアウト。

（1月） トレース・レイアウト・原稿執筆・遺構製図・編集・契約。

（2・3月） 校正・遺物収納。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部に位置し、宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曾於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向かって湾口を開く志布志湾に面する。

本市の地形は東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は西側に旧期砂丘、新期砂丘に二分される砂丘海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の東部には日南層群が構成する急峻な山岳地帯がある。

その西側には入戸火碎流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主体をなす。このシラス台地は南流する前川・安楽川・菱田川など大小の河川による浸食作用によって細かく刻まれ、大小の狭長な台地となっており、前述の三河川の流域には高位・中位・低位の三段の段丘が認められる。

この地域の地質は古いほうから、日南層群・阿多島浜火碎流・夏井層・阿多(夏井)火碎流・旧期ローム層・入戸火碎流・新期火山灰層となる。日南層群は主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多島浜火碎流は夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多(夏井)火碎流は黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.5～10万年前とされる。入戸火碎流は海岸に沿った地域では海拔40m程のシラス台地を形成する。下部には大断層下軽石層が存在する。

安良遺跡は安楽川河口から約2km上流東岸の河岸段丘上に位置する。この段丘は、志布志町内でも最も広い平坦面をもつ町原台地の西側末端部に5～20mの比高差で一段低くなっている中位段丘である。この中位段丘は長さ約2km、幅約500mで、南北に細長く広がり、上面はほぼ平坦で標高20～30mを測る。

この段丘上には遺跡の立地が多く、古代から集落が形成されていたと考えられる。一方、高位段丘である町原台地は畠地として利用されてきたが、近年宅地化が進んでいる(第3回参照)。

第2節 歴史的環境

安良遺跡は昭和40年代に道路の拡張工事で発見された遺跡で、縄文土器・石製土器・土器等が見つかっている。

本遺跡が所在する志布志市には現在約500ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が認められている。戦後、志布志町の故瀬戸口壁氏を中心に分布調査・発掘調査が活発に行われており、学史上重要な遺跡が多い。近年では主に有明町に

おいて農道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の様相が明らかになりつつある。なお、本市は現在の行政区画では鹿児島県に属するが、過去は日向國に属しており、この地域の歴史・文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地域の影響も考慮する必要がある。

旧石器時代

ナイフ形石器・角錐状石器等が出土した志布志町中須B遺跡、松山町蘇野B遺跡、細石器が出土した志布志町道重遺跡、有明町和田上遺跡があるものの、調査事例は少ない。

縄文時代

志布志町では瀬戸口氏等による調査によって、「瀬戸口銀座」と呼ばれるほど多数の遺跡が見つかっている。

草創期 史上重要な志布志町東黒上田遺跡がある。隆代土器や舟形配石炉、貯藏穴が見つかっている。特に貯藏穴から出土した堅果類は日本最古である。同町鎌石橋遺跡でも隆代土器が出土している。

早期 前半期の集石や連穴土坑が多数見つかった志布志町倉園B遺跡、森ノ神A式竪形土器等の良好な資料が出土した同町夏井土光遺跡、連穴土坑の断ち割り調査を行ない「シミ状痕跡」を初めて検出した有明町下堀遺跡など、遺跡数が多い。

中期 曾畠式が出土した志布志町別府石碑遺跡があるが、調査事例は少ない。

中期 この時期も調査事例は少ないものの、春日式期の堅穴建物が見つかった松山町前谷遺跡、船元式が出土した志布志町野久尾遺跡など著名な遺跡がある。

後期 志布志町の中原遺跡と片野洞穴が有名である。中原遺跡では在地系の宮之迫式・指宿式と瀬戸内系の中津式・福田K II式・宿毛式の良好な資料が多数出土している。片野洞穴では西平式～御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨器が出土している。この他、後期のほぼ全ての型式が出土した同町家野遺跡、独鉛石が見つかった出口A・B遺跡がある。

晩期 黒川式干原段階の良好な資料が出土した志布志町小辺遺跡がある。

弥生時代

縄文時代に比べると調査事例は少ないものの、重要な遺跡が松山町に存在する。それは京ノ峯遺跡で、中期後半の円形・方形周溝墓が見つかっており、近畿・瀬戸内地方への影響が考えられている。また、県内で唯一の発見例である中庄銅鋸が有明町土橋遺跡で見つかっている。中期後半山口ノ口II式期の堅穴建物の検出例が多く、松山町山口田遺跡・前谷B遺跡、志布志町柳遺跡、有明町長田遺跡・本村遺跡がある。このほか、志布志町夏井土光



9が安良遺跡

第1図 遺跡位置及び周辺遺跡図 (1 : 25,000)

遺跡では柱状片刃石斧が出土している。

古墳時代

集落遺跡は有明町において調査事例が多い。仕明遺跡では中津野一東原式期の、長田遺跡では後賀式期の堅穴建物が見つかっている。なお、安良遺跡と同時期の後賀式新段階の資料が見つかっている遺跡は有明町上苑A遺跡・中牟田遺跡、そして本遺跡のすぐ北に位置する宮脇遺跡がある。

古墳は有明町原田古墳・原田地下式横穴墓・馬場地下式横穴墓群・志布志町坂森山古墳・小牧1号墳・六月坂横穴墓があるものの、詳細な調査は行われていない。

六月坂横穴墓は明治42年旧制志布志中学校敷地整地の際に発見されたもので、終末期に位置づけられる須恵器が見つかっている。

古代

志布志町水ヶ追横穴墓で須恵器の蕭骨盤が見つかって

第1表 周辺遺跡地名表

遺跡番号 (H番号)	遺跡名	所在地	調査年 月日	古墳 時代	中世	清書番号 (JIN番号)	遺跡名	所在地	調査年 月日	古墳 時代	中世
1 15-110 (68-28) 大久保A	志布志町安楽字大久保	○○○				27 15-266 (68-195) ハケ代	志布志町安楽字ハケ代	○○○			
2 15-111 (68-29) 別附	志布志町安樂字別附	○○○				28 15-281 (68-210) 宮之上	志布志町安樂字之上	○○○			
3 15-139 (68-59) 山角A	志布志町安樂字山角	○○				29 15-296 (-) 上原	志布志町安樂字上原	○○○			
4 15-140 (68-60) 山角B	志布志町安樂字山角	○○○				30 15-297 (-) 大久保C	志布志町安樂字大久保	○○○			
5 15-141 (68-61) 広原	志布志町安樂字広原	○○○○				31 15-298 (-) 金ヶ道口	志布志町安樂字ヶ道口	○○○			
6 15-142 (68-62) 上原	志布志町安樂字上原	○○				32 15-299 (-) 七本松A	志布志町安樂字七本松	○○○			
7 15-191 (68-113) 西北穴	志布志町安樂字西北	○○				33 15-300 (-) 七本松B	志布志町安樂字七本松	○○○			
8 15-191 (68-114) 内盛	志布志町安樂字西北	○○○○				34 15-301 (-) 七重塚B	志布志町安樂字七重塚	○○○			
9 15-192 (68-115) 安良	志布志町安樂字安良	○○○○○				35 15-383 (69-82) 大馬	有明町野井食字大馬	○○○			
10 15-193 (68-116) 鳥居下	志布志町安樂字鳥居下	○○○				36 15-385 (69-84) 次瓦	有明町野井食字次瓦	○○○			
11 15-194 (68-117) 船邊	志布志町安樂字船邊	○○				37 15-388 (69-87) 馬	有明町野井食字馬	○○○			
12 15-209 (68-132) 大久保B	志布志町安樂字大久保はか	○○				38 15-389 (69-88) 横幅	有明町野井食字横幅	○○○○			
13 15-211 (68-133) 高牧	志布志町安樂字高牧	○○○				39 15-390 (69-89) 下段C	有明町野井食字下段	○○○○			
14 15-211 (68-134) 二重塚A	志布志町安樂字二重塚	○○				40 15-391 (69-90) 下段B	有明町野井食字二重塚	○○○○			
15 15-212 (68-135) 梅原原	志布志町安樂字梅原原	○○○				41 15-397 (69-96) 幸馬A	有明町野井食字幸馬A	○○○○			
16 15-213 (68-136) 納所上	志布志町安樂字納所上	○○○○				42 15-398 (69-97) 幸馬B	有明町野井食字幸馬B	○○○○			
17 15-223 (68-144) 内宮	志布志町安樂字内宮	○○○				43 15-399 (69-98) 幸馬C	有明町野井食字幸馬C	○○○○			
18 15-225 (68-148) 大渡	志布志町安樂字大渡	○○○○				44 15-400 (69-99) 乞乞	有明町野井食字乞乞	○○○○			
19 15-235 (68-159) 小牧・竹原群	志布志町安樂字小牧	○○○				45 15-402 (69-101) 今水B	有明町野井食字今水B	○○○○			
20 15-236 (68-160) 八木坂横斜面	志布志町安樂字八木坂	○○○				46 15-403 (69-102) 今水	有明町野井食字今水	○○○○			
21 15-237 (68-161) 木ヶ追横斜面	志布志町安樂字木ヶ追	○○○○				47 15-459 (69-158) 駿遊	有明町野井食字駿遊	○○○○			
22 15-238 (68-162) 山古富塙	志布志町安樂字山古富塙	○○○○○				48 15-460 (69-159) 上丸	有明町野井食字上丸	○○○○			
23 15-242 (68-166) 水神松	志布志町安樂字水神松	○○○				49 15-461 (69-160) 五輪	有明町野井食字五輪	○○○○			
24 15-250 (68-176) 安楽城跡	志布志町安樂字前原	○○○○○				50 15-462 (69-161) 上丸B	有明町野井食字上丸B	○○○○			
25 15-251 (68-180) 金ヶ追A	志布志町安樂字金ヶ追	○○○○○				51 15-463 (69-162) 下段A	有明町野井食字下段	○○○○			
26 15-265 (68-194) 佐惣	志布志町安樂字外堀	○○○○○									

いること以外、目立った調査事例はない。

中世

国指定史跡である志布志城跡が有名である。志布志城とは内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。

志布志城は文治5(1189)年頃の教仁院氏の居城に始まって以来、数々の領主に移り変わっており、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り広げられた場所であった。保存整備目的で継続的に調査が行われており、中世後期の中国窯陶器や東南アジア窯陶器が出土している。

市内にはこの他、建久(1190~1198)年間に地頭片瀬使安楽平九郎が為成の居城とされる志布志町安樂城跡、文治4(1188)年に平重賴によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期(1359年)に教仁郷氏の居城とされる有明町蓬原城跡などが存在する。

中世山城以外の調査事例は少なく、有明町長田遺跡、仕明遺跡で中世幕が見つかっている。長田遺跡例は王絆口縁の白磁碗が発見されている。本遺跡から約1km北には安楽山宮神社があり、明治26年境内から青白磁四耳壺の藏骨器や鏡・太刀・青白磁合子などが見つかっている。

この地域は中世において日向国諸郡教仁院・教仁郷とされた。また志布志の名が史料で跡がめられるのは、正和5(1316)年のことで、「日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地…」(「沙弥蔵正打渡状案」)とあり、万寿三(1026)年平季基が開いた鳥津庄・日向諸郡一

帯の港であったと考えられている。

近世

日向国諸郡志布志郷とされ、東を秋月藩と接するところから諭海ともにきわめて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地原仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「籠」を形成していた。藩米等の集積・積出港であった前川河口には津11番所が置かれていた。藩政末期には琉球を通しての密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は密貿易屋敷と呼ばれていた。これら地頭仮屋跡・津11番所跡・密貿易屋敷跡は発掘調査が行われ、陶磁器類が出土している。

近代

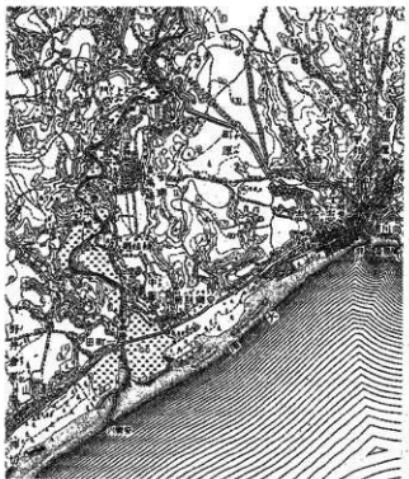
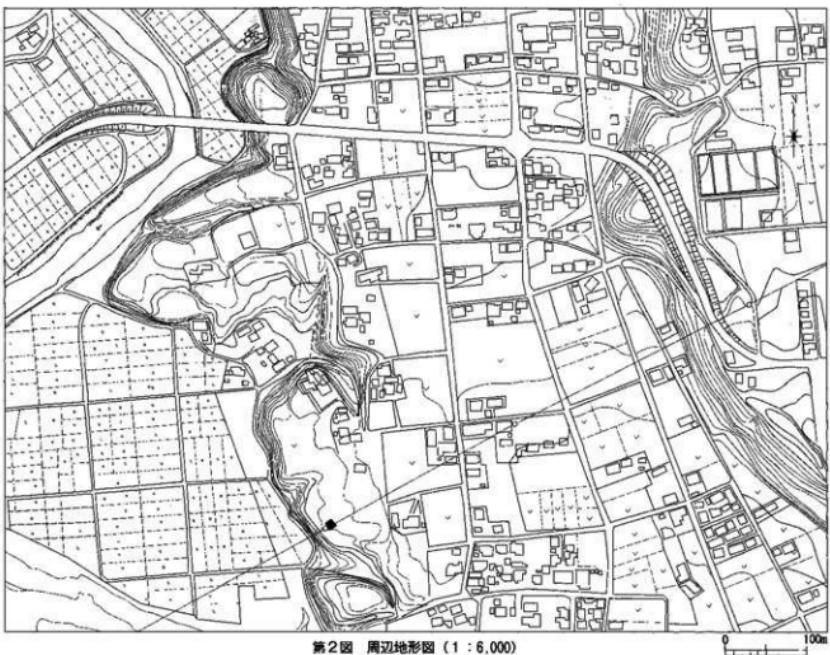
太平洋戦争末期、アメリカ軍の南九州上陸作戦(オリンピック作戦)を予想した日本軍は志布志湾沿岸に洞窟式の堆下陣地を造った。その現存している一つが、志布志町権現島水原陣地跡である。また、安楽川を挟んで本遺跡の対岸にある野井倉台地には戦争末期に飛行場(野井倉飛行場)が建設されている。なお、地域住民の話によると、本遺跡北側に陸軍の兵舎があったということである。

(参考文献) 半井振興を報告書は新委した。

志布志町可燃収集委員会 1972 「志布志町誌」 上巻

志布志町教育委員会 1985 「志布志の歴史文化財」

大木公彦・内村公大 2012 「夏井海岸の地形・地質調査報告書」 志布志教育委員会



(明治35年)



(平成12年)

第3図 周辺環境の変遷 (1 : 60,000)

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法

1 発掘作業の方法

調査範囲は新設鉄塔の基礎となる直径4.5mの逆T基礎4脚全てが範囲に含まれるように設定した。ただし、九州電力側と協議の結果、西側は既設鉄塔の土台への影響を考慮し3m控えたことにより、12×10mの範囲となつた(第4図)。

調査区の基準軸は、既設鉄塔と新設鉄塔の中心を結ぶ直線を東西軸とし、これに直行する軸を南北軸とした。レベルは、九州電力が新設鉄塔の中心に設置した杭(海抜21.9m)から引用した。

発掘作業はまず竹払いを行った後、竹の根が著しいIa層を重機により除去し、Ia層最下部から人力(鋤鏟・山鋤)により振り下げを行った。

包含層(Ib・Ic層)から出土した遺物について、小片は一括取上げを行い、それ以外の遺物は必要に応じて写真撮影を行い、その後平板測量により取上げた。試掘調査結果から、縄文～近世の遺物が混在することが分かっており、その出土状況を図示する目的で平板測量を用いた。第5図から、縄文～近世の遺物が混在していることが分かる。遺物の写真撮影は大型の破片で、時期比定できるものを主な対象とした。

出土遺物のうち平板取上げを行ったものは、包含層・遺構合わせて2,708点で、一括取上げ分を含めると5,000点以上(コンテナケース18箱分)になる。

遺構検出はⅡ層及び一部残存しているⅢ層上面において行った。

2 遺構の調査方法

検出された遺構には竪穴建物(SI)、溝状遺構(SD)、土坑(SK)、古道、ピットがある(第5図)。これらの遺構は検出状況の写真撮影後、出土遺物の取上げ、土層断面

実測・撮影、完掘、完掘状況実測・撮影を行った。

振り下げは埋土の違いを比較しながら、移植ゴテで行った。出土遺物は、指先程の小片は一括取上げを行い、それ以外は平板取上げを行った。ただし、竪穴建物に関しては小片でも特徴的なものは平板取上げを行った。

竪穴建物・古道・土坑1号は個別に実測を行い、溝状遺構・土坑2号・ピットは調査区内に格子状に設定した実測基線を用いた。

調査中及び終了後、遺構の検出層や埋土状況、遺構内出土遺物、土層断面等の情報から、遺構の形成時期や性格等の検討を行った。

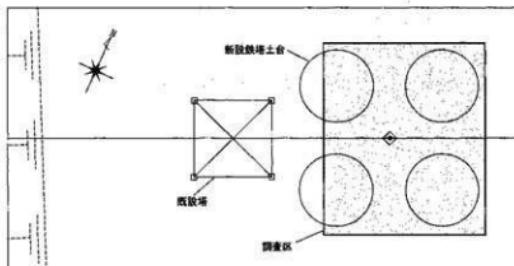
3 整理作業の方法

上器等の洗浄はブラシを用い、鉄器等の金属製品は筆で土の除去を行い、乾燥剤とともにボリ袋に保存した。

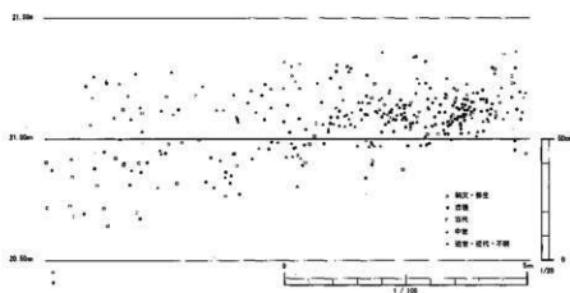
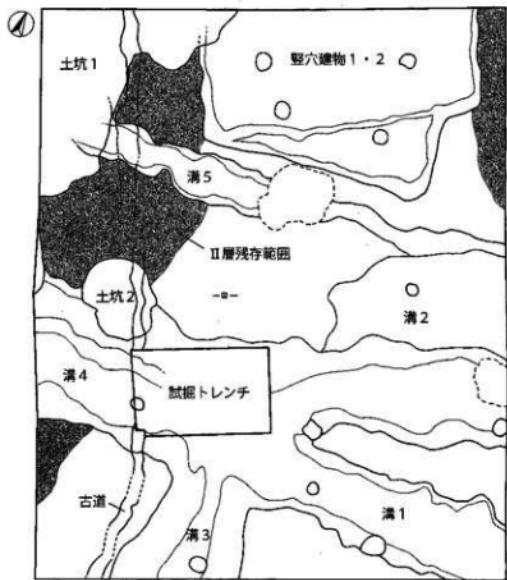
注記は遺跡名を表す「YSR」を頭に、包含層出土遺物は続けて「層」「取上番号」の順で記入した。遺構出土遺物は「YSR」に続けて「遺構記号」「取上番号」の順で記入した。なお、一括取上げを行った遺物の中で、特徴のない小片は注記を省略した。

接合は縄文・弥生・古墳時代土器、須恵器、古代土器、中世土器、陶器、磁器等に分類した後行った。そのなかでも、最も出土量の多い古墳時代土器は器種ごと、加えて類似する胎土ごとに細分した後、接合を行った。時間的制約から、遺構内出土遺物と比較的大型で器形の分かる遺物を優先した。また、遺構間や遺構と包含層間の接合も試みた。

接合後、実測のための抽出を行った。小片であっても各類の中で少数のものや時期比定できるものは抽出した。一方、各類の中で数量が多いもの(古墳時代土器や土器)は器形が分かるものを優先した。分類の詳細については時代ごとに述べる。



第4図 調査区位置図 (1:300)



第5図 造構配置図・出土遺物分布図（南壁側からの見通し）

第2節 層序

基本層序は第6図に示した。なお、土層断面図(第7図)から、地形が北西側に傾斜していることが分かる。以下、各層について説明する。

I a層：黄灰～灰黄褐色(2.5Y5/1～10YR4/2)の砂質が強いシルト質土で、締まりはない。層厚は約40cm。表土である。周辺住民によると20年程前まで畠地として利用されていたということであるが、現況は竹林であり、竹根が著しく入り込んでいた。

I b層：褐灰色(10YR5/1)のやや砂質を帯びるシルト質土で、I a層より締まりがある。層厚は約20cm。繩文～近代の遺物を含む。近世の遺物は主に本層に含まれる。本層上面において、古道が検出された。

旧耕作土または畠地開発に伴う整地層と判断した。摩滅した土器の小片が多数出土しているためである。太平洋戦争時の銃弾が認められることから、近代以前には形成されていたと考えられる。

I c層：黒褐色(10YR3/1)のやや砂質を帯びるシルト質土で、締まりはない。下部にⅢ層上が混ざる。径5～10cm程の円礫を含む。層厚は約25cm。西壁側には、I c層に比べると砂質の無い層(I c'層)が存在する。

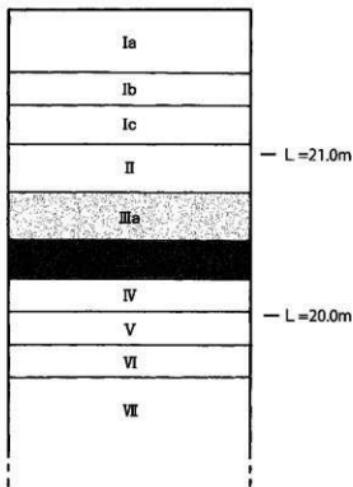
当初、通常の遺物包含層と捉えていた。しかし、土層断面の検討の結果、本層に締まりがないこと、溝状遺構の埋土との違いが認められなかつたこと、そして本層がⅡ層を掘り込んでいること等から、本層が溝状遺構の埋土そのものである可能性も考えられた。ただし、調査面積が狭いために、断定できなかった。

II層：黒褐色(7.5YR3/1)のシルト質土で、締まりがある。径2～3cmの池田降下鉢石を含む。層厚は約30cm。調査区の西側と北東部のみ残存している。繩文後期前半の遺物を含む。本層上面において土坑1号を検出した。

III層：色調や硬さによりa・b層に細分できる。アカホヤ火山灰相当層である。試掘調査時のⅢ層。

IIIa層：褐色(7.5YR3/3)のシルト質土で、調査区南東部において残存しない箇所がある。層厚は約30cm。Ⅱ層及び本層上面において溝状遺構と古墳時代の堅穴建物を検出した。

IIIb層：明黄褐色(10YR6/6)のシルト質土で、かなり硬質である。径2cm弱の黄橙色輕石を含む。層厚は約25cm。



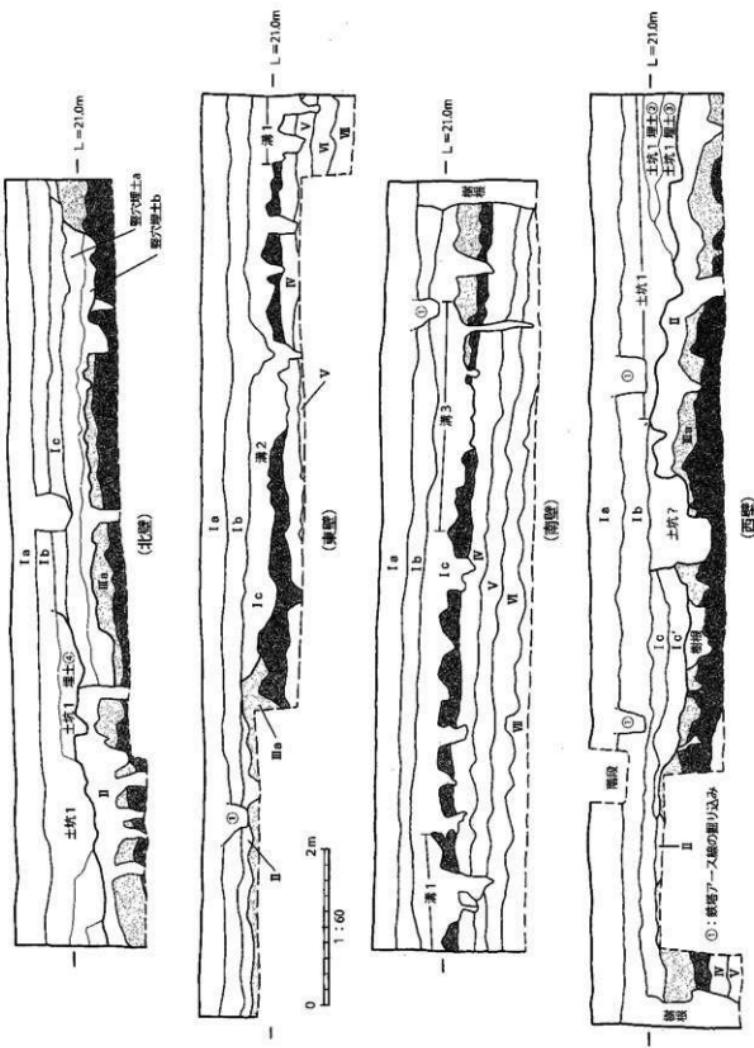
第6図 土層柱状図

IV層：褐～黒褐色(10YR4/6～10YR3/1)のシルト質土で、かなり硬質である。径2cm弱の黄橙色輕石を若干含む。層厚は約20cm。試掘調査時のⅣ層。

V層：褐色(10YR4/6)のシルト質土で、粘性が強い。層厚は約20cm。試掘調査時のⅤ層。

VI層：橙～にぶい橙色(7.5YR6/6～6/4)のシルト質土。層厚は約20cm。試掘調査時のⅥ層。

VII層：明黄褐色(10YR7/6～6/6)の砂質土で、径2～5cmの礫を含む。段丘砂礫層である。上位はやや粘性が認められるが、下位ほど砂質が増し、川砂のようになる。層厚は50cm以上。試掘調査時のⅦ層。



第7図 土壌断面図

第4章 調査の成果

第1節 縄文・弥生時代の調査

1 調査の概要

縄文または弥生時代と判断できる遺構は確認できなかった。

縄文時代の遺物のほとんどが I b・I c 層から出土しており、他時期のものと混在している。調査区にわずかに残存していた II 層からは 1 点のみ出土している。

弥生時代の遺物は I c 層から極少量出土しており、他時期のものと混在している。なお、古墳時代初頭に比定できる可能性があるものもここで扱う。

2 縄文時代土器（第8図1～13）

形態及び文様により、6 類に分類した。1 類は後期前半、2 類は後期後半、3～6 類は晩期に比定できる。

1 類（1）

外面に凹線文を施し、内外面に貝殻条痕が残るもの。

2 類（2～4・9）

外面ともにミガキまたは丁寧なナデ調整を行い、器壁が厚手のもの。2・3ともに端部が肥厚する口縁部である。2 は 3～4 条の沈線文を巡らせ、内面に段をもつ。3 は肥厚部に凹点文を施し、内面に段をもたない。4 は小平底を呈する。

3 類（5・6・10）

外面にナデ調整または板状工具によるナデ調整を行うもの深鉢形土器である。5 は端部に突起が付く。

4 類（7・8）

外面ともにミガキ調整を行う浅鉢形土器である。7 は屈曲部以下にススが付着する。8 は沈線内に赤色顔料が認められる。

5 類（11・13）

外面ともにナデ調整または板状工具によるナデ調整を行う浅鉢形土器である。

6 類（12）

外面に轍状の圧痕をもち、内面はミガキ調整を行なうもの。補修孔が認められる。

3 縄文時代石器（第8図14～16）

縄文時代の石器は石製土器具、磨製石斧、磨石、剥片が認められた。

石製土器具（14）

8 点確認し、1 点図示した。短冊形とラケット形が認められる。石材は頁岩（6 点）と安山岩（2 点）である。

磨製石斧（15）

3 点確認し、1 点図示した。全て頁岩製である。15 は敲打により調整され、刃部を丁寧に磨いている。基部中央はやや磨滅しており、装着痕と考えられる。

磨石（16）

砂岩製で、敲打痕は認められない。

剥片

黒曜石製で、1 点出土した。三船産と推定される。

4 弥生時代遺物（第8図17～19）

弥生時代の遺物は、土器が 4 点のみ認められた。そのうち、中期のものが 2 点、終末期～古墳時代初頭のものが 2 点である。形態により、3 類に分類した。

1 類（17）

2 点確認し、1 点図示した。「へ」字状を呈する壺の口縁部で、端部内面にわずかな段を有する。

2 類（18）

「く」字状に外反する壺の口縁部である。外面には胴部との境に段が認められる。1 点のみ確認した。

3 類（19）

壺の脚台で、脚台内面天井部は丸い。脚端部内面に粘土片が付着している。1 点のみ確認した。

第2節 古墳時代の調査

1 調査の概要

遺構は II 層及び III a 層上面において、竪穴建物（SI）が 2 軒重複して検出された。

遺物は主に I b・I c 層及び竪穴建物内から出土している。包含層出土遺物は他時期のものと混在している。

2 竪穴建物（SI）1・2 号（第9図）

検出 調査区北壁際において、II 層及び III a 層上面で検出された。北半分は調査区外に延びている。検出時の平面形は $6.0 \times 4.0\text{m}$ の隅丸方形を呈しており、東側に三角形状の張り出し部をもつ。竪穴西壁の一部は土坑 1 号によって切られている。

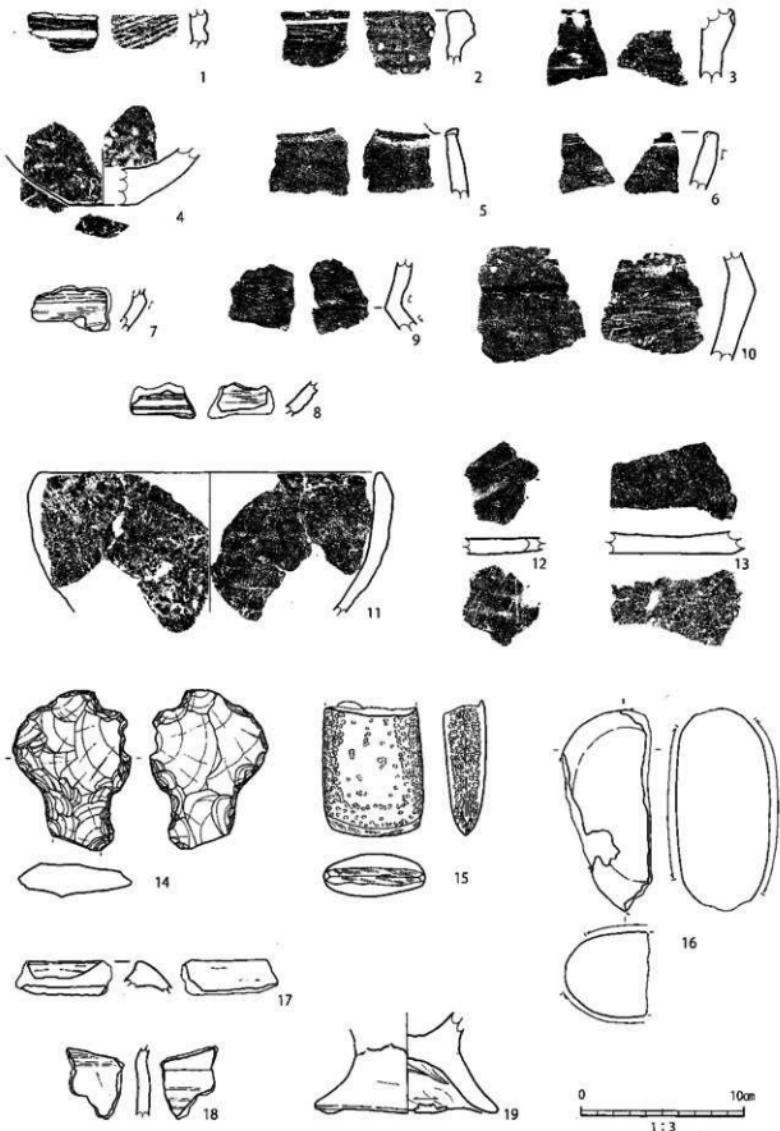
この平面形から 2 軒の重複が想定できたため、東西を通るベルト（C-C'）を基準に、2 本の直行するベルトを竪穴建物の中心を通ると予想される部分（B-B'）と切り合いで予想される部分（A-A'）に設定して掘り下げを行った。

埋土 a 竪穴埋土は 2 層（a・b）に分けられ、埋土 a は竪穴廃絶後の埋没土、埋土 b は貼床である。

埋土 a：黒褐色（10YR2/2）のシルト質土。池田降下輕石やⅢ層上を若干含む。層厚は約 10～15cm。

埋土 b：黒褐色（10YR2/2）のシルト質土で、締まっている。ブロック状の II・III 層土を含む。上面が硬化している箇所がある。層厚は約 10cm。

硬化面 掘り下げを行うと、竪穴中央付近において、アバタクの凸凹をもち、移植ゴテでは容易に削れないほど硬化した面を検出した。この硬化面の広がりを把握す



第8図 縄文・弥生時代遺物

るために検出したレベルで精査したが、残存していたのは竪穴の中央付近のみであった。この硬化面を床面（生活面）と捉え、この面とは同じレベルを床面の下端とした（一点破線）。なお、床面は検出面からの深さ約15cmを測るが、西半はほぼ検出面と同じレベルとなる。

竪穴の切り合い　重複した竪穴の切り合い関係は掘土から把握できなかったものの、硬化面の広がりから東側の張り出し部が古い竪穴（SI 1）、その他の部分が新しい竪穴（SI 2）と判断した。

掘方　硬化面の範囲を実測後、貼床の掘り下げを行い、掘力を検出した。掘方の基盤層はⅢ層で、検出面からの深さは20～30cmである。掘方は2段になっており、深い方がSI 1の掘方である。なお、この掘方から推定できる竪穴の規模はともに一辺約5.0mである。

柱穴　柱穴は硬化面を含む床面では確認できず、貼床除去後に掘方床面において4基検出した。柱穴の直径は約40cmで、検出面からの深さは約30cmを測り、基盤層はⅢb層である。埋上は黒褐色（10YR3/2）のシルト質土で、締まりがなく、Ⅱ・Ⅲ層土を含む。位置関係から、P 1・P 2がSI 1に、P 3・P 4がSI 2に伴うと考えられる。なお、竪穴外に柱穴は確認できなかつた。

生活施設　炉や焼土・炭化物の広がりは認められなかつた。竪穴の検出時に、竪穴の南壁中央付近に径20cm大の被熱した礫が並んでいたことから、カマドの可能性も想定し、特に注意して調査を行つた。しかし、焼土や炭化物は認められなかつた。

なお、この礫集中箇所と竪穴中央付近のベルトの土壤については、動植物遺存体などの微細遺物の抽出を目的にサンプリングを行つてゐる。ただし、時間的制約があり分析までは至らなかつた。

遺物　遺物は大型のものや小片でも特徴的なものは平板測量で取上げ、それ以外は竪穴埋土一括として取上げた。また、貼床出土遺物は別に取り扱つた。

遺物は平板取上げを行つたもので564点を数え、一括取上げを含めると1500点以上になる。その全てに目を通し、器種が判断できるものについては分類したが、出土遺物のほとんどは無文の鉄部小片であった。

埋土a出土遺物はSI 1・SI 2の分別が困難ため一括して扱つたが、そのほとんどはSI 2のものと考えられる。一方、貼床出土遺物、特に硬化面より下位で出土したものはSI 1のものである可能性が高い。

竪穴内出土遺物（第10～12図20～60）

土器、須恵器、石器、鉄製品のほか、繩文土器、そして樹木等の要因でI c層から落ち込んだと考えられる中世須恵器・磁器が認められ、41点図示した。

なお、貼床出土遺物は20・38・43、床面直上出土遺物は21・29・30である。

I c層出土として取り上げた遺物の中で、出土レベルから判断すると竪穴内出土遺物の可能性が考えられるものがあった。ここでは後述する包含層出土遺物として報告するが、遺物分布図（第9図）には参考のために掲載した（△）ドット。以下、包含層出土の遺物分類に準じて報告を行う。

甕（第10・11図20～35）

口縁部1類（26）

直行するもの。35点確認し、1点図示した。26は突帯下面に貼付時の指頭痕が残る。粘土帶幅は1.5cm。

口縁部2類

内湾するもの。2点確認したが、固化しなかつた。

口縁部3類（23～25）

口縁端部でやや外反するもの。17点確認し、3点図示した。

口縁部4類（20～22・27）

口縁端部外面に粘土絆を貼付し、肥厚させるもの。8点確認し、4点図示した。

20は全形が復元できたもので、内傾する口縁の端部に粘土絆を貼付する。外面の突帯上位には細かい擦痕が残るヨコナデ調整を行う。突帯は剥みがなく、下面に指頭痕がわざかに残る。器皿には接合痕が凹立ち、粘土帶幅は1.5～2.0cmである。

21は強く内湾する口縁の端部に粘土絆を貼付するもので、一見瘤形を呈する。外面はミガキ調整を行うが、接合痕が目立つ。粘土帶幅は1.0～1.5cmである。薄手の作りである（器壁厚0.7～1.0cm）。

22は突帯に太めの刻み（20×10cm）を施す。突帯下面に指頭痕が残る。粘土帶幅は1.0～2.0cm。

口縁部5類（28）

口縁端部外面に幅広の粘土絆を貼付し、そこに刻みを施すもの。4点確認し、1点図示した。28は「×」字状の刻みを施し、刻目に布目痕がみられる。

底部

全て平底で、器皿には張り出しをもつものともたないものがある。

底部1類（33～35）

底面に木葉痕が認められないもの。26点確認し、3点図示した。

底部2類（29～32）

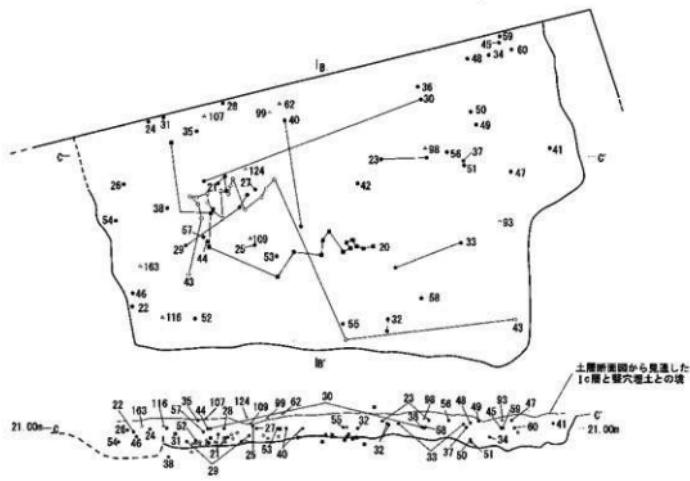
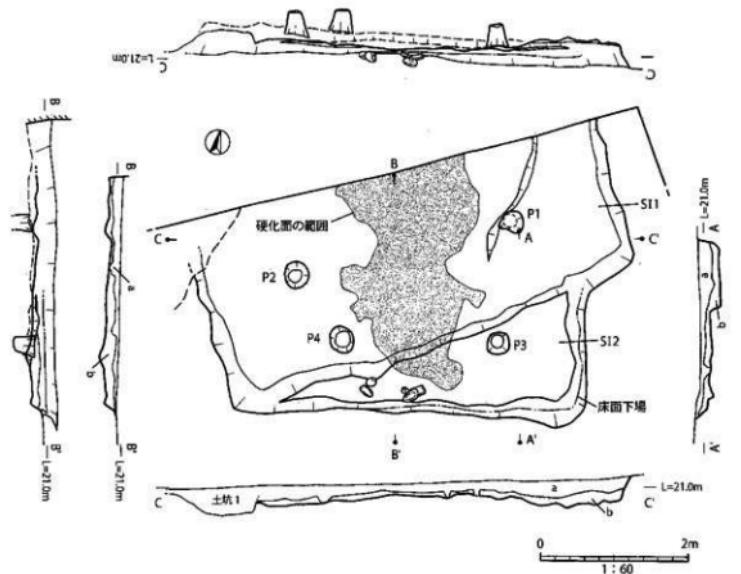
底面に木葉痕が残るもの。15点確認し、4点図示した。業の網目が確認できるほど明瞭に残るもの（30～32）とナデ消すものがある。

壺（第11図36・37）

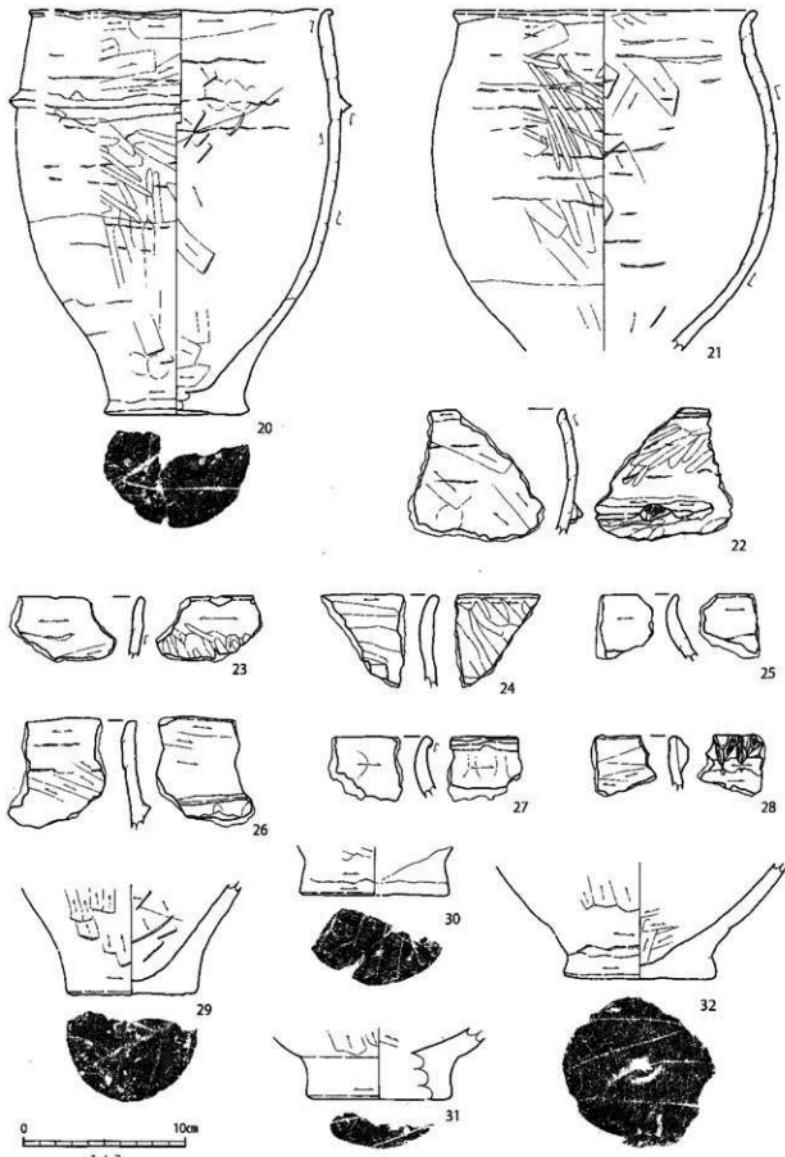
2点確認した。ともに筒抜け形である。

壺（第11図38）

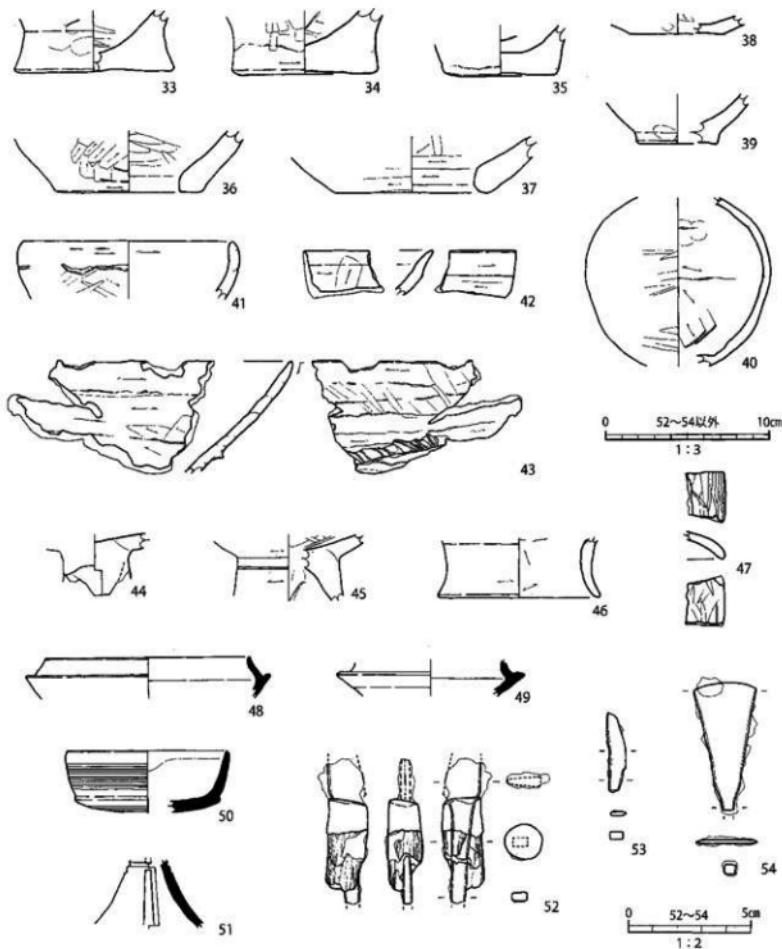
平底を呈するもので、1点確認した。



第9図 積穴建物跡1・2号平・断面見通し図及び遺物分布図



第10圖 竪穴建物跡1・2号出土遺物（1）



第11図 穴跡1・2号出土遺物(2)

鉢 (第11図39)

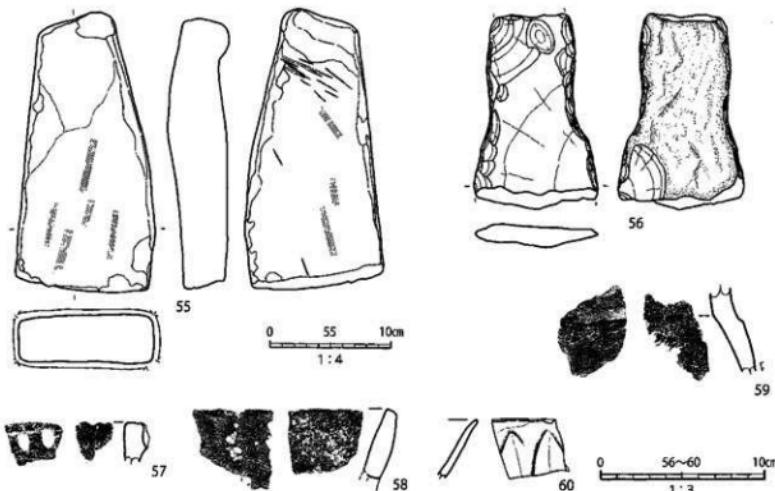
大きさや形態から、鉢と判断した。1点確認した。

壺 (第11図40)

球形の腹部をもつもので、1点確認した。

壺 (第11図41-42)

12点確認し、2点図示した。なお、高壺壺部の可能性があるものも含んでいる。



第12図 積穴建物跡1・2号出土遺物(3)

台付鉢（第11図43）

壺の可能性もあるが、器形の傾きから台付鉢と判断した。1点のみ確認した。薄手の作りで器壁厚0.6cm。器面には接合痕が目立ち、粘土帯幅は1.0~1.5cm。

高杯（第11図44）

4点確認し、1点図示した。44は脚部の「充填用円錐塊」である。

脚台（第11図45・46）

高杯または台付鉢の脚台と考えられるものである。19点確認し、2点図示した。

蓋（第11図47）

器形的に壺に類似するが、器高の浅いものを蓋と捉えた。2点確認し、1点図示した。

須恵器（第11図48~51）

15点確認し、4点図示した。48・49は壺身で、48は立ち上がりがやや短く内傾し、端部は丸みをもつ。50は無蓋高杯で、壺部内面に自然軸がかかる。51は長脚二段透しの高杯脚部である。

鉄製品（第11図52~54）

3点確認した。52は刀子で、刃部が欠損している。幅1.5cmの鍔が接着されている。柄は木製である。53は小型刀子の刃部と判断した。長頭鑓の可能性もある。54は方頭鑓で、闊は緩やかである。

石器（第12図55・56）

2点確認した。55は鉄器用の砥石である。四面に磨面

が認められ、裏面には線状痕が残る。56はラケット形を呈する石製土器具である。縄文時代の可能性も考えられるが、南九州では古墳時代にも存在していることから、ここでは古墳時代のものとして扱う。

縄文土器2類（第12図57~59）

19点確認し、3点図示した。内外面ともにミガキ調整を行うもの。57は肥厚部に幅広の刻みを施す。

輸入磁器（第12図60）

白磁・青磁の2点確認した。60は蓮弁文を施す龍泉窯系青磁碗II類である。白磁は白磁碗IV類である。

2 包含層出土遺物

本遺跡において、包含層出土遺物の中で最も出土量が多いのは古墳時代のものである。土器（壺・壺・瓶・高杯・壺・台付鉢・蓋）と須恵器が認められたものの、出土遺物の多くは無文の胴部片で、器種不明のものである。分類は口縁部・底部・突起部といった特徴のあるものを中心につなめた。

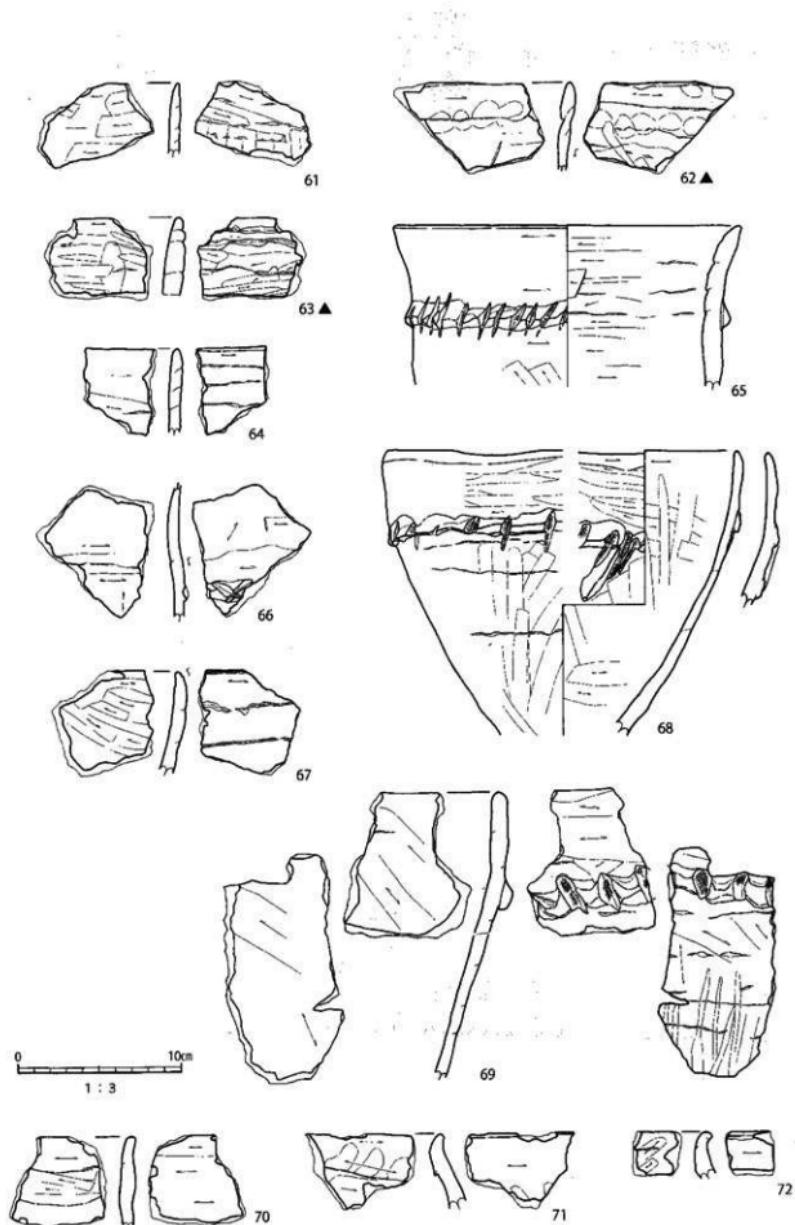
なお、積穴建物内出土の可能性が考えられる遺物には、報告書番号横に「▲」印を付した。

壺

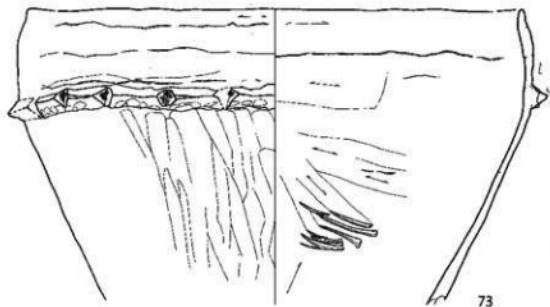
最も出土量が多く、ここでは口縁～胴部と底部に分けて説明する。

壺口縁部（第13・14図61~81）

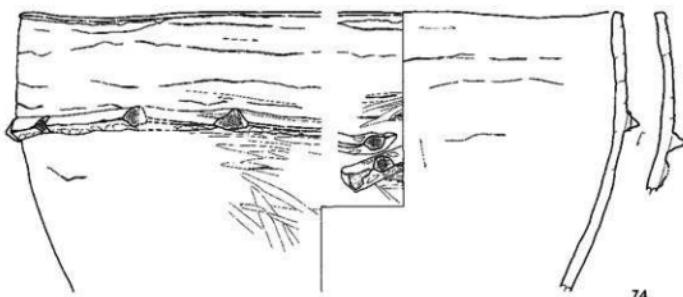
形態により、以下の5類に細分した。なお、瓶の口縁部が含まれている可能性がある。



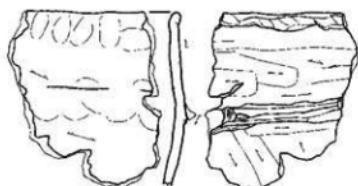
第13図 古墳時代包含層出土遺物（1）



73



74



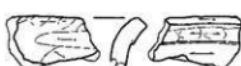
75



76



77



78



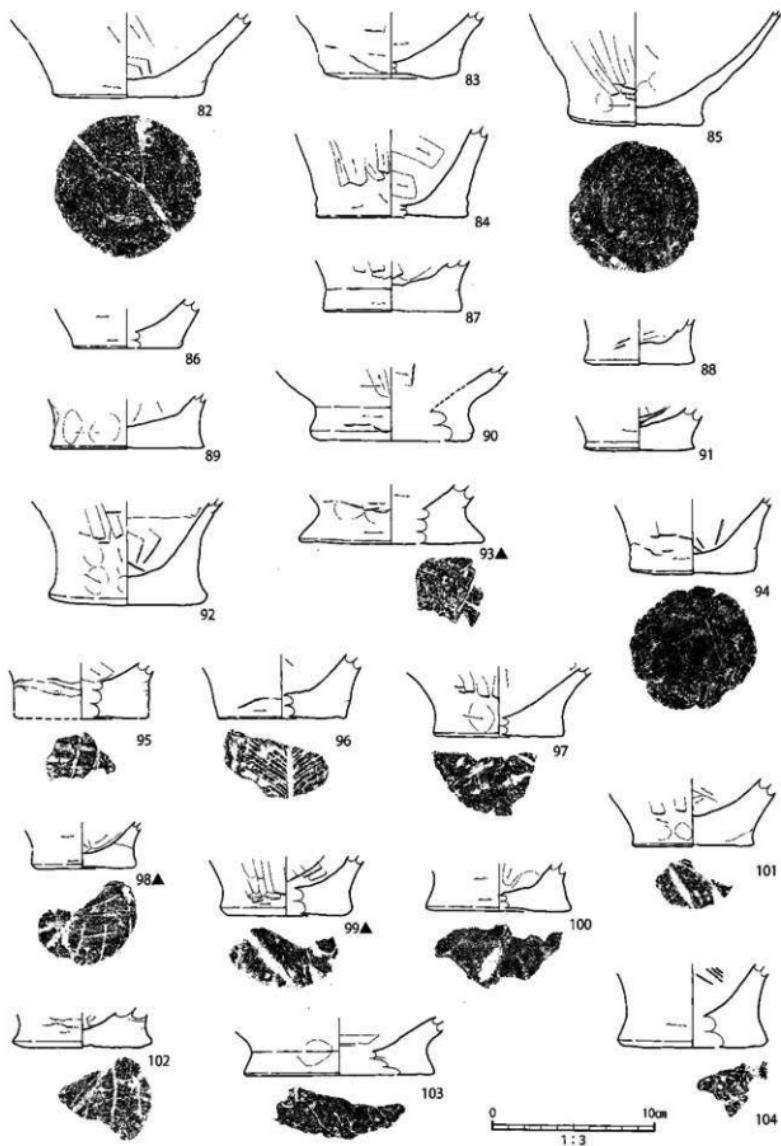
80



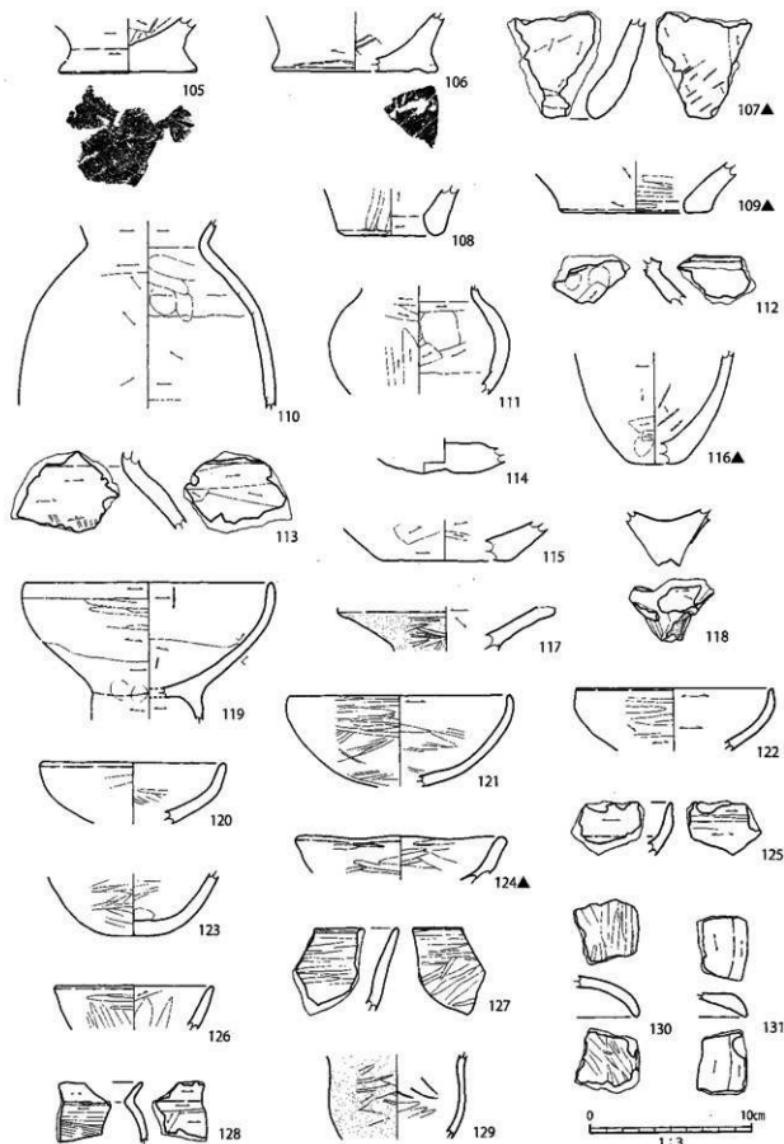
81

0 1 : 3 10cm

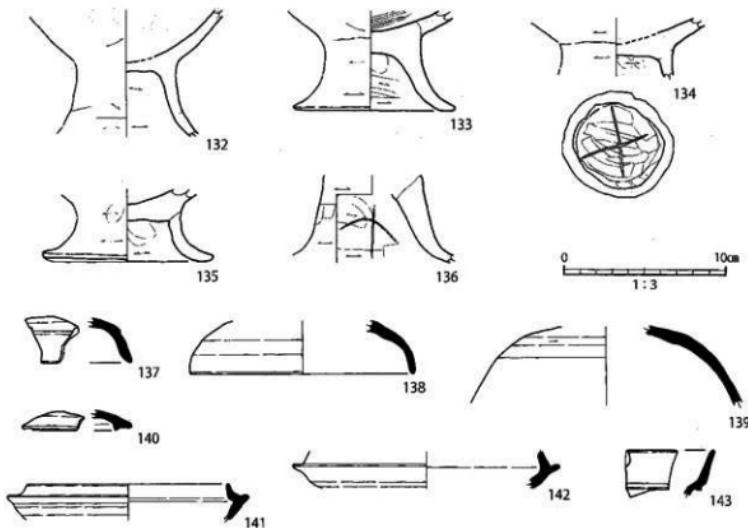
第14図 古墳時代包含層出土遺物（2）



第15図 古墳時代包含層出土遺物（3）



第16図 古墳時代包含層出土遺物（4）



第174図 古墳時代包含層出土遺物（5）

全体的な傾向として、器面に粘土帯接合痕が目立つものが多い。脇部の外面はミガキ調整または丁寧なナナデ調整を行うことが多い。突帯に施す刻みには布目痕または縦位の筋状痕が認められる。外面色調の傾向として、橙色系と黄橙色系があり、前者が多い。

1類 (61~66)

直行するもの。94点確認し、6点図示した。

61~64は外面に接合痕が目立つもので、63は沈線状を呈する。粘土帯幅は61 (1.0cm)、62 (1.5cm)、63 (0.8~2.0cm)、64 (1.0cm) である。65は突帯の刻み間隔が1.0cmで、細長い刻目 (2.5×0.5cm) の中に縦位の筋状痕が認められる。粘土帯幅は1.5cm。

2類 (67~69)

内湾するもの。10点確認し、3点図示した。

68は突帯の始点と終点の合流点に粘土紐を貼付して垂下状にしている。刻み間隔は2.0cmで、細長い刻目 (2.5×0.6cm) の中に縦位の筋状痕が認められる。

69は刻み間隔は2.0cmで、刻目はやや太く (3.0×1.0cm)、布目痕がみられる。なお、粘土帯幅は67 (2.0cm)、69 (1.8cm) である。

3類 (70~73)

口縁端部でやや外反するもの。24点確認し、4点図示した。73は断面・三角形の突帯を巡らせるもので、突帯上

面のみヨコナデ調整を行うため、下面には指頭痕が残る。刻み間隔は4.0cmで、刻目は太く (1.2×1.0cm)、布目痕がみられる。粘土帯幅は2.0cm。大きさの割には薄手である (器壁厚0.5cm)。

4類 (74~79)

口縁端部外面に粘土紐を貼付し、肥厚させるもの。肥厚部が幅広のものもある。28点確認し、6点図示した。74は73と同じく突帯下面に指頭痕が残る。刻み間隔は6~10cmで、太めの刻目 (1.5×1.0cm) の中に布目痕がみられる。口縁端部外面はヨコナデ調整を行い、細かい筋状の擦痕がみられる。粘土帯幅は1.5cm。大きさの割には薄手である (器壁厚0.8cm)。

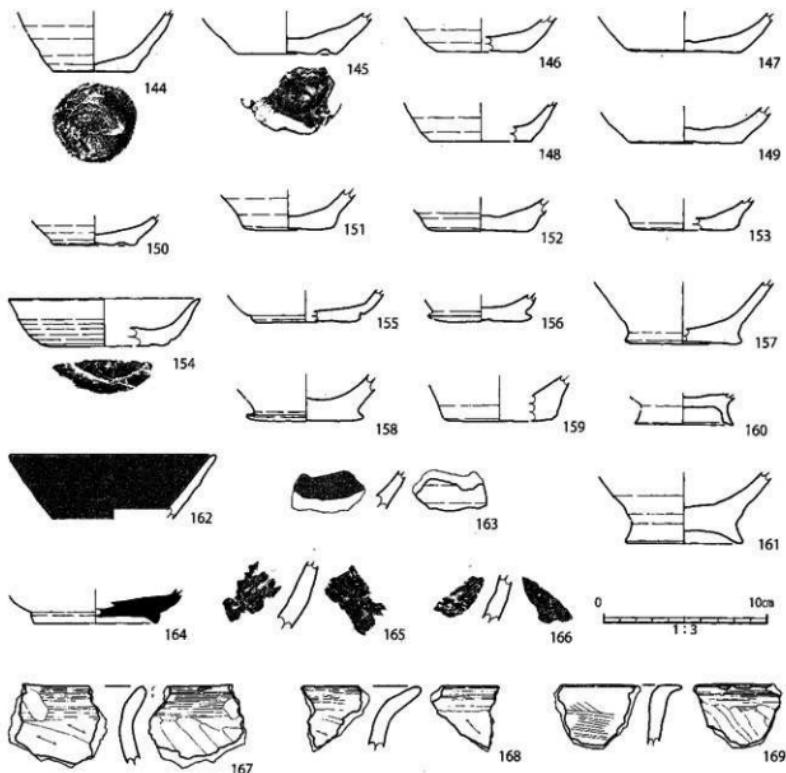
75は刻み間隔7.0cmで、粘土帯幅は1.5cm。76の粘土帯幅は1.5~2.0cm、77は0.7~1.5cmである。

5類 (80~81)

口縁端部外面に幅広の粘土紐を貼付し、肥厚させ、そこに刻みを施すもの。2点確認した。80・81ともに刻目の中に布目痕をもつ。

縫底部 (第15・16図82~106)

全て平底であり、脚台は認められない。底面の木葉痕の有無により、2類に細分した。器形には張り出しをもつものとみなしがある。外面はタテケズリまたはタテナデ調整を行なうものが多い。なお、繩文後期土器の



第18図 古代遺物

底部である可能性も考えられるが、器面調整や成形技法などから古墳時代のものと判断した。

1類 (82~92)

底面に木葉痕が認められないもの。82点確認し、11点図示した。82・85は底面上に接合痕が環状に残る。

2類 (93~106)

底面に木葉痕が残るもの。60点確認し、14点図示した。葉の細脈が確認できるほど明瞭に残るもの（101・102・106）や、ナデ調整により不明瞭なものがある。樹種について、96はオタニワタリであるが、他は判断できなかった。なお、103は葉の縁に丸味のある鋸歯をもつ。

3類 (第16図107~109)

6点確認し、3点図示した。全て筒抜け形である。

壺 (第16図110~116)

24点確認し、7点図示した。110・111は無文で、112は頭部に突帯を施す。やや丸みのある平底である。

高坏 (第16図117~119)

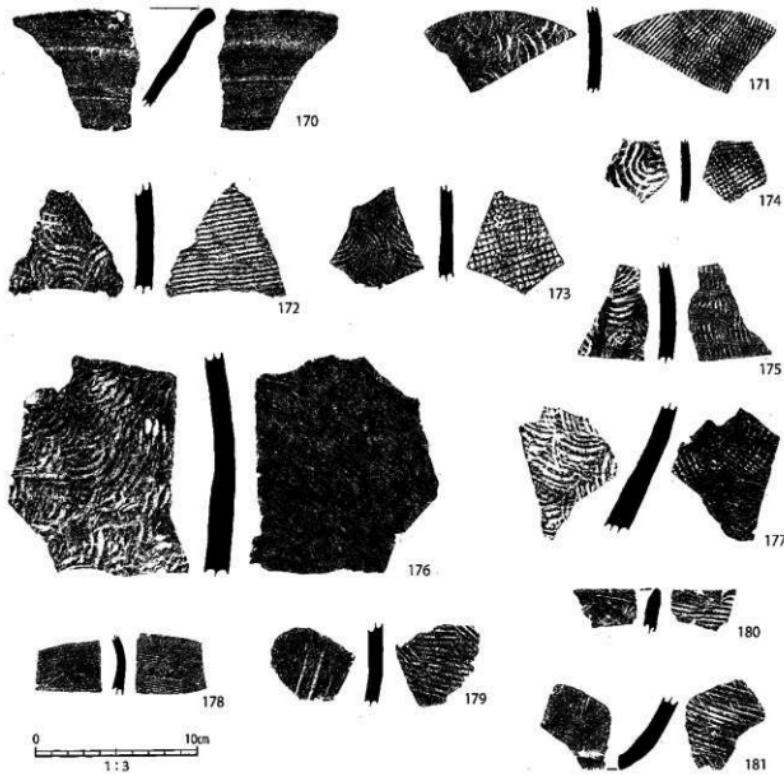
10点確認し、3点図示した。117は接合痕で剥離していることから、肩曲するタイプと考えられる。118は高坏脚部の「充填用円錐塊」である。

坏 (第16図120~129)

98点確認し、10点図示した。坏としたが、高坏の坏部の可能性があるものも含んでいる。椭形を呈するものや深いものの（127・129）、屈曲するもの（128）がある。

蓋 (第16図130・131)

7点確認し、2点図示した。器形的に坏と類似するが、



第19図 古墳時代～古代須恵器

器高の浅いものを蓋と捉えた。

脚台（第17図132～136）

高壺または台付鉢の脚部と考えられるものである。50点確認し、5点図示した。134・135は脚台内面に「×」字状の細沈線を施す。

須恵器（第17図137～143）

坏蓋・坏身・はそう等29点確認し、7点図示した。

137～140は坏壺である。137は口縁部と天井部の境に沈線をもち、口縁端部は内傾する。138は口縁部と天井部に棱ではなく、口縁端部を丸く仕上げる。140は口縁端部にかえりをもつ。141・142は坏身で、141は立ち上がりが短い。坏蓋・坏身とともに口径が大きめである。

第3節 古代の調査

1 調査の概要

確実に古代と判断できる遺構は検出できなかった。遺物は主にI b・I c層から出土しているが、他時期のものと混在している。土師器（坏・碗・黒色土器・壺）、須恵器、製塙土器が認められた。

2 遺物

土師器坏（第18図144～159）

62点確認し、16点図示した。小片や磨滅しているものが多く、全形が把握できるものはほとんど認められない。底部形態により、以下の3類に細分した。

1類（144～147）：底部から丸味をもって立ち上がるもの。

2類 (148 ~155): 底端部をナデることにより、段をもって立ち上がるるもの。

3類 (156 ~159): いわゆる「充実高台」をもつもの。

胎土について、軟質で粉っぽいものと焼き締まって堅硬なものがあり、前者が多い。色調について、灰白~浅黄褐色系が多く、赤褐~橙色系が少ない。

土師器椀 (第18図160・161)

8点確認し、2点図示した。高台を有するものを椀として扱った。160は高台端部に面を有し、中央がやや凹み、外端部で接地する。堅硬な胎土である。

黒色土器 (第18図162・163)

12点確認し、2点図示した。162は内外面ともに黒色を呈する黒色土器B類である。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。163は内面が黒色を呈し、ミガキ調整を行なう黒色土器A類である。

須恵器 (第18図164)

断面三角形状の低い高台が底端部に付く椀である。1点確認した。

製塙土器 (第18図165・166)

9点確認し、2点図示した。内面に布痕が認められる。残りが悪く、全て指先ほどの小片である。確認された破片は同一個体の可能性が高い。

土師壺 (第18図167 ~169)

7点確認し、3点図示した。「く」字状に外反するものと鶴部が「L」字状に屈曲するものがある。口縁部は短めである。

古墳時代~古代須恵器 (第19図170 ~181)

ここでは古墳~古代に属するが、確実な時期の比定が出来なかつた須恵器を一括して扱う。36点確認し、12点図示した。壺または壺と思われる。

外面は平行タタキ・格子目タタキをそのまま残すものやタタキ後にスリケン調整やカキ目調整を行うものがある。内面は同心円タタキのものと同心円タタキ後スリケン調整を行なうものがある。

179~181は橙色を呈する赤焼きの須恵器で、同一個体の可能性が考えられる。181は器種不明で、天地が逆の可能性もある。

第4節 中世の調査

1 調査の概要

確実に中世と判断できる遺構は検出できなかった。包含層からの出土遺物はI b・I c層において主に出土しているが、他時期の遺物と混在している。土師器(杯・皿)、須恵器、瓦質土器、同産陶器、輸入陶磁器、滑石製品、錢貨が認められた。なお、遺物の分類において参考にした文献は第5章に示している。

2 遺物

土師器 (第20図182 ~228)

基本的に底部切り離し技法が糸切りのものを扱う。ただし、小片や摩滅しているものが多く、それらは器形により判断した。なお、隣接する都城盆地では中世においてヘラ切り技法が再出現するとの指摘があることから(柴畠2004)、底部切り離し技法がヘラ切りのものも、器形から中世と考えられるものはここで扱う。

土師器杯 (182 ~197)

31点確認し、16点図示した。口縁から底部まで残存するものは口径の大きなものから掲載し、口縁部が欠損しているものは底径の大きなものから掲載した。

器高は3cm前後となるが、口径は12cm前後(183 ~185) / 11cm前後(186 ~188) に区分できる。

器形は口縁部が直線的に外傾するものと、内湾気味に立ち上がるものが認められる。

底部外面は糸切り痕を残すものやナデ調整を行うものがあり、この他板状圧痕がみられるもの(190)や筋状の沈線がみられるもの(189)がある。

土師器皿 (198 ~228)

125点確認し、31点図示した。坏同様、口径の大きなものから掲載した。

器高は2cm以下となる。口径は10 ~6.2cmと幅があり、10cm以上(198) / 9cm前後(199 ~202) / 8.5cm前後(203 ~210) / 8.1cm前後(211 ~217) / 7.5cm前後(218 ~221・223・224) / 7cm以下(225 ~228) の6つに区分できる。

器形は見込みが平坦で厚いものや見込みが極端に凹むもの(199・209・219・220・224)、口縁から見込みまでの深さがとても浅いものなどが認められる。

底部外面は糸切り離し後にナデ調整を行うものやヘラ切り離しのもの(211・212)、板状圧痕がみられるもの(221)がある。また、切り離し後持ち運んだ際に付いたと思われる指頭痕が底外面に残るものもある。

223・227は底外端部に切り離し時にはみ出た粘土が付着している。215・224はススが付着していることから、燈明皿と考えられる。

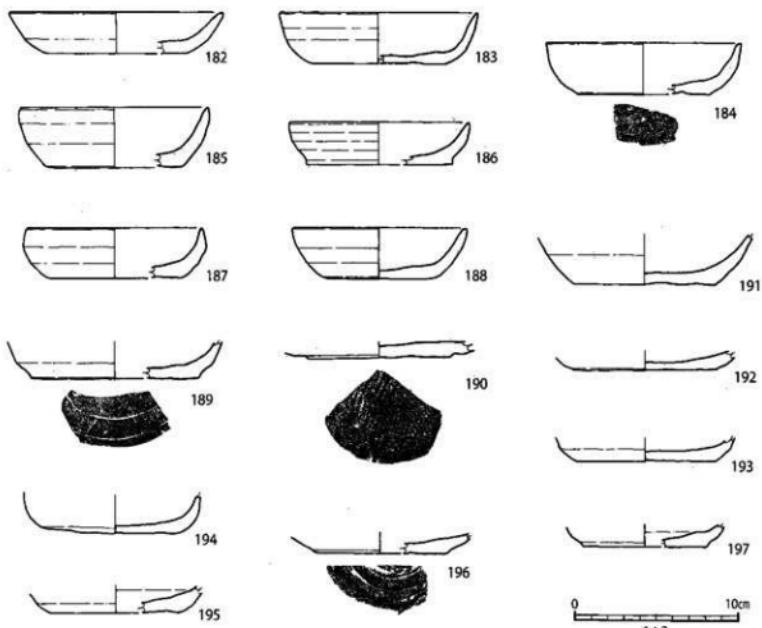
東播系須恵器 (第22図229 ~234)

27点確認し、6点図示した。全て口鉢であり、口縁部形態により、端部がわずかに肥厚し丸味をもつもの(229 ~231)と緩やかに外反し、肥厚帯が目立ち罐部内面に後を有するものの2つに分類できる。重ね焼きにより、口縁部縁部分のみが灰黒色を呈し、229 ~231・233は自然軸がかかる。

底部外面は糸切り痕が残り、内面は使用により平滑である(234)。232は瓦質である。

桙番城窯須恵器 (第22図235・236・238)

27点確認し、2点図示した。外面は正格子目タタキ痕が残る。内面はハケメ調整が行われ、238は粗いハケメ調整である。235・238は瓦質である。



第20図 中世遺物 (1) 土器盤

須恵器 (第22図237・239)

7点確認し、2点図示した。237は格子目タタキ後にナデ調整を行う。239は内外面に自然釉がかかる。

瓦質土器 (第22図240)

5点確認し、1点図示した。板状の三足が付く深鉢と考えられるもので、脚が剥離している。

陶器 (第22図241)

產地不明の国産陶器で、底部外面に糸切り痕が残る。

備前焼 (第22図242・243)

65点確認し、2点図示した。242は壺の口縁部で、細長いV字縁を呈し、外面上下縁には後縫をもつ。頸部は長めである。243は撒播波状文を施す壺の肩部である。

瀬戸・美濃焼 (第22図244)

2点確認し、1点図示した。口縁端部を外に折り曲げた折縁深皿で、器面全体に灰釉がかかる。

常滑焼 (第23図245～251)

52点確認し、7点図示した。245～248・251は壺である。口縁部は断面「N」字状を呈するもので、縁帯幅は約3cmである。口縁～肩部には暗黄緑色の自然釉がかかる。248は縦状の斑となっている。内面には接合痕が目

立つものが多い。肩・胴部に押印文を施すものもある。

249は胴部に沈線を施す三筋文壺である。250は片口鉢で、口縁端部がやや凹む。

なお、251は他に比べて長石類の白色鉱物を多量に含み、異質である。

滑石製品 (第23図252)

4点確認し (再加工品含む)、1点図示した。

252は断面不等辺台形を呈する鉢が巡る、滑石製石鍋である。外面にはノミ状工具痕が残る。

輸入陶磁器 (第24図253～288)

白磁・青磁・青白磁・青花・陶器が認められた。

白磁碗IV類 (253～255)

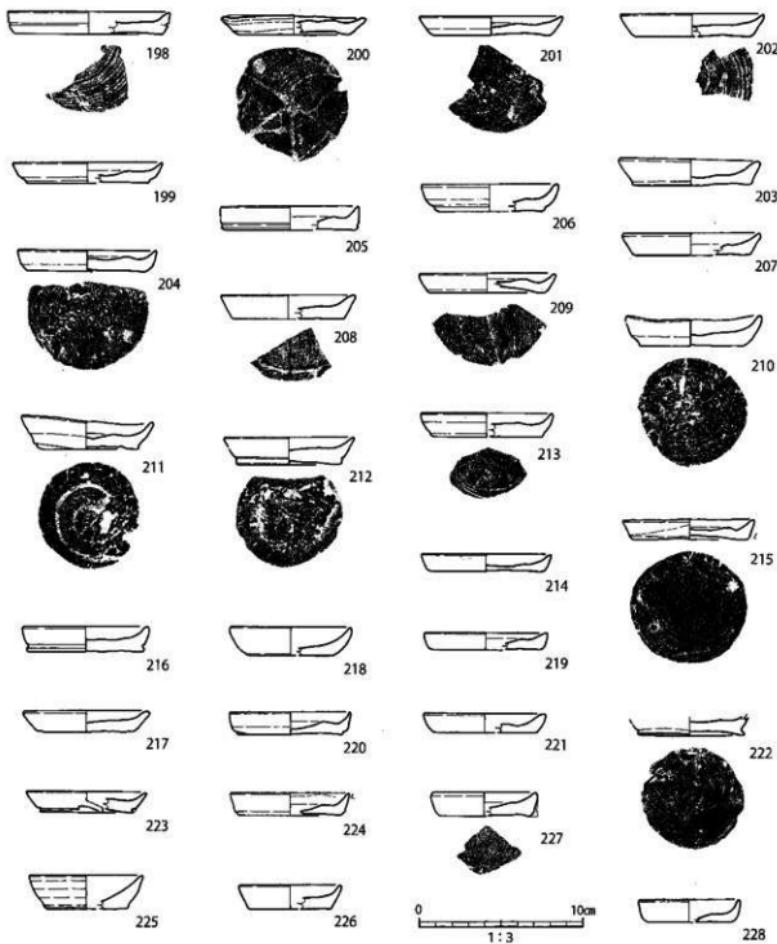
9点確認し、3点図示した。玉縁の口縁部を有するものである。体部外面下半は露胎となる (255)。高台は幅広で、底部の器内も厚い。

白磁碗V・4類 (256)

2点確認し、1点図示した。口縁端部が水平にやや外反し、嘴状を呈し、内面に櫛目文を施すものである。

白磁碗VI類 (257～259)

17点確認し、3点図示した。口縁部周辺の釉を掻き取



第21図 中世遺物（2）土師器皿

り、口禿げとなるものである。口縁端部は外反する。

白磁碗IX - 1類 (260)

1点確認した。口禿げ碗の底部である。内面見込みに周線を持ち、その径は高台径より小さく段状となる。高台内面中心が凸状に膨らむ。高台まで全面施釉される。

白磁皿IX - 1類 (261・262)

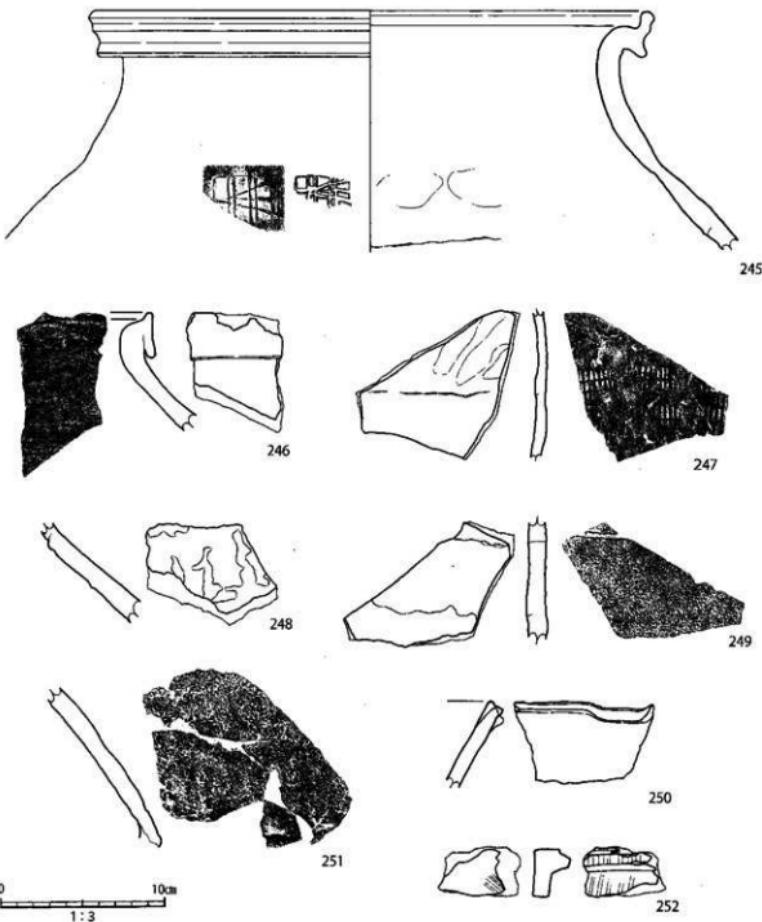
4点確認し、2点図示した。口縁端部が口禿げとなる皿の底部である。平底となり、全面施釉される。

白磁壺 (263)

壺類の肩部と考えられる。1点確認した。



第22図 中世遺物（3）須恵器・瓦質土器・国产陶器



第23図 中世遺物(4) 国産陶器・滑石製品

森田分類D群 (264)

小形の皿と思われるもので、焼成は軟質である。1点確認した。

明代白磁 (265)

後花風と思われ、内面にヘラ書きの文様を施す。

龍泉窯系青磁碗 I - 1類 (266)

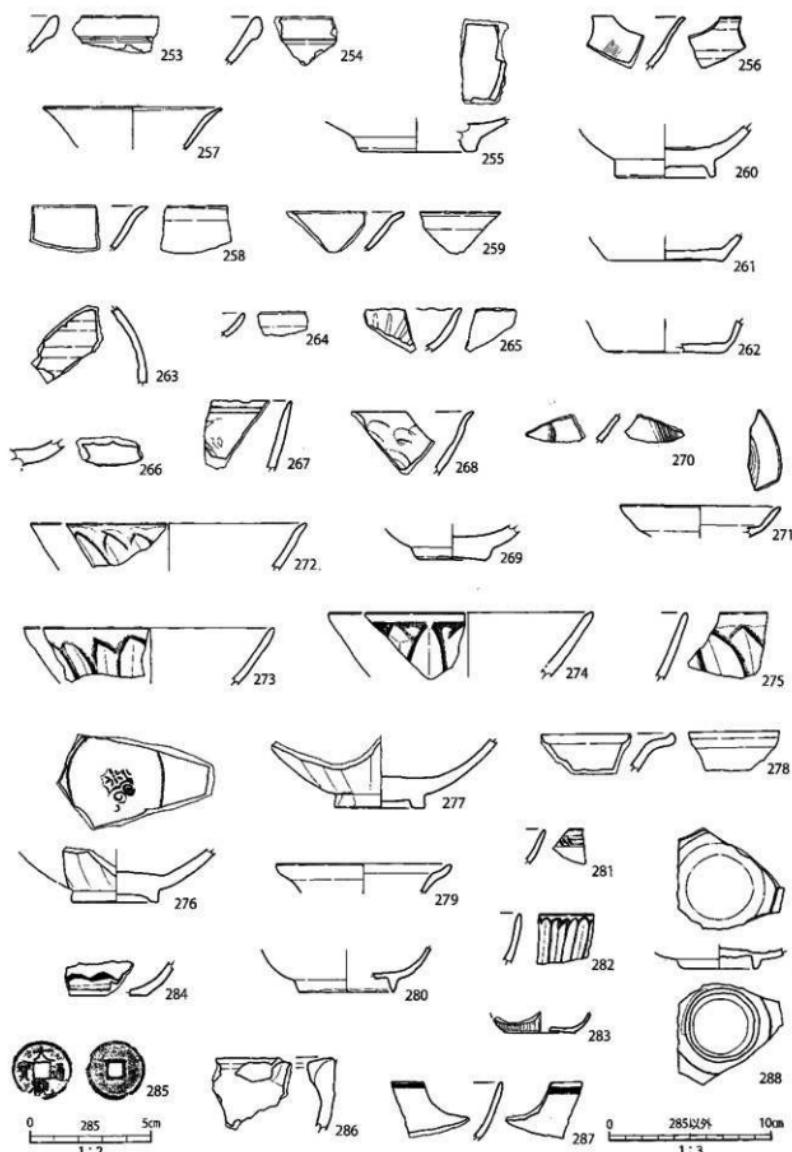
内外面無文のものである。1点確認した。

龍泉窯系青磁碗 I - 4類 (267・268)

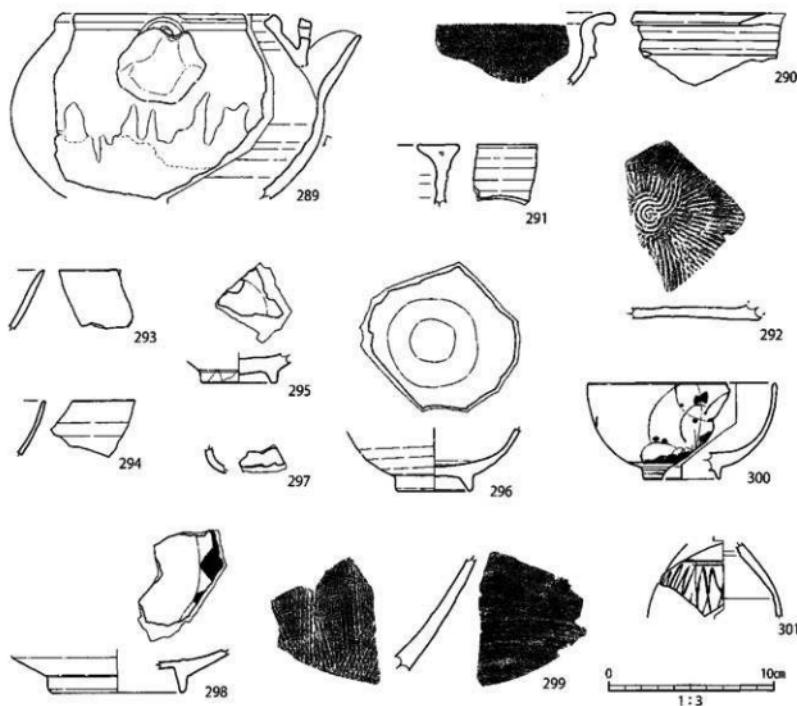
8点確認し、2点図示した。内面に飛瀬文または花文をもつものである。口縁縮部が外反するものもある。

龍泉窯系青磁碗 I - 6類 (270)

1点確認した。体部外面に継の筋目を入れ、内面に横II文または花文を施す。



第24図 中世遺物(5) 輸入陶磁器・銭貨



第25図 近世遺物

龍泉窯系青磁小碗 I - 1'a 類 (269)

1点確認した。内外面ともに無文で、高台内部の割りを行わず、ベタ底状となる。

龍泉窯系青磁皿 I - 2 類 (271)

1点確認した。体部中位で屈曲し、口縁部が直行するもので、端部は丸味をもつ。内面見込みに櫛目文を施す。

龍泉窯系青磁碗 II 類 (272 ~ 277)

55点確認し、6点図示した。体部外面に蓮弁文を施すものである。I 1縁端部が直行するもの (273 ~ 275) とやや外反するもの (272) がある。高台は太い断面四角形となり、底部は肉厚である。高台疊付—内面は露胎となる。

272 ~ 275・277は弁の中心に稜を成すことから b 類に、276は内面見込みに幾何学花文を施すことから c 類に比定される。

龍泉窯系青磁碗 III - 2 類 (279・280)

2点確認した。体部下位は丸味を持ち、内面気味に立ち上がり、口縁部が外反し、上端は平坦面となる。高台断面は細く尖り気味で、端部付近の釉が掻き取られる。

龍泉窯系青磁碗 III - 3a 類 (278)

2点確認した。端部が横に長く屈折し、さらに端部をつまみ上げるもの。

龍泉窯系青磁碗上田 C 類 (281)

口縁部外面に雷文帯を有するもの。1点確認した。

龍泉窯系青磁碗上田 B - IV 類 (282)

2点確認し、1点図示した。ヘラ先による細線の線描蓮弁文をもつもの。

青白磁合子 (283)

型造りによる合子身である。側面に菊座状の文様を浮き出るもので、露胎となる。1点確認した。

陶器盤 1 類 (284)

黄釉盤の底部で、外面は露胎となり、内面見込みには

鉛筆が施される。1点のみ確認した。

陶器 (285)

内面が肥厚する口縁部で、注口が認められる。内外面ともに露胎となる。蓋または鉢の口縁部と思われる。1点確認した。

済州窯系青花 (287・288)

9点確認し、2点図示した。288は見込みに蛇の目軸剥ぎを施し、高台脇～骨付に砂粒が付着している。

鏡鉢 (第24図285)

1点確認した。285は初鉄1107年(北宋)の「人鏡通寶」である。

第5節 近世の調査

1 調査の概要

明確に近世と判断できる遺構は検出できなかった。

遺物はI b・I c層から出土しており、特にI b層が多い。その多くが薩摩焼陶磁器・肥前系陶磁器である。

2 遺物

薩摩焼苗代川系陶器 (第25図289～292)

壺・鉢・擂鉢・植木鉢・土瓶・土瓶蓋・山茶家など、34点確認し、4点図示した。

289は山茶家で、胴部下半にススが付着する。鉄物が胴部下位までかかる。290・292は擂鉢で、290は口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ、2条の低い突帯を巡らせる。291は「T」字状を呈する壺の口縁部である。

薩摩焼山元窯陶器 (第25図293・294)

13点確認し、2点図示した。全て碗で、鉢輪と鉄砂輪が認められる。

薩摩焼加治木・姶良系陶器 (第25図295・296)

2点確認した。295は白化粧土に透明釉がかかるもので、見込みは露胎する。296は高台外側まで施釉され、見込みに蛇の目軸剥ぎを施す。

肥前系陶器 (第25図297～299)

10点確認し、3点図示した。297は唐津焼の徳利と考えられ、葉灰釉がかかる。298は鉢で、白化粧土に透明釉がかかり、見込みは露胎する。299は片津焼の擂鉢である。

肥前染付 (第25図300・301)

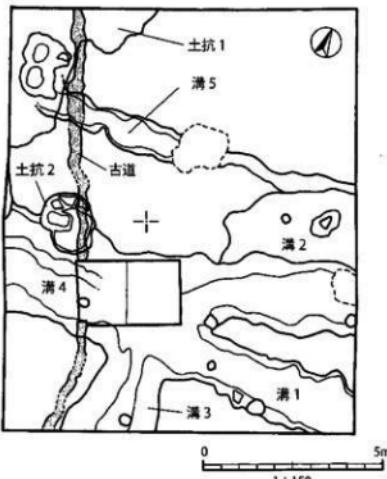
15点確認し、2点図示した。301は一重縦目文が施された徳利である。

第6節 近代以降・時期不定の調査

1 調査の概要

ここでは近代以降及び明確に時期が判断できなかった遺構・遺物の調査成果を示す。近代以降と判断できる遺構として、古道が検出された。遺物は、主にI b層から磁器や太平洋戦争時の弾薬が出土している。

確実な時期が判断できなかった遺構として、溝状遺構



第26図 時期不定遺構配置図

(SD)、土坑 (SK)、ピットが検出された (第26図)。遺物はI b・I c層から出土している。

2 遺構

古道 (第26図)

I b層上面において、南北方向に延びる硬化的した面を検出した。I b層が硬化しており、硬化部は幅30～50cm、厚さ約5cmを測る。なお、南側ほど硬化が弱い。硬化面直上の海拔高は約21.2mである。

溝状遺構 (SD) 1～5号 (第27図)

I c層を掘り下げた後、III a層上面において検出した。1～5号として報告しているが、それぞれ切り合ひ関係は認められず、埋土も同じであるため、同一の溝と考えられる。核分かれした箇所に便宜上与えた番号である。

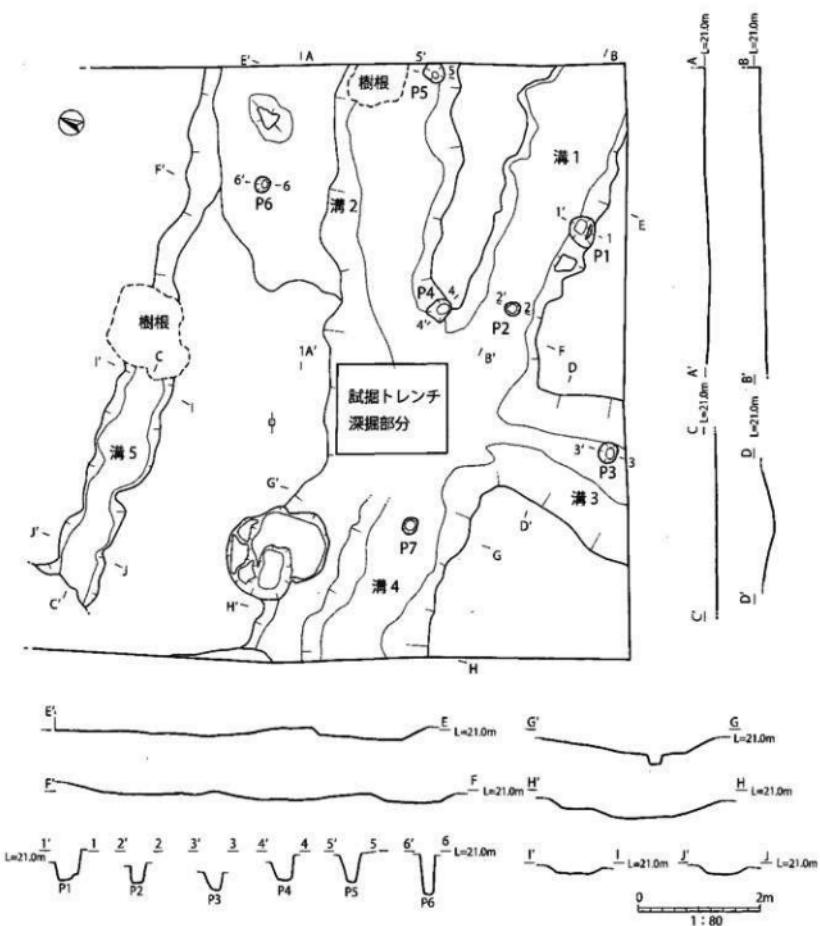
東西方向に伸びており、SD 3のみ南へ延びる。また西に向かって緩やかに傾斜している。幅はSD 2が最も長く、約4.6mを測り、SD 1は約1.6m、SD 3は約2.0m、SD 4は約2.6m、SD 5は約1.0mとなる。検出面からの深さは、0.1～0.3mを測る。底面はIII b層 (一部西側はIII a層) で、硬化面は認められなかった。

溝状遺構内遺物 (第29・30図302～349)

遺構検出面より下位のレベルから出土した遺物について溝状遺構内出土遺物として扱った。遺物組成はI c層出土遺物の組成と違いはない。また、I b・I c層出土遺物と接合する。

SD 1出土遺物 (302～310)

縄文土器・古墳時代土器・須恵器、古代～中世土器等、



第27図 溝状遺構1～5号及びピットP1・断面図

瓦質土器、滑石製品、鐵製品、軽石、碟等51点認められ、9点図示した。

302は縄文土器3類。303～305は古墳時代土器で、304は底面に木葉痕が残る。307は古代土器器坏、308は中世土器器坏。309・310は釘である。

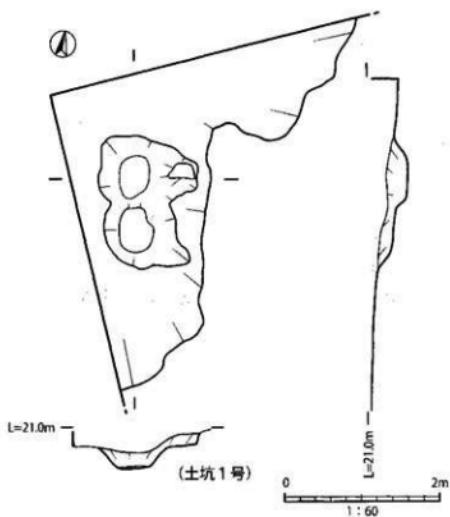
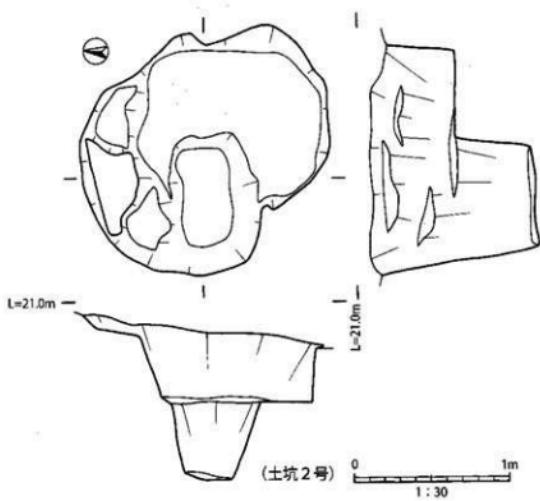
SD 2出土遺物 (311～320)

古墳時代土器・須恵器、古代・中世土器器坏、中世東播系須恵器・衛前焼、中世青磁・白磁等が45点認められ、

10点図示した。311～315は古墳時代土器で、311～313は甕、314は壺、315は高坏（台付鉢）である。316は古代土器器坏。317は中世土器器皿で、底面に指頭痕残る。318は東播系須恵器の片口鉢の底部で、内面は使用により平滑である。319は口禿けの白磁皿区類。320は衛前焼の擂鉢で、スリメは9条/25cmである。

SD 3出土遺物 (321～327)

縄文土器、古墳時代土器・須恵器、中世土器器坏・常滑焼・



第28図 土坑1・2号平・断面図

備前焼・白磁等24点認められ、7点図示した。

321は縄文土器3類。322・323・326は古墳時代壺、325は高杯または台付鉢である。326は外面に成形時の粘土貼付痕が、底面に接合痕が環状に残る。324は中世土師器壺、327は備前焼の三筋文壺である。

SD 4出土遺物 (328～342)

縄文土器、古墳時代土器・須恵器、古代～中世土師器、製塙土器、中世須恵器・青磁・白磁等79点認められ、15点図示した。328・329は縄文土器2類で、329は内面に段をもつ。330～333は古墳時代土器で、330・331は壺、332は壺である。333は器種不明だが、胎土に真岩等の小礫を含む。334・335は古墳時代須恵器で、334は立ち上がりが内傾し、端部が丸い壺身である。

336～338は古代土師器壺で、堅致な胎土である。339～342は古代土師器壺で、339・340は「充実高台」をもつもの。341は堅致な胎土で、342は赤褐色～橙色系の色調を呈する。

SD 5出土遺物 (343～349)

古墳時代土器・須恵器、古代～中世土師器壺、墨書き土器、中世常滑焼・白磁、鉄製品、礪等33点認められ、7点図示した。343・344は古墳時代須恵器の壺身で、343は立ち上がりが短く内傾し、端部が丸い。345は古代土師器壺、347は墨書き土器である。346は口禿げの白磁皿2類。348は中世土師器皿で、底面に指頭痕残る。349は常滑焼甕で、断面「N」字状を呈する口縁部である。縁帶幅は約3cmで、2条の凹線が巡る。縁帶と内面に粘土を貼付した痕跡があり、焼成前に入ったひび割れを補修した痕跡と考えられる。

土坑 (SK) 2号 (第28図)

溝状遺構4号の埋土を振り下げた後、その底面で検出した。埋土

は黒褐色（10YR3/1）のシルト質土で、縛まりがなくやわらかい。Ⅲ～Ⅵ層土が若干混る。清塗土との判別は困難であった。堆土中にⅡ層土を含まないことから、溝によりⅡ層が削平された後形成されたと考えられる。

平面形は1.7×1.5mの楕円形で、西側には0.9m×0.6mの楕円形の掘り込みがあり、検出面からの深さは1.1mを測る。基盤層はⅥ層である。

土坑2号内出土遺物（第30図350～355）

古墳時代土器・須恵器・古代土器器坏・椀・黒色土器B類・製塙土器・赤化粧など23点認められ、6点図示した。350・354・355は古墳時代のもので、350は壺の口縁部、354は口縁端部内面に内傾する段をもつ須恵器の坏壊である。351～353は古代のもので、351は土器器坏、352は土器器碗、353は製塙土器である。

ピット1～7号（第27図）

溝状遺構の堆土を掘り下げた後、溝の底面で検出した。堆土は黒褐色（10YR3/1）のシルト質土で、縛まりがなく、Ⅲ層土がわずかに混る。堆土にⅡ層土を含まないことから、溝によりⅡ層が削平された後形成されたと考えられる。基盤層は全てⅢb層である。

ピット内出土遺物（第30図356～358）

357は古代の土器器坏で、色調は赤褐色～茶色系である。358は古墳時代の坏で、底面に細沈線が施される。

土坑（SK）1号

Ⅱ層上面において検出したが、Ⅰb層を掘り下げる過程で径5～20cm大の円窪が集中するなど、周囲に比べて異質であった。土層断面からⅠb層を掘り込んで形成されていることが看取された。埋土掘り下げ時に、異臭があった。両柵区外に広がっているために余形は不明だが、残存部は40×3.7mの不定形である。中央には1.7×1.3mの掘り込みがあり、検出面からの深さは0.5mを測り、基盤層はⅡ層である。なお、上層断面の検討結果から、北東側と南側はほぼ床面で検出したことが分かった。

堆土は以下の4つに細分できる。堆土①：褐色（10YR3/1）の砂質土で、縛まりがない。Ⅰb層と判別が難しい。堆土②：径5～20cm大の凹窪の集中箇所。堆土③：褐灰～黒褐色（10YR4/1～3/1）のやや砂質を帯びたシルト質土で、かなり縛まっている。Ⅱ層土や黄褐色を呈するブロック状の土を含む。

土坑1号内出土遺物（第31～33図359～378）

古墳時代土器・須恵器・古代～中世土器・中世須恵器・常滑焼・備前焼・青磁・白磁・鉄製品など132点確認し、20点図示した。特に、備前焼壺の破片（78点）が積み重なって出土した。

359は古墳時代の壺、360は古墳～古代須恵器。361～

363は古代土器器坏で、361は堅緻な胎土である。364・365は中世土器器皿、367は口禿げの白磁碗IX類、368は東播系須恵器の片口鉢。366は時期不明の釦。369は押印文を施す常滑焼の壺である。

370～378は備前焼の壺である。玉縁状の口縁を呈し、やや扁平なもの（370・375・376）とやや丸味をもつものの（371・372・374・377）がある。丸味をもつものは青灰色を呈する。頸部は短く、逆「ハ」字状に開き、外面にはハケメ調整である。377は器面や断面に黑色物質が付着している。ひび割れ補修のための漆の可能性がある。

3 包含層出土遺物（第33図379～388）

焰烙（379）

中～近世と考えられる焰烙の把手である。1点のみ確認した。

土鍤（380）

古墳時代以降と考えられる管状土鍤である。1点のみ確認した。

坩埚（381）

外面には金属溶解物が付着する（2点破綻部）。また、内外面に赤色の付着物（1点破斜縫部）と内面に緑青（斜縫部）がみられる。断面にも金属溶解物が付着しており、使用中ひび割れたと考えられる。

鶴羽口（382）

4点確認し、1点図示した。382は吹き口部分であり、先端に黒色ガラス質の滓が熔着している。磁力反応は認められない。

鉄津（383・385・386）

15点確認し、特徴的なものを3点図示した。383は流动津、385は碗形津、386は円結合津である。386は鉄片に滓や不純物が熔着している。全て磁力反応があり、特に386は強い。

鉄製品（384）

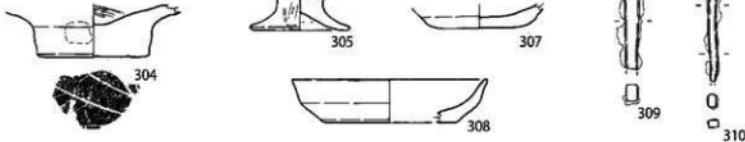
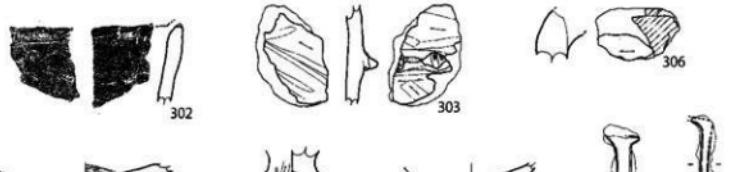
釘の欠損品など、10点確認したが、残りが悪いものが多く、1点のみ図示した。384は鉤状のもので、上端が環状を呈する。

砥石（387）

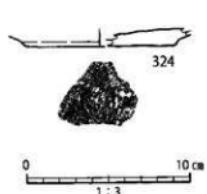
3点確認し、1点図示した。387は4面利用しており、内3面には研磨時の線状痕が認められる。

弾丸（388）

アメリカ軍の航空機に装備された「12.7mm重機関銃」の弾丸である。表面には施条痕が認められる。2点確認し、1点図示した。



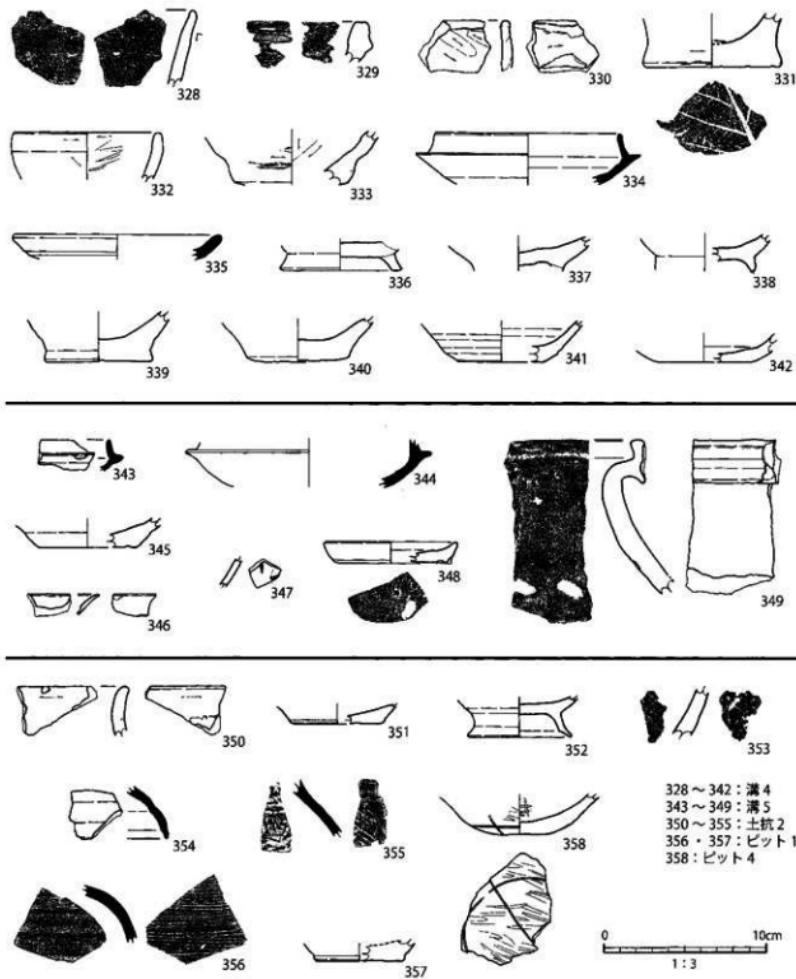
302 ~ 310 : 滝 1
311 ~ 320 : 滝 2
321 ~ 327 : 滝 3



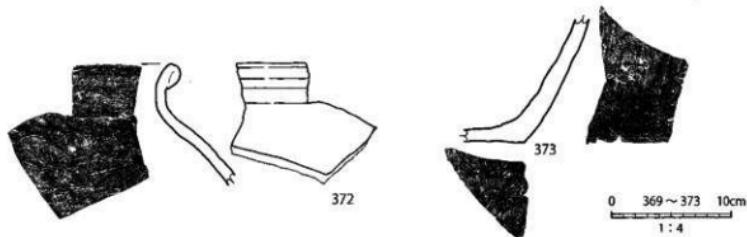
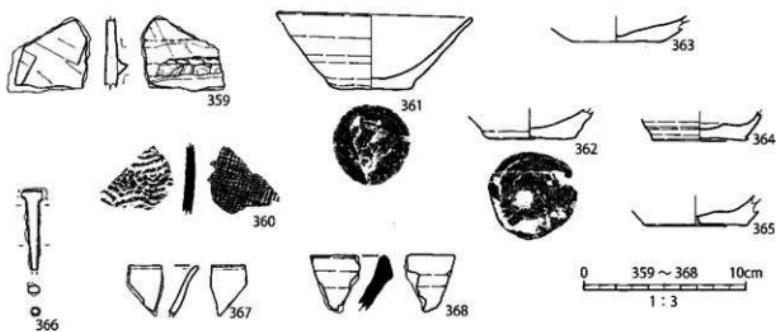
0 10 cm
1:3



第29圖 滝狀遺構 1 ~ 3 号出土遺物

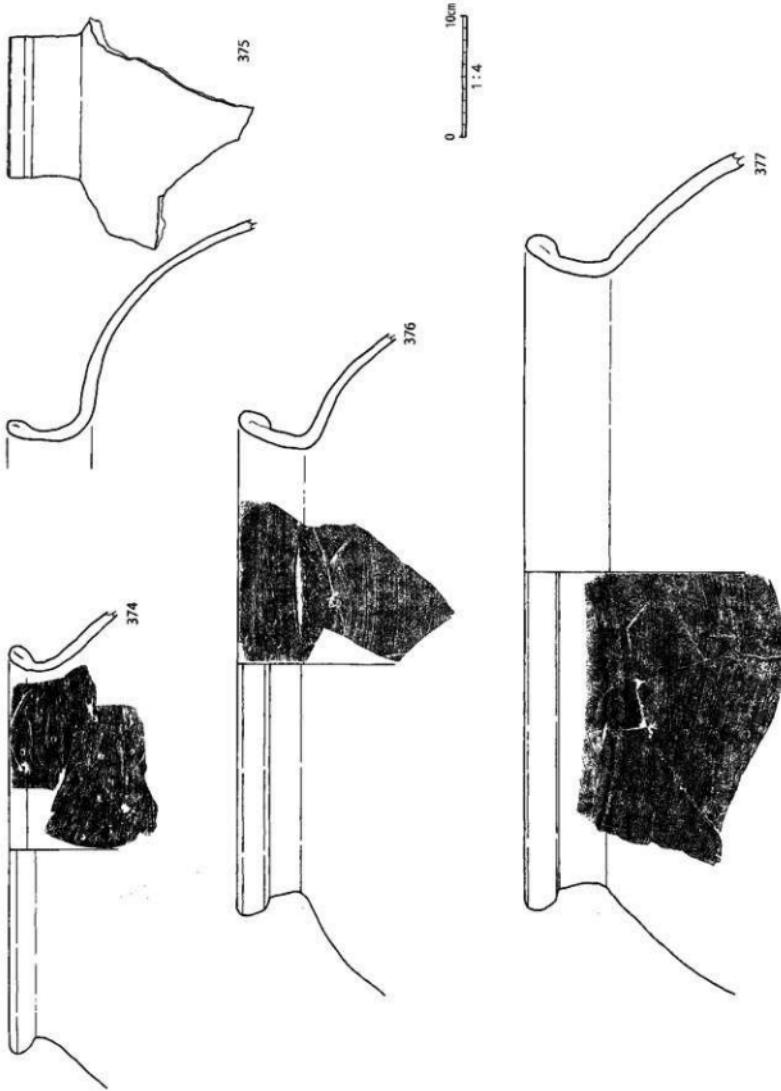


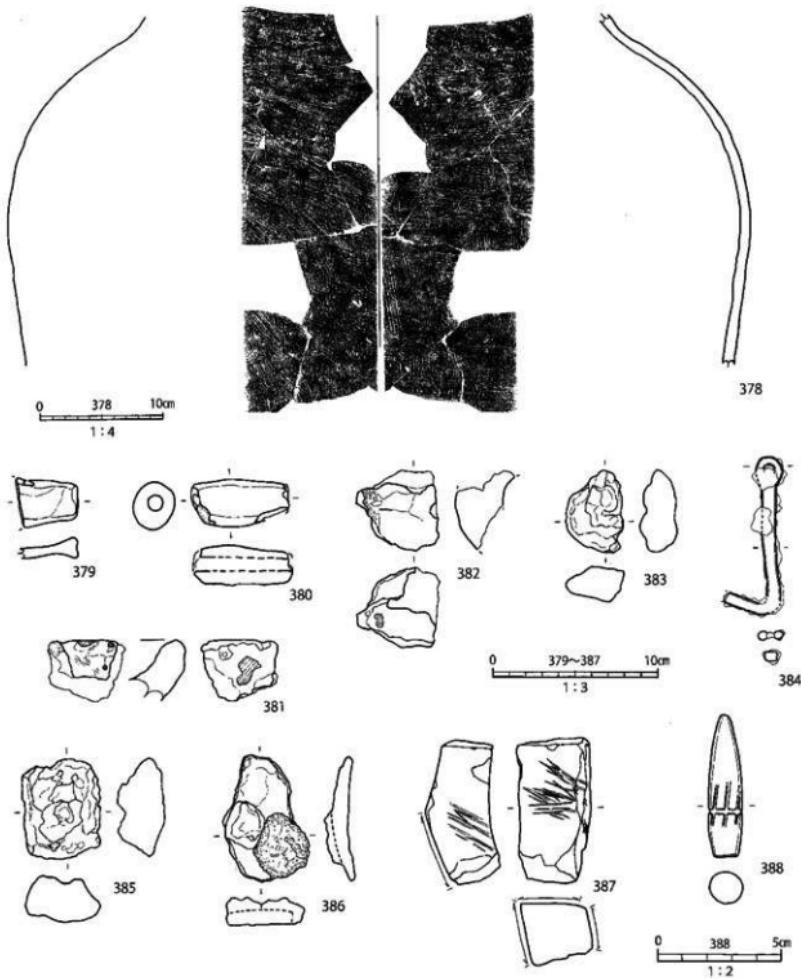
第30図 溝状遺構4・5号・土坑2号・ビット出土遺物



第31圖 土坑1號出土遺物（1）

图32 土坑1号出土遗物(2)





第33図 土坑1号出土遺物(3)・近世・時期不定遺物

第2表 梅文·弥生時代土器觀察表

第3表 楊文時代石器觀察表

第4表 故宮博物院出土土器觀察表

第五表 路李墓出土简表

第6表 空穴遗物出土铁制品觀察表

周次	学号	姓名	性别	年龄	成绩		总成绩(分)	平均分(分)	重修(分)	备注
					平时成绩	期中成绩				
三	32	王丽	女	20	85	80	165	82.5	65	及格
	33	李华	男	21	88	82	170	85	68	及格
	34	张伟	男	22	90	85	175	87.5	70	及格
	35	陈雷	男	23	87	83	170	85	68	及格

第7表 穩穴埋物出土石器觀察表

第8表 墓穴建筑物出土磁器觀察表

第9表 古墳時代土器觀察表（1）

第19章 古墳時代土器觀察（2）

第11表 古植物分带与地层对比

第12表 古代土壤器物聚类

第13表 古代土器・土器裏探察

第14章 古代須惠器與漆器

第15章 中世士師器譜釋義（1）

品目	品名	規格	原产地	内訳	販売価格	販売数量	内訳金額	内訳合計	販賣	
									販賣	販賣
182	1792	Ic	井	中井-井-004	134.8	2.0	269.6	269.6	販賣	販賣
183	865-866	Ic	井	中井-井-005	66.6	3.2	204.4	204.4	販賣	販賣
184	1392	Ic	井	中井-井-006	120.0	6.2	720.0	720.0	販賣	販賣
185	882	Ic	井	中井-井-007	116.6	4.8	547.6	547.6	販賣	販賣
186	254	Ic	井	中井-井-008	110.0	3.2	352.0	352.0	販賣	販賣
187	629	Ic	井	中井-井-009	60.0	3.2	192.0	192.0	販賣	販賣
188	2009	Ic	井	中井-井-010	68.6	3.5	245.1	245.1	販賣	販賣
189	432	Ic	井	中井-井-011	-	2.6	-	-	販賣	販賣
190	407	Ic	井	中井-井-012	-	9.0	-	-	販賣	販賣
191	259	Ic	井	中井-井-013	-	5.8	-	-	販賣	販賣
192	1395	Ic	井	中井-井-014	-	8.6	-	-	販賣	販賣
193	-	1395	井	中井-井-015	-	8.5	-	-	販賣	販賣

第25表 造橋內出土須惠器・陶器觀察表

第26表 連棟內出土鐵製品觀察表

某地区某年某月人工工资统计表									
项目	N		M		L		K		备注
	男工	女工	青年	中年	老年	中青年	老年	中青年	
总计	300	180	150	80	50	120	70	50	
按工种	30	18	15	8	5	12	7	5	
按年龄	30	18	15	8	5	12	7	5	
按性别	30	18	15	8	5	12	7	5	
按工种、年龄	30	18	15	8	5	12	7	5	
按工种、性别	30	18	15	8	5	12	7	5	
按年龄、性别	30	18	15	8	5	12	7	5	
按工种、年龄、性别	30	18	15	8	5	12	7	5	

第27表 時期不定遺物觀察表

特征	No.	当主No.	保	姓氏	年龄	性别	出生日期	内向性	外向性	情感热诚	情感冷感	语言
33	379	—	13	不明	五岁	男	少子	少于	该生(1977年4月)	该生(1977年4月)	(1977年4月)	国语
	382	755	1b	不明	五岁	女	上进	—	—	—	—	国语
	384	—	1b	不明	五岁	男	方伟	—	—	—	—	国语
	386	6280	1c	不详	十岁半	男	少儿	—	—	—	—	国语

第28表 遼代及宋時期不足題額數目

年 代	性別	種類	年齢	死因	死因別割合(%)		平均死年齢	死因別割合(%)
					死因	割合		
30 代	男	4歳未満	3歳未満	心臓病	53	36	33	41.6
	男	3歳未満	心臓病	不詳	-	97	0.6	66.2
	男	心臓病	心臓病	心臓病	63	47	29	26.8
	女	4歳未満	心臓病	心臓病	78	33	18	129.2
	女	3歳未満	心臓病	心臓病	69	45	39	106.5
	女	心臓病	心臓病	心臓病	59	13(3.9%)	-	4.4
30 代	男	4歳未満	心臓病	心臓病	53	36	33	41.6
30 代	男	3歳未満	心臓病	心臓病	63	47	29	26.8
30 代	女	4歳未満	心臓病	心臓病	78	33	18	129.2
30 代	女	3歳未満	心臓病	心臓病	69	45	39	106.5
30 代	女	心臓病	心臓病	心臓病	59	13(3.9%)	-	4.4
30 代	アメルカ人系無黒皮膚	心臓病	心臓病	心臓病	59	13(3.9%)	-	4.4

第5章 総 括

第1節 繩文・弥生時代

縩文あるいは弥生時代に位置づけられる遺構は確認されず、遺物は包含層や他時期の遺構内からわずかに認められただけであった。

縩文時代の遺物について、縩文後・晚期に比定される土器が66点（包含層出土39点・遺構内出土27点）認められ、6類に細分した。それらを既存の型式に比定せざると以下のとおりである。

1類：宮之追式（1点）

2類：中岳I・II式（28点）

3類：入佐式（新）～黒川式（古）粗製深鉢（31点）

4類：入佐式（新）～黒川式（新）精製浅鉢（2点）

5類：入佐式（新）～黒川式（古）粗製浅鉢（2点）

6類：黒川式粗織痕土器（2点）

石器は石製土器・磨製石斧・磨石・削片が認められており、それらは中岳式または入佐式（新）～黒川式の時期に属すると考えられる。

弥生時代の遺物は土器のみ4点認められ、3類に細分した。それらを既存の様式に比定せざると、以下のとおりである。

1類：山ノ口II式（弥生中期後半）

2・3類：中津野式（弥生終末～古墳初頭）

出土遺物の中で、縩文土器1類のみがII層から出土し、その他はI b層あるいは溝状遺構の埋土の可能性も考えられるI c層から出土している。つまり、本来の遺物包含層のほとんどは溝状遺構により削平されていると考えられる。

第2節 古墳時代

本遺跡の中心となる時代の一つである。

古墳時代後期の笠貫式土器新段階の時期が主である。堅穴建物跡が2軒検出され、集落跡であったことが明らかとなった。

1 遺構

堅穴建物跡が2軒重複して検出された。調査区外に延びていることから全形は不明だが、約5.0×5.0mの隅丸方形プランを呈すると考えられる。柱穴は4基検出でき、2基ずつそれぞれ2軒の堅穴建物に伴うと考えられ、方形4主柱型の堅穴建物となる。

新しい堅穴建物（SI 2）には貼床があり、堅穴中央付近には貼床上面が硬化した面が認められた。生活面として使用され、頻繁な踏み固めにより硬化したものと考えられる。硬化していない箇所はおそらく床板や敷物が敷かれ、寝所等に利用されていた可能性もある。

掘方はIII層に達しており、その底面は西に向かって傾斜している。この傾斜は地形の傾斜に沿ったものであり、

水はけを考えてアカホヤ火山灰層であるIII層を掘方の基盤層にした可能性が考えられる。

炉やカマド等の生活施設は認められなかった。都城盆地の都城市鶴喰遺跡では本遺跡と同時期のカマド付竪穴建物が検出されている。竪穴の南壁中央付近に被熱した漆が並んでいたことからカマドの可能性も考えられたものの、カマドとは認定できず、支脚も認められなかつた。

出土遺物は多く、土器・須恵器・石器・鉄製品が認められている。土器は古墳時代後期の笠貫式新段階に位置づけられるものである（中村2009a）。器種には壺・瓶・壺・高杯・杯・台付鉢・埴・蓋があり、その中でも壺が最も多い。壺は口縁部にいくつかバリエーションがある一方、底部は全て平底で、底面に木葉痕が残るものがある。また外表面に粘土帯接合痕が目立ち、外側調整にはミガキ調整が行われる。なお、上器についての詳細な説明は次項で述べる。

古い竪穴建物（SI 1）に伴うと考えられる遺物は少ないが、SI 1・SI 2ともに木葉痕が残る壺の底部が出土していることから、両者の時期差はそれほど大きくなないと考えられる。

須恵器はTK209～217型式に比定される壺身と長脚二段透しの無蓋高杯、それよりも古いTK10型式に比定される壺身が認められる。無蓋高杯が下位のレベルから出土しており、検出された竪穴建物跡は7世紀前半頃に位置づけられる。

鉄製品では県内において出土例の少ない方頭鎌が認められており、注目できる。

2 遺物

本遺跡出土遺物の中で最も出土量が多い。そのほとんどが古墳時代後期の笠貫式に位置づけられ、中でも笠貫式新段階のものが多い。器種としては壺・瓶・壺・高杯・杯・台付鉢・埴・蓋が認められる。

以下、各器種について説明を行い、その後器種組成や時間的配置、他地域との比較等の検討を行う。

壺 口縁部形態に幾つかバリエーションがある。口縁部が直行する65は辻笠原式に位置づけられる。その他は笠貫式に位置づけられ、形態の違いは形式差と考えられる。

底部形態は全て平底であり、脚台は認められない。しかも、底面に木葉痕を残すものが約40%を占める。葉の樹種は、オオタニワクリ以外は同定できなかった。底面に接合痕がドーナツ状に残るものがあり、製作技法がうかがえる。

口縁部に1条の突帯を有するものが多く、刻口突帯や絡繆突帯が認められる。刻口突帯について、幅広でまば

らな刻みを有するものと細長く比較的密な刻みを有するものが存在する。報告書掲載遺物からは前者が多い印象を与えるが、未掲載遺物を含めると後者が多い。なお、口縁部外側に刻目突帯を有するものがあり、一見绳文時代晩期末の刻目突帯文上器を思わせる。ただし刻目には布目痕があり、判別は可能である。個体数が少ないことから（企口縁部分中、約0.3%）、イレギュラーな存在と考えられる。

なお、幅広でまばらな刻みを有するものは器壁が薄手で、細長く比較的密な刻みを有するものは器壁が厚手の傾向がある。前者は73・74などで、器形の割に厚さはそれぞれ0.5cm・0.8cmであり、後者は65・68・69などで、厚さはそれぞれ1.1cm・0.8cm・1.0cmである。

外面調整は突帯上位はヨコナデ調整、突帯下位はミガキ調整、底部はタテケズリ・タテ工具ナデ調整を行うものが多い。また内外面に粘土帶接合痕が目立つものが多く、その接合痕から推定される粘土帶の幅は1.0~1.5cmのものが多い。この接合痕が目立つものは笠貫式新段階に多く認められ、65のように外面に接合痕が認められない辻原式のものとは様相が異なる。

壺 全て簡抜けタイプで、多孔タイプは認められない。また把手も認められなかった。

壺 中一小形のもので、無文あるいは脇部のみに突帯を巡らせるものである。脇部は細長いものと球胴状のものがある。底部は平底あるいは丸平底を有する。

高杯 坏部が屈曲するものと腕形のものが認められ、後者が多い。赤色顔料を塗付するものは少ない。また「円錐塊充填法」により製作された脚部の「充填用円錐塊」が認められた（角南2000）。

坏 様形を呈するものが多く、須恵器を模倣したような口縁部が屈曲するものは認められていない。器面はミガキ調整や丁寧なナデ調整を行なう。

鉢／台付鉢 窒穴建物出土の1点のみ確認した。広口のもので、被熱している。

壺 窒穴建物出土の1点のみ確認した。球胴状のもので、赤色顔料が塗付される。

壺 器高の浅いものを壺とした。器面はミガキ調整や丁寧なナデ調整を行なう。

器種組成について 高杯と坏を比較すると、両者の判別が難しい資料も多いものの坏が多く、坏主体の器種組成を示す。この様相は、坏がある程度存在するものの高杯主体の器種組成である6世紀代（辻原式→笠貫式古段階）の様相とは異なる点である。この他、壺が認められる一方、壺はほとんど認められない。

時間的位置づけ 最近、中村直子氏は7・8世紀代に位置づけられる「成川式土器」つまり笠貫式新段階について検討を行い、その特徴を抽出している（中村2009a）。それによると、肝属平野や都城盆地における

笠貫式新段階の特徴として、①太くまばらな刻目、②器面に残る粘土帶接合痕、③壺の器面に施されたミガキ調整、④瓶の安定的出土、⑤広口で浅いタイプの坏の存在を挙げている。これらの特徴は安良遺跡出土資料にあてはまるものであり、本遺跡は笠貫式新段階を中心とする時期に位置づけられる。

より詳しい年代について須恵器から検討してみる。古いものではTK10型式に比定される坏壺（137）があるものの、全體的にみるとTK209～TK217型式に比定されるものが多い。従って、本遺跡資料は主に7世紀前半頃に位置づけられる。

なお、中村氏が挙げた特徴③のミガキ調整について、丁字なものと粗いものの2種類があり、後者は器壁を薄く仕上げるためのケズリに近い調整ではないかとの指摘をしている。73・74のように器壁の薄いものが存在することから、氏の指摘は的確なものと言える。

他遺跡・他地域との比較 安良遺跡資料、特に壺について、志布志市内の他遺跡や他地域と比較を行う。上述したように、本遺跡出土の壺の特徴は①底部が平底となり、②底部に木葉痕が残るものが多く、③内外面に粘土帶接合痕が目立ち、④口縁部形態に様々なバリエーションが認められることである。

平底を呈する壺は、肝属平野では志布志市宮脇遺跡・上苑A遺跡・仕明遺跡、都城盆地では船喰遺跡、加久藤盆地ではえびの市佐牛野遺跡、妙見遺跡において認められており、底面に木葉痕が残るものもある。

内外面に接合痕が目立つ壺は宮脇遺跡・上苑A遺跡、鶴嶋遺跡など、肝属平野や都城盆地で認められる。

官崎平野の様相について、当地域の古墳時代中～後期の土器師の縦年を行った今塙屋銘行・松永幸寿西氏はその縦年の7期（TK43～209型式併行）において、壺の内外面の接合痕が明瞭になり、次の8期（TK217型式併行）までこの傾向が続いている（今塙屋・松永2002）。また、壺や鉢の平底となる底面に木葉痕が残るようになるとしている。そしてこれらをまとめ、内外面の接合痕が顯著で、底部に木葉痕が残り、船上に砂粒が多く含まれる壺を7世紀代の「日向型壺」としている。このことから、本遺跡資料の特徴①～③は官崎平野の壺にも認められることが分かる。

肝属平野や都城盆地において器面に接合痕が残ることについて、中村氏は土器様式團を超えた近隣地域間での製作技法の共有が認められると指摘している（中村2009a）。このことは底部形態も同様であり、しかも加久藤盆地にまで広がっている。

壺の口縁部形態について、中村氏はバケツ形と「く」字状に短く外反するものの2種に分類し、後者を土器器との折衷系と捉えている（中村2009b）。「く」字状に短く外反する口縁部は、官崎平野では6期（TK10～

MT85型式併行)に認められるものであり、その影響が考えられる。また、口縁端部に粘土紐を貼付し肥厚させるものは「く」字状に短く外反する口縁部を意識して製作された可能性も考えられる。

第3節 古代

確実に古代に位置づけられる遺構は認められず、主に包含層から土師器坏・碗・壺・須恵器、黒色土器、製塙土器などの遺物が認められている。

その中で、土師器坏の出土量が多いものの、全形が把握できるものは少ない。そのため、法量が分からず、時期比定は難しい。ただし、光実高台をもつ土師器坏の存在から、9世紀後半前に位置づけられる。

第4節 中世

本遺跡の中心となる時代の一つである。

確実に中世に位置づけられる遺構は認められなかつた。遺物は土師器坏・皿・須恵器、瓦質土器、国産陶器、滑石製品そして輸入陶磁器が認められる。

1 遺物

遺物の種類毎に時期などについて説明していく。

土師器 坏と皿が認められ、小片を含めると多量に出土している。しかし、口縁部片や摩滅しているものが多く、古代の土師器と判別困難なものが多い。

本遺跡資料の大半の特徴としては、底部切り離し技法に糸切りとハラ切りが併存していることが挙げられる。口径について坏は、①12cm前後 / ②11cm前後の2つに区分でき、皿は①10cm以上 / ②9cm前後 / ③8.5cm前後 / ④8.1cm前後 / ⑤7.5cm前後 / ⑥7cm以下の6つに区分できた。色闇及び胎土は、浅黄褐色系の粉っぽい胎土がほとんどである。

これらの年代について、志布志地方と歴史的に関係の深い都城盆地における中世土師器の編年を提示した柴畠光博氏の研究(柴畠2004)を参考に考えてみたい。

柴畠氏は一括資料を提示し、それらと共に併した輸入陶磁器や国産陶器から時間的位置づけを行っている。その一括資料と本遺跡資料(特に資料数の多い皿)を比較すると、皿①は一括資料②(12世紀前半~中頃)、皿②は一括資料③・④(12世紀後半~13世紀前半)、皿③は一括資料⑤(13世紀初頭~中頃)、皿④は一括資料⑥(13世紀末~14世紀初頭)、皿⑤は一括資料⑦・⑧(14世紀前~後半)、皿⑥は一括資料⑨・⑩(14世紀後半~15世紀中頃)にそれぞれ比定できる。坏に関しては、一括資料④~⑥に比定できる。

柴畠氏は13世紀後半から14世紀前半(一括資料⑥・⑦の時期)に都城盆地の東部ではハラ切りが一定量を占めるとしている。本遺跡資料も口径が8.1cm前後の皿④にあたり、一括資料⑥の時期に相当する。

須恵器 東播系須恵器や椎谷城窯須恵器が認められる。東播系須恵器について、口縁端部がわずかに肥厚し

丸味をもつものは森田編年II期2段階(12世紀末~13世紀初頭)、肥厚帯が目立ち端部内面に稜を有するものは森田III期1段階(13世紀前~後半)に比定される(森田1995)。椎谷城窯須恵器について、詳細な年代は不明であるが、操業時期は13世紀中葉頃とされている(美濃山2010)。

常滑焼 壺は口縁部が断面「N」字状を呈するもので、縁帯幅が約3cmとなり、胴部外面の押印文が帯状連続施文のものと省略したものと認められる。これらの特徴から、赤羽・中野編年6a~6b期(13世紀後半)に位置づけられる(中野1995)。片口鉢は6b期頃と考えられる。12世紀~13世紀初頭の文様技法とされる三筋文を有するものもある。

備前焼 壺は全て口縁端部が玉縁状を呈するもので、やや丸味をもつものとやや扁平なものが認められる。前者は乗岡編年中世2b期(14世紀前半)、後者は中世3期(14世紀中頃~15世紀前半)に位置づけられる(乗岡2005)。還元焰焼成により青灰色を呈するものや外面の最終調整がハケメのものが多いことなど、比較的古手の様相を示すことから、中心となるのは14世紀前半頃と考えられる。なお、描繪波紋を施すものは中世4期(15世紀中頃)に位置づけられる。

その他 出土量の少なかった瓦質土器、瀬戸・美濃焼、滑石製石鍋について述べる。瓦質土器は三足深鉢で、15世紀後半~16世紀頃に位置づけられる。瀬戸・美濃焼は口径24.0cmの折線深鉢で、古瀬戸中期様式II期で14世紀初頭に(藤澤2007)、滑石製石鍋は鉢が断面不等辺円形となるもので、木戸編年III-c~d類で14世紀代に位置づけられる(木戸1995)。

輪内陶磁器 分類と年代観は主に大宰府の貿易陶磁編年(大宰府市教委2000)に準拠し、その他、白磁については森田魁氏の研究(森田1982)、青磁については上田秀夫氏の研究(上田1982)を参考にした。

白磁について、玉縁口縁の碗IV類は大宰府編年C期(11世紀後半~12世紀前半)、口縁端部が屈折し内面に菊山文を施す碗V~4類はD期(12世紀中頃~後半)、口縁端部の碗・皿IV類はF期(13世紀中頃~14世紀初頭)に比定される。この他、森田D群に比定される小形の皿は15世紀頃に位置づけられる。

青磁について、内外面無文の碗I~1類・内面に飛雲文・花文をもつ碗I~6類・内外面無文でベタ底状となる小碗I~1'a類・内面に蓮弁文をもつ皿I~2類はD期に比定される。外面上に蓮弁文を施す碗II類はE期(13世紀初頭~前半)に、口縁端部が屈折する坏III類はF期に比定される。この他、口縁部外面上に雷文帯をもつ上田C類碗は15世紀頃に、綾描進弁文をもつ上田B~IV類碗は15世紀後半に位置づけられる。

青白磁合子はC~D期に、陶器盤1類の黄釉鉄絵盤は

11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる。青花は漳州系のもので、16世紀末頃のものと思われる。

2 出土遺物の様相

ここでは各遺物をまとめ、さらに輸入陶磁器の組成を含めて、同一時間軸における出土遺物の様相について述べる。時期区分の設定は大字府廟年を採用する。輸入陶磁器組成の把握については、接合後に部位や残存度に関する限り全ての破片を1点としてカウントした。

C期（11世紀後半～12世紀前半）

土師器皿①の時期である。輸入陶磁器には白磁碗IV類がある一方、青磁はみられない。また、輸入陶器盤I類の黄釉鉄絵盤がある。輸入陶磁器が認められる最も古い時期であるが、出土量は少ない。

D期（12世紀中頃～後半）

土師器皿②の時期である。白磁は碗V・4類・龍泉窯系青磁の碗I類・小碗I類・皿I・2類がある。なお、調査面積にもよるが、この期に存在する同安窯系青磁が本遺跡では認められないことに注意したい。この頃に三筋文をもつ常滑焼が流入した可能性がある。

E期（13世紀初頭～前半）

土師器皿③・④の時期である。白磁はみられず、龍泉窯系青磁は碗II類のみである。この時期から東播系須恵器（二期2段階）が認められるようになる。輸入陶磁器の出土量が最も多い時期である。

F期（13世紀中頃～14世紀初頭）

土師器皿④の時期である。龍泉窯系青磁は碗III類のみ、白磁は碗・皿IV類であり、E期に比べると出土量は減少する。一方、国産陶器が認められるようになる。常滑焼（6a・6b型式）やわざかに瀬戸・美濃焼（中期様式II期）があり、この時期に東海系陶器の産地との関わりがあったことがうかがえる。東播系須恵器もこの時期まで存在し、加えて椎葉城系須恵器も認められるようになる。

G期（14世紀初頭～後半）

土師器皿⑤・⑥の時期である。輸入陶磁器は認められない。国産陶器では備前焼（2b～3期）がみられ、滑石製石鍋（III・c～d類）もみられる。

15世紀頃

土師器皿⑥の時期である。輸入陶磁器は白磁森田D群や龍泉窯系青磁碗上田B・IV類・C類が認められるが、極少量である。備前焼や瓦質土器もあるが、これらも少量である。

以上のことから、本遺跡の中世遺物は11～15世紀のもので構成され、その中でも12世紀中頃～13世紀代が中心となる。

全国的には12世紀後半に輸入陶磁器が普及する。また、常滑焼が全国的に供給されるのは12世紀後半以降で、西日本における盛期は13世紀後半～14世紀中頃となる。東播系須恵器鉢もほぼ同じような様相を示す。ところが、

第2表 中世前期輸入陶磁器組成表

期間	品種	数	割合	各期の比率
C期	白磁碗V類	9	3.9%	6.3%
	青磁盤I類	1	0.7%	
	白磁碗V・4類	2	1.3%	
	青磁碗I・1類	1	0.7%	
	青磁碗I・4類	8	3.2%	
D期	青磁碗I・6類	1	0.7%	9.8%
	青磁盤I・2類	-	0.7%	
	青磁小皿I・1類	1	0.7%	
	青白磁合子	1	0.7%	
計	合計	56	36.6%	36.6%
F期	白磁碗V類	20	13.1%	
	白磁盤I類	6	3.9%	20.0%
	青磁碗II類	5	3.3%	
15世紀後半	青白磁碗II類	1	0.7%	
	青白磁盤II類	2	1.3%	2.6%
	青白磁碗III類	1	0.7%	
	白磁碗	2	1.3%	
	白磁盤	21	13.7%	
	小口青磁	13	8.5%	
	小口白磁	1	0.7%	
	合計	152	100.0%	

14世紀中頃～後半になると常滑焼や東播系須恵器が姿を消し、備前焼や瓦質・土師質の在地鉢が増加するようになる。このような西日本の様相（荻野1995、山本・山村1997他）と比較すると、本遺跡の様相は西日本の様相に合致したものと言える。

3 遺跡の性格と流通について

本遺跡では碗・杯・皿の食膳具以外に青白磁合子・白磁碗・黄釉鉄絵盤が認められている。

ところで、山本信夫氏は南さつま市持株跡遺跡の評価を行な際に、輸入陶磁器の質の評価を行なっており、器種・少數産地例・特殊品・希少品など何らかの付加価値をもつ陶磁器をA～Cの3段階に分けている（川本2003）。その中で、青白磁合子・白磁碗をレベルB、黄釉鉄絵盤をレベルCの構成品として挙げている。

このように、本遺跡からは一般的食膳具以外にも付加価値をもつ陶磁器が出土しており、一般階層よりは物質を優位に獲得できる富裕な階層の存在がうかがえる。この点については、次項でより詳しく述べる。

それでは、これら輸入陶磁器や国産陶器がどこからもたらされたのか、その流通について考えてみたい。

志布志の地名について、正和五年（1316年）11月3日「沙弥邏打渡狀」で「日向方鷲津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地…」とあるのが、史料上の初見である。このことから、前川河口が島津庄日向諸郡一帯の港として機能していたと考えられている（志布志町誌編委1972）。また、島津庄内の貿易について坊津以外にも油津や志布志津も含まれる可能性が指摘されている（小山2009）。

この「志布志津」の評価について、中世前期の南九州の拠点的な港の一つとして志布志津を挙げた柳原敏昭氏は、北条氏によって行なってきた瀬戸内海から九州東岸にかけての海上交流路の要衝が鎌倉時代末期になってその西端にまで到達したものとしている（柳原1999）。吉岡康暢氏は、13世紀後半～14世紀後半において西の万之瀬川渓と並んで東に位置する、南島に開かれた拠点港湾

と考えている（吉岡2011）。

ところで、本遺跡では志布志津の初見である14世紀初頭より以前の輸入陶磁器も認められる。それでは12世紀後半～13世紀代の輸入陶磁器がどこから流入してきたのか、つまり志布志津の存在がいつまで遡るのかということを考えてみたい。

堺田孝博氏は古代後半期（8世紀末～11世紀前半）の陶磁器類の検討から、都城盆地への陶磁器類の流入ルートについて言及している（堺田2009）。8世紀末～10世紀中頃（大宰府編年A期）には北部九州～薩摩国北西船～日向国諸県郡西部のルートと畿内～日向国南部～都城盆地のルートの2つが存在し、東西方向からの人・物の動きを想定している。しかし、この2ルートはいずれも都城盆地が終着点であり、その先へは延びていないとしている。

一方、10世紀後半～11世紀前半（大宰府編年B期）には都城盆地における陶磁器等の分布が南半に集中しており¹¹、その背景に商人による南島方面交易ルートの開発を想定している。そして、南九州国勢力との対立を巡る緊張関係の存在から前代の2ルートを踏襲せず、北・中九州一人青盆地～加久藤・都城盆地のルートが人・物をもたらすとしている。

のことから、10世紀後半～11世紀前半には九州と南島との交易活動の拠点の一つであった都城盆地の港として、前川河口の「志布志津」が存在していたと考えられ、本遺跡の輸入陶磁器類は志布志津で陸揚げされたものがあらざされた可能性がある。

ちなみに流通ルートについて、山本氏は筑前・博多・大宰府を経山しない畿内・瀬戸内からの東・南回りルートを想定しており（山本2003）、本遺跡の陶磁器類もこのルートによりもたらされた可能性が考えられる。

[註]

- 1) 12世紀末～11世紀代の傾向を引き継いで、都城盆地南部を中心に遺跡数が急増し、特に大隅・高島との窓口にある益城南部における遺跡密度が廿日市市で高い（東郷2009）。

4 安良遺跡の歴史的位置づけ

本遺跡出土の中世陶磁器の年代を見ると、青磁・白磁は11世紀後半から少し認められるようになり、13世紀代で出土量がピークを迎える。一方、13世紀後半以降には備前焼や常滑焼等の国産陶器が増え始めており、国内の陶器窯地と交流があったことが窺える。その後、中世陶磁器類の量は減少する。

さて、これら陶磁器の年代と志布志地方の歴史を重ねて見てみたい。志布志地方のことが、文献で初めて登場するのが12世紀後半のことである。その後、志布志地方は日向諸県郡教仁院とされ、当時この地方を治めていたのが教仁院氏である。

教仁院氏開祖の文書には、1189年頃、安良平九郎為成

が、兄である教仁院平八成直に代わって半家により教仁院の地頭弁済使に補任されていたので、源賴朝が改任し改めて成直に安良するように下文を出したものがあり、為成の「安良」という姓はおそらく地名よりとっていたと思われる（志布志町誌編委1972）。

この安良という場所は、安良遺跡を含む旧志布志町の西部一帯を指し、大字として残っている地名である。安良遺跡より約1.4km北に為成の居城とされている安楽城跡があり、その100m南に川を隔てて、貴重な中世遺物を多数有する安樂山（官宮神社）も存在している。つまり、中世初期の12世紀前後に志布志地方を治めていた教仁院氏が、この安楽地区一帯を中心居を構えていたことが推測できる。

本遺跡で出土した中世前期の輸入陶磁器、特に貴重品である青白磁合子や白磁壺、黄釉鉄鉢盤は、当時の一般階層が持ち得たとは考えにくく、在地領主など有力者の使用と考えられる。時代背景や出土遺物年代・性格をふまえると、安良遺跡を中心とした地域に教仁院氏はじめとする当時の領主が居を構えていたのではないだろうか。

また、志布志町誌には「安楽城の南方一軒、安楽台地海岸向かって断層をなしている現在の安良部落の一角に「あんらくし」とよばれる区域があり古い寺院の跡とも言われるが、（中略）志布志関係の文書に安楽寺の記録はないが或いは安楽氏関係のものであるかもしれない」とあり（志布志町誌編委1972p108）、加えて近隣に安樂神社があること、遺跡周辺の集落を小字にはない「安良（安樂）」と呼称することも中世の名残なのだろうか、教仁院（安楽氏）の存在を彷彿させる。

13世紀代、教仁院氏は文献上では姿を消すが²²、その後も氏はこの地にとどまり、力を誇示しつづけたとも考えられ、14世紀代以降志布志の中心拠点が志布志城周辺の龍地区に移るまでの間、当時の有力者たちは安良の地を拠点に活動していたのではないだろうか。

今回の調査はとても狭い範囲のものであり、確実に中世に位置づけられる遺構は確認できず、集落としての全体像は掴めてない。しかし、この狭い調査範囲で多くの陶磁器類が出土するということは、安良遺跡周辺が何か重要な地であることは間違いないであろう。今回の調査により中世前期の志布志地方の一様相を窺い知ることができたのは大きな成果である。

（板元）

1) 伝承によると承暦2年（700）の新建とされており、明治26年に大楠の木を伐採した際、地下より石織みの石室が発見され、から路筋前期の和鏡や青白磁合子骨盆、青白磁合子などが出土している。

2) 志布志町誌によると、1191年為成が平氏に加担したことや篤を殺したことを理由に、源賴朝により益城の地頭弁済使の職を解任され、鍋作莊地頭の足岸忠久にこれをあたえている。

第5節 近世

確実に近世に位置づけられる遺構は認められず、遺物は薩摩焼陶器や肥前系陶磁器が包含層から出土している。薩摩焼陶器は17世紀後半の山元窯のものがみられるほかは、18世紀代のものが多い。肥前系陶磁器は17世紀代のものとして唐津焼の擂鉢や一重編目文の徳利が認められるほかは、18世紀代が中心である。

以上のことから、近世における本遺跡の中心は17世紀後半～18世紀と考えられる。なお、琉球に多いとされる一重編目文の徳利が本遺跡で認められたことは、志布志と琉球との関係を示唆するものである。

第6節 近代以降・時期不定の調査

1 遺物

近代の遺物の中で注目できるのが、太平洋戦争時にアメリカ軍航空機に装備されていた12.7mm重機関銃の弾丸である。太平洋戦争末期には安楽川を挟んで対岸の野井倉台地には野井倉飛行場が建設され、また周辺住民によると、本遺跡の北側には陸軍の兵舎があったということである。本遺跡周辺がアメリカ軍に攻撃された際の弾丸であった可能性がある。

時期が確定できなかった遺物の中には、鈴羽口や鉄鋤、坩埚など製鉄関連の遺物が出土している。今回の調査では遺構は確認できなかったが、周囲で見つかる可能性がある。

2 遺構

近代以降と判断できる遺構には古道がある。一方、確実な時期が判断できなかった遺構には溝状遺構、土坑、ピットがある。溝状遺構は東西方向に延びており、台地下へ下る道であった可能性がある。硬面化が認められなかつたことから、それほど頻繁に利用されなかつたか、流水により地表が削られたためと思われる。

土坑2は2段に掘り込まれていることが特徴であるが、用途は不明である。ピットは7基検出したが、調査範囲が狭いこともあり、掘立柱建物に伴うものかどうかは判断できなかつた。土坑2・ピットともに埋土中にII層土を含まないことから、溝状遺構によりII層が削平された後、形成されたと考えられる。

土坑1号は掘下げ中に異異があったことや埋土内出土遺物とI b・I c 層出土遺物が接合したこと、そしてI b層を掘り込んで形成されたことから、近世～近代において耕作時あるいは整地時に見つかった土器・陶器片などを魔棄した「ゴミ穴」と考えられる。

なお、これらの遺構の時間的推移を示すと以下のとおりである。

溝状遺構→土坑2号・ピット→土坑1号→古道

(引用・参考文献)

- 今嶋屋龍行・佐永幸寿2002「古向における古墳時代中～後期の土器群」「古墳時代中～後期の土器群」第5回九州地方後円墳研究会発表資料集
伊藤実ほか2004「中西美術の物語－箱根城を中心として－」「日本考古学会2004年度大会研究発表資料集」
上田秀夫1982「14～16世紀の青磁釉の分類について」「貿易與研究」2
人吉市立図書館・鹿島神宮2006「年代のものさし・尚古の風景图」
萩野英穂1995「宿田の古美術の出土地状況」「奈良時代と中世社会」
今丸民司2006「『墓型式の設定』『本野原塚』」「門町文化財調査報告書」33
木村雅寿1995「石渕」「南説中州の土器・陶器群」
寺尾光雄2004「都城跡地における中世土器群の編年に関する基礎的研究（1）」「宮崎考古」19
佐藤光雄2009「高尾城の成立をめぐる諸問題」「地方史研究」340
小川博2007「对外貿易と都城」「地方史研究」340
相馬伊久雄2004「成川式土器の器種構成について（予稿）」「続文の森から」2
佐藤麻理2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須磨器群」「大坂歴史博物館研究研究会」2
志布志町教育委員会2005「志布志町土器年表 第二期」
志布志町文化振興委員会1972「志布志町史」上巻
内閣府第一課2000「『因幡松古墳法』に関する予稿」「水野県道路」高岡市埋蔵文化財発見記念企画書7
大宰府市教委2000「大宰府糸染坊XV～陶磁器分析編～」太宰府の文化財（49）
豊島秀人1997「南九州鍋燒陶器の再検討」「鹿児島考古」31
中澤達2007「九州南部地域出土土器群」「人類史研究」9
中野晴久1995「高臺山における編年について」「奈良模と小笠社会」
中村直子1987「成川式土器再考」「熊本考古」6
中村直子2009「7・8世紀の成川式土器」「南九州和文通鑑」20
中村直子2009「8世紀の成川式土器」「隼人、その後」華人文化研究会40回実績記念祭会場レジュム
中村直子1997「鹿児島県における古代の在地土器」「鹿児島考古」33
赤岡義2005「研究」「中世美術の諸相－生産技術の展開と販路」
斎藤良泰2007「福牛城」「愛知県史」別冊出版2
加川博2009「他の動きから見た都城盆地の複雑性－古代後半期の陶器群を中心として－」「第60回地方史研究懇親会大会発表資料」
美濃口修司2010「伴奏城址」「古向の陣中盤のやきもの－八古轟とその周辺」
春川惟1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」「貿易與研究」2
森田徳1995「中世模造品」「南説中州の土器・陶器群」
伊藤敏紀1999「中世模造品九州の発達と宋人店鋪地に関する一試論」「日本史研究」418
山本信也1995「中世初期の貿易陶器」「南説中州の土器・陶器群」
山本信也2003「12世紀後半陶器から見えた持林経済の転換」「古代文化」55-3
山本信也・山村信益1997「九州・南西諸島」「岡立歴史民俗博物館研究報告」71
吉野潔2011「第3・第3章 第1節」「琉球出土陶器社会学的研究」

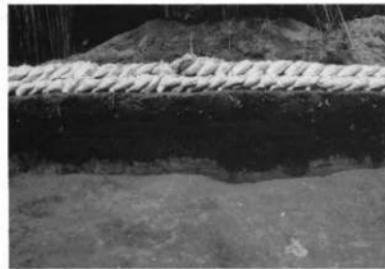
図 版



空中写真（国土地理院 1970年撮影）



遺跡近景（西から）



東壁土層断面（溝2付近）



南壁土層断面（溝1付近）

図版2



西壁土層断面（土坑1付近）



北壁土層断面（竪穴建物跡付近）



古墳時代土器（No.68）出土状況



磨滑焼（No.245）出土状況



溝状遺構1～4号块出状況（西から）



溝状造構 1号完掘状況（西から）



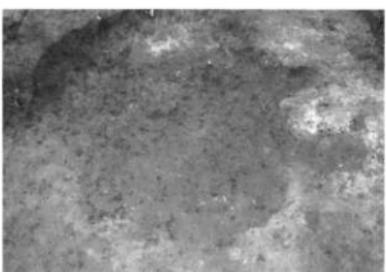
溝状造構 2号完掘状況（西から）



土坑 1号遺物出土状況（南東から）



古道検出状況（北から）



土坑 2号検出状況（南から）



土坑 2号完掘状況（東から）

図版4



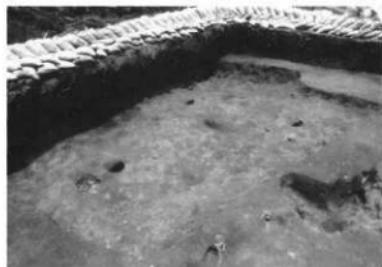
竪穴建物跡1・2号検出状況（南西から）



竪穴建物跡1・2号遺物出土状況（No.29）



竪穴建物跡1・2号埋土状況（南西から）

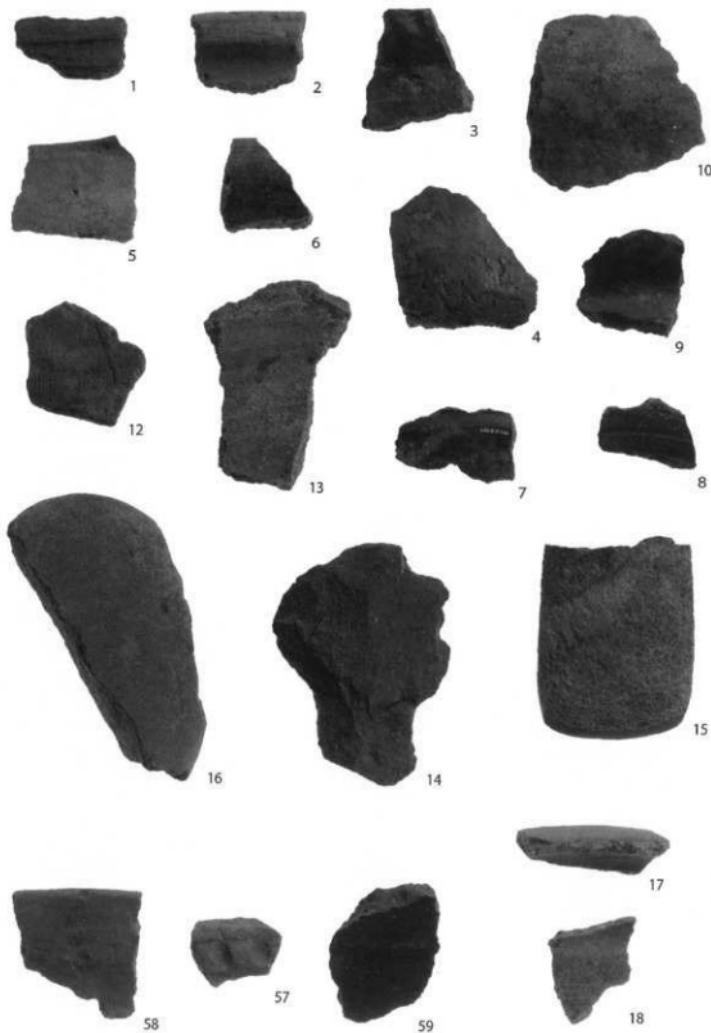


竪穴建物跡1・2号遺物完掘状況（南西から）



竪穴建物跡1・2号遺物完掘状況（北西から）

図版5

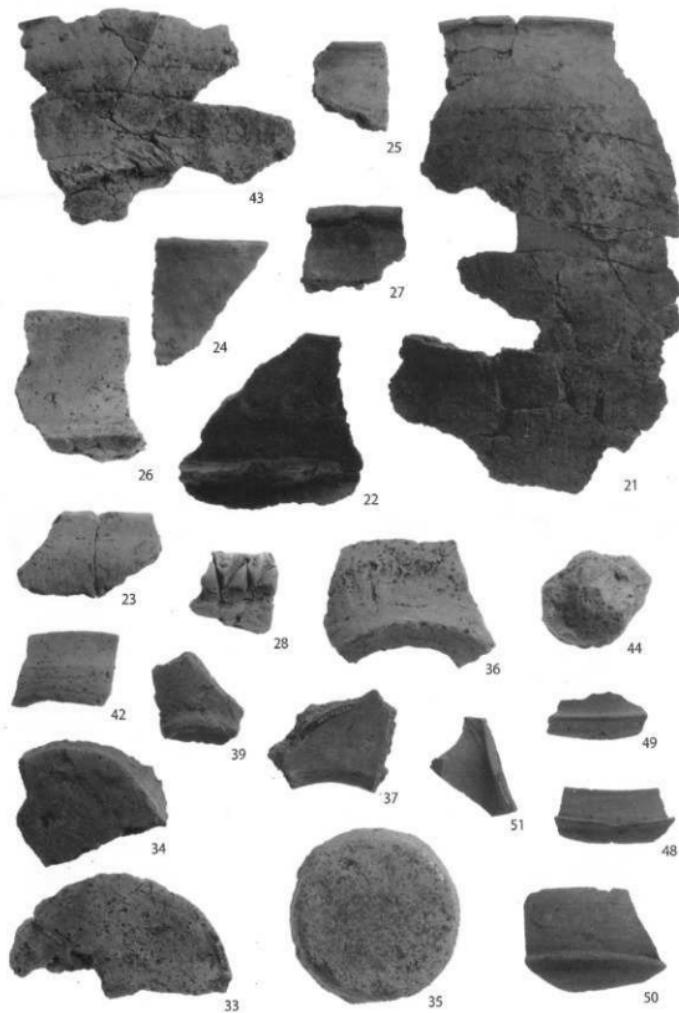


図文・弥生時代遺物

図版6

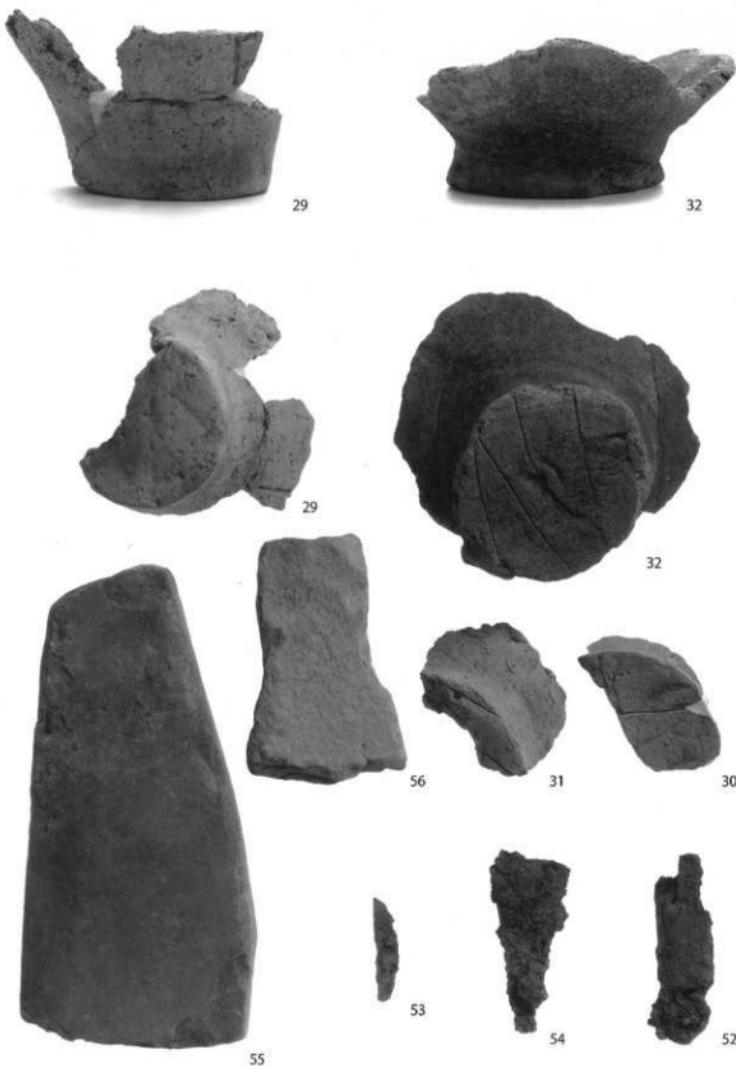


古墳時代包含層出土及び竪穴建物跡1・2号出土遺物

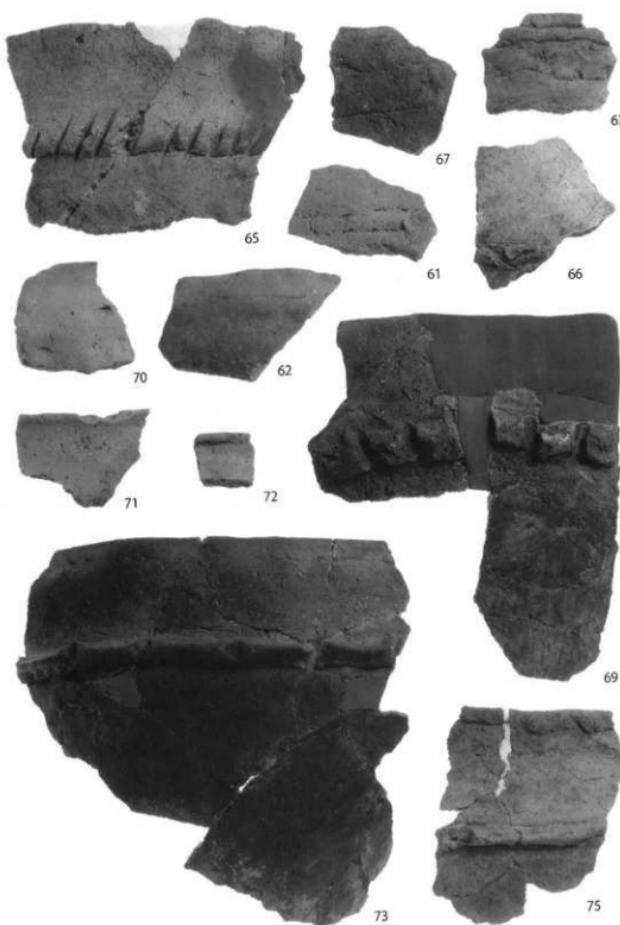


竪穴建物跡1・2号出土遺物（1）

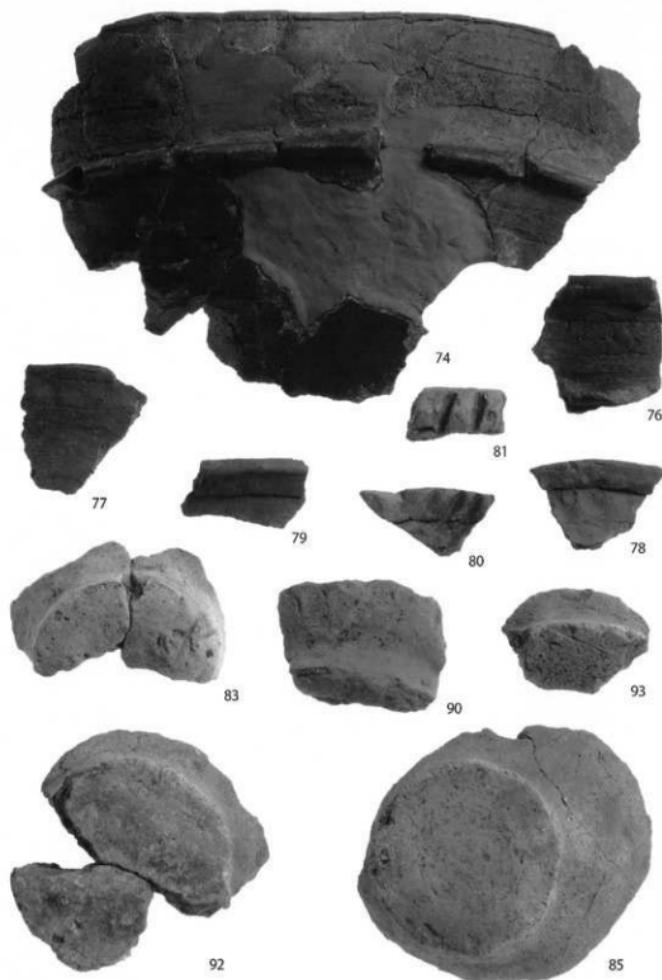
图版8



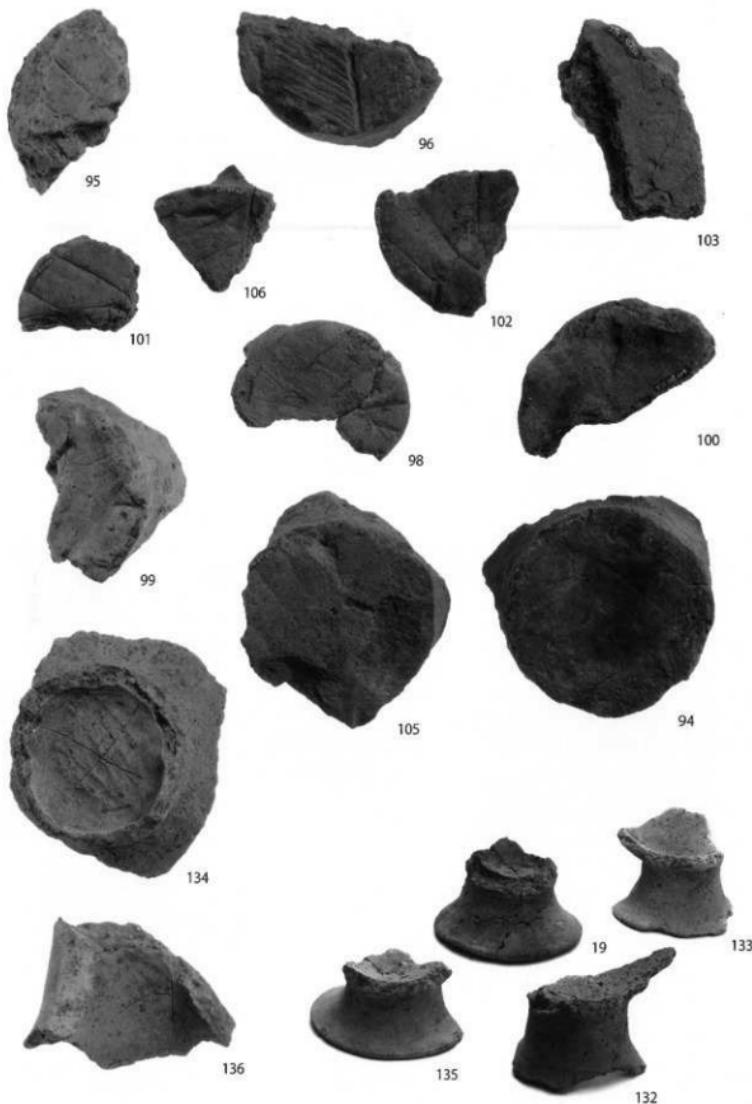
竖穴建筑物1·2号出土遗物(2)



古墳時代包含層出土遺物（1）

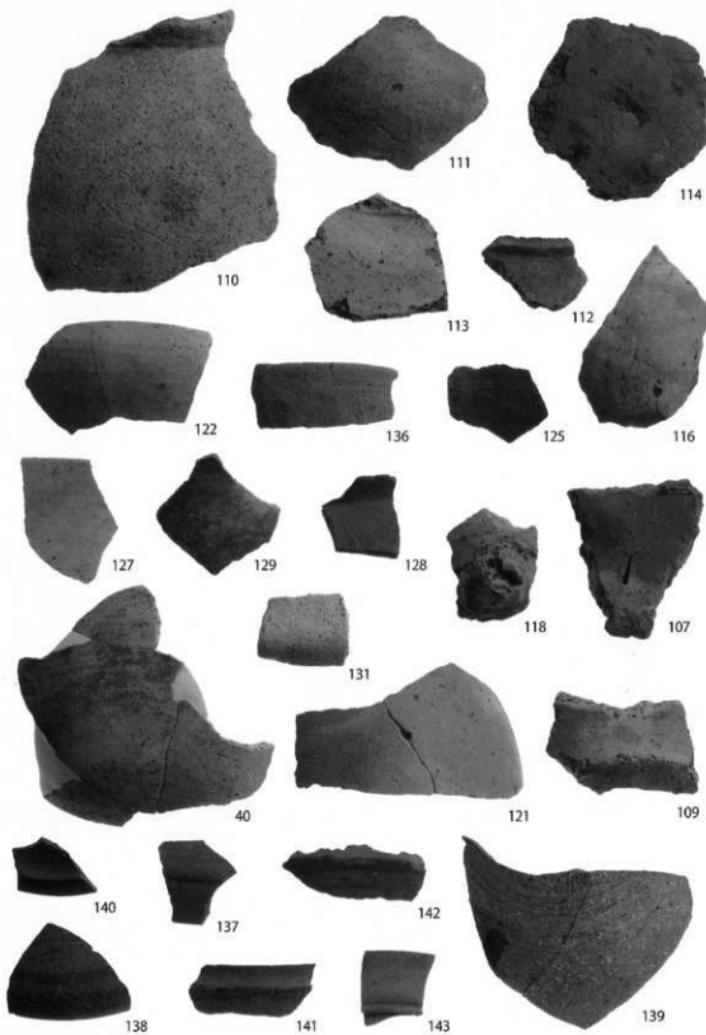


古墳時代包含層出土遺物（2）

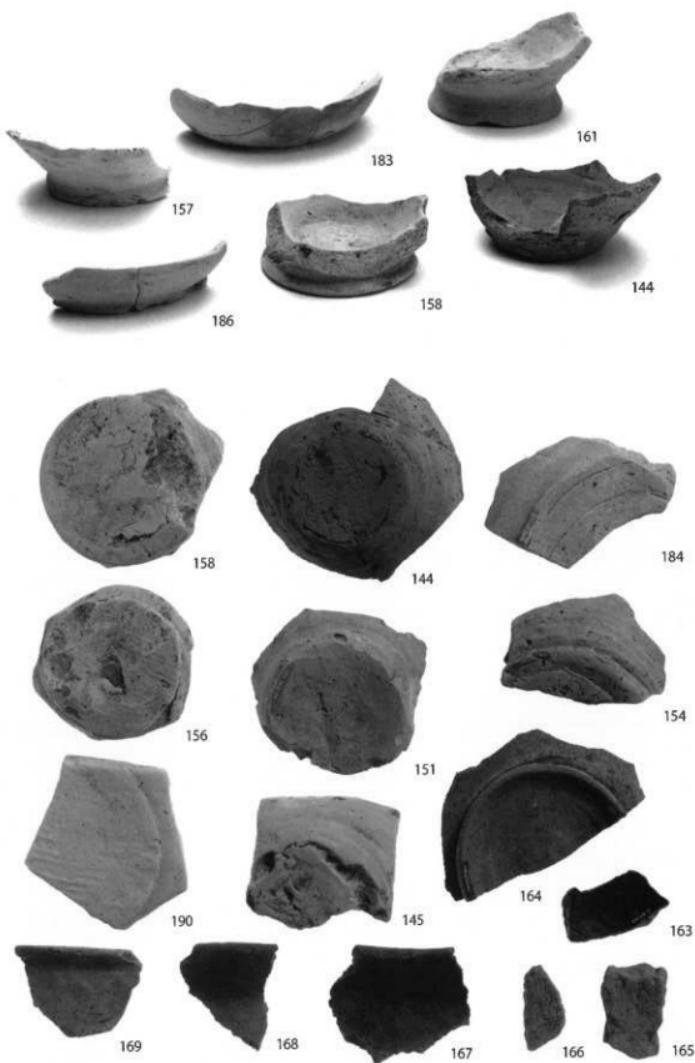


古墳時代包含層出土遺物（3）

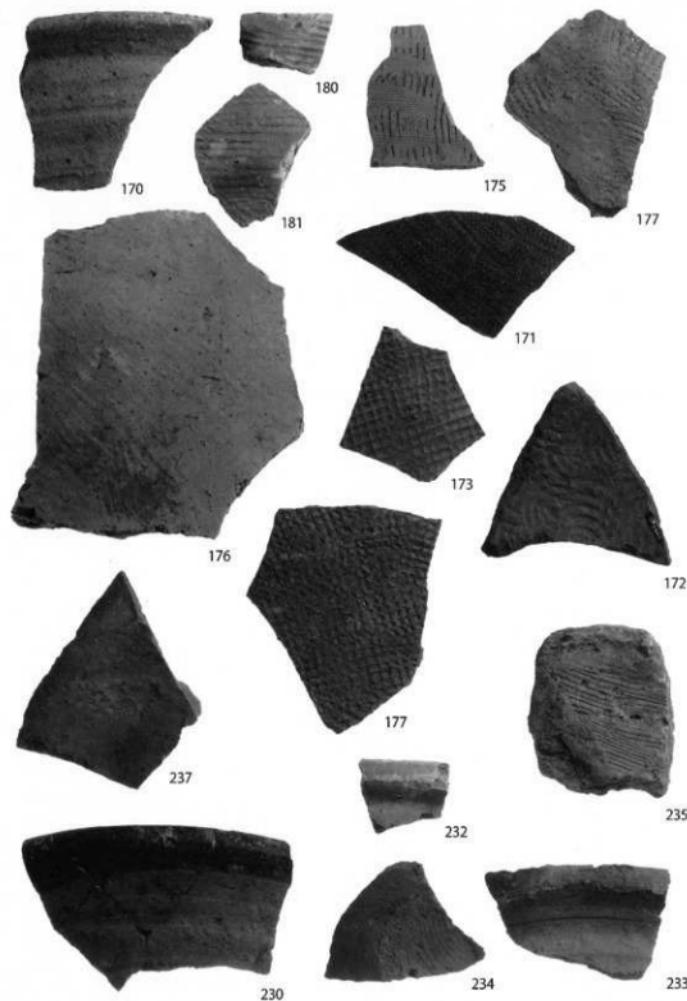
圖版12



古墳時代包含層出土遺物（4）

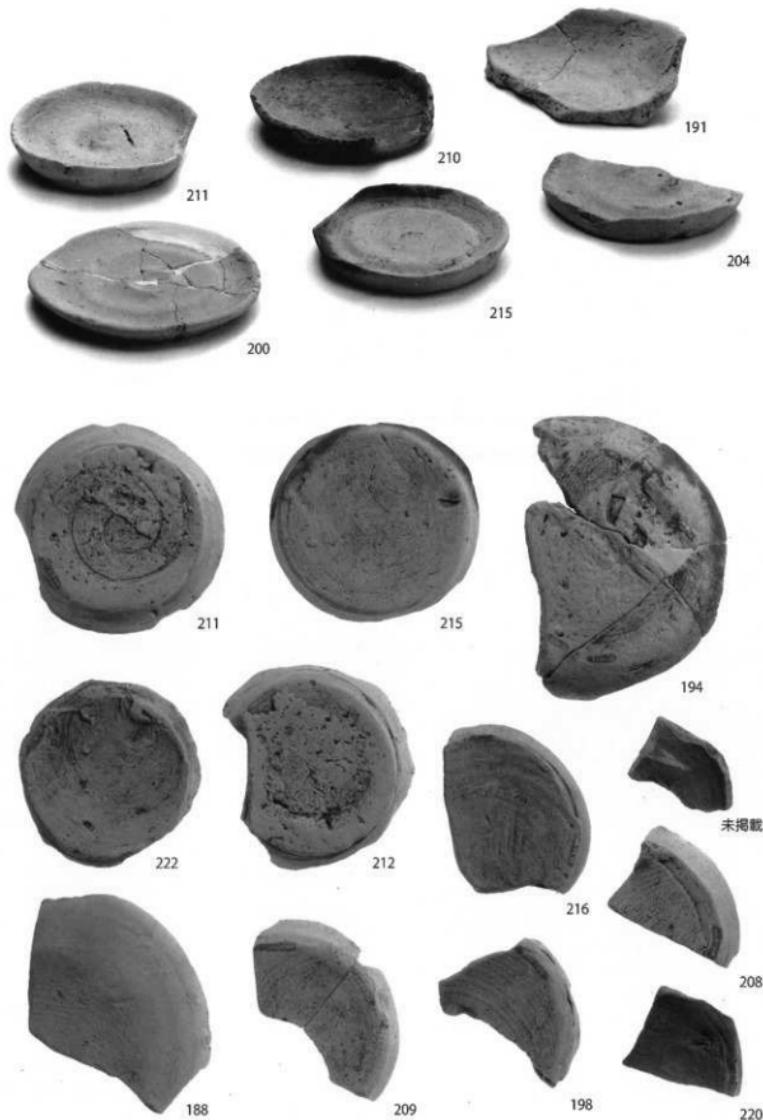


図版14

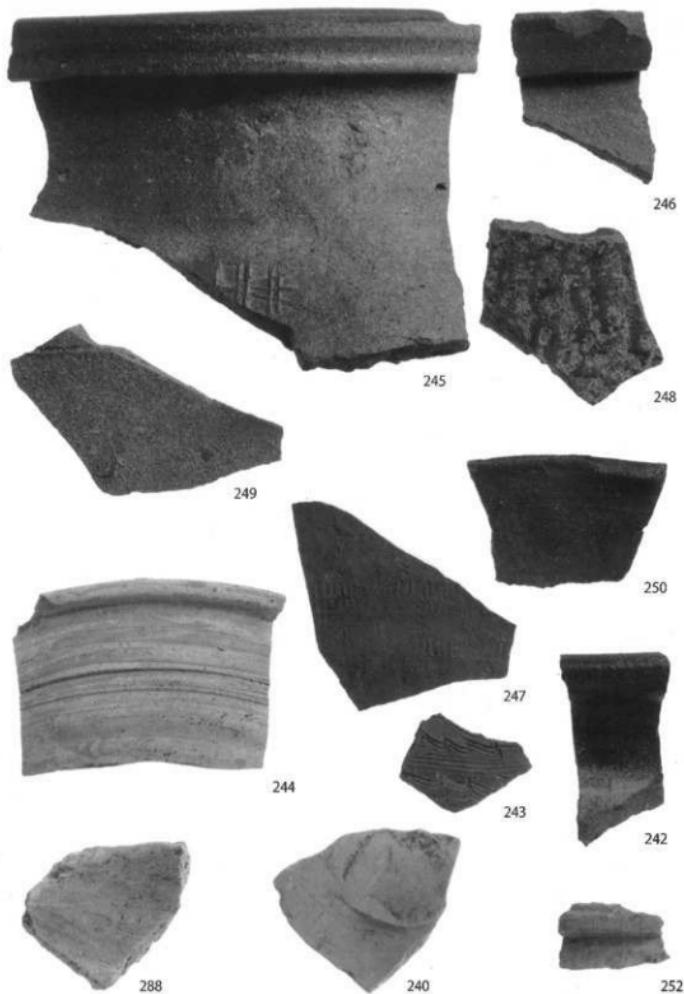


古墳時代～中世須恵器

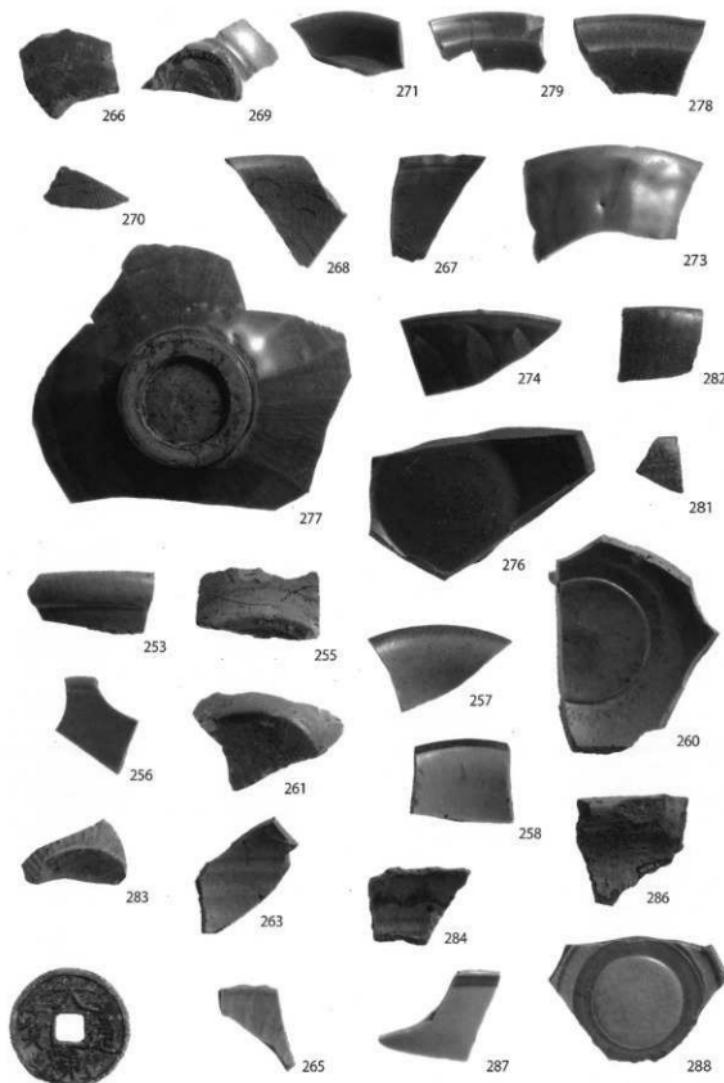
図版15



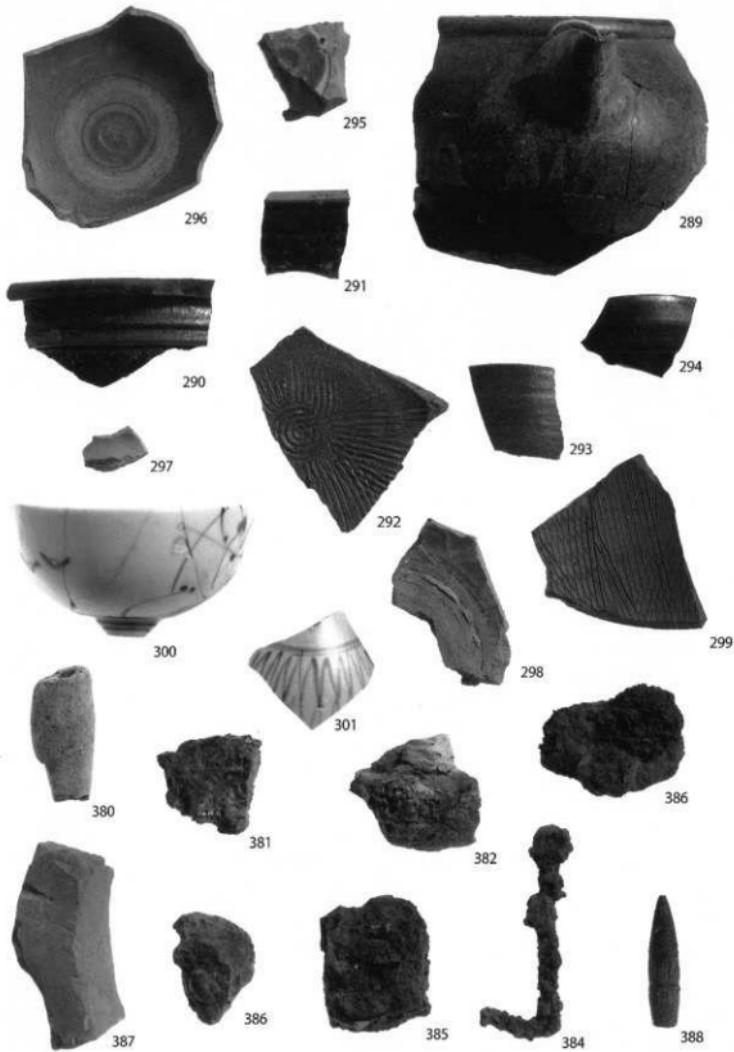
中世遺物（1）



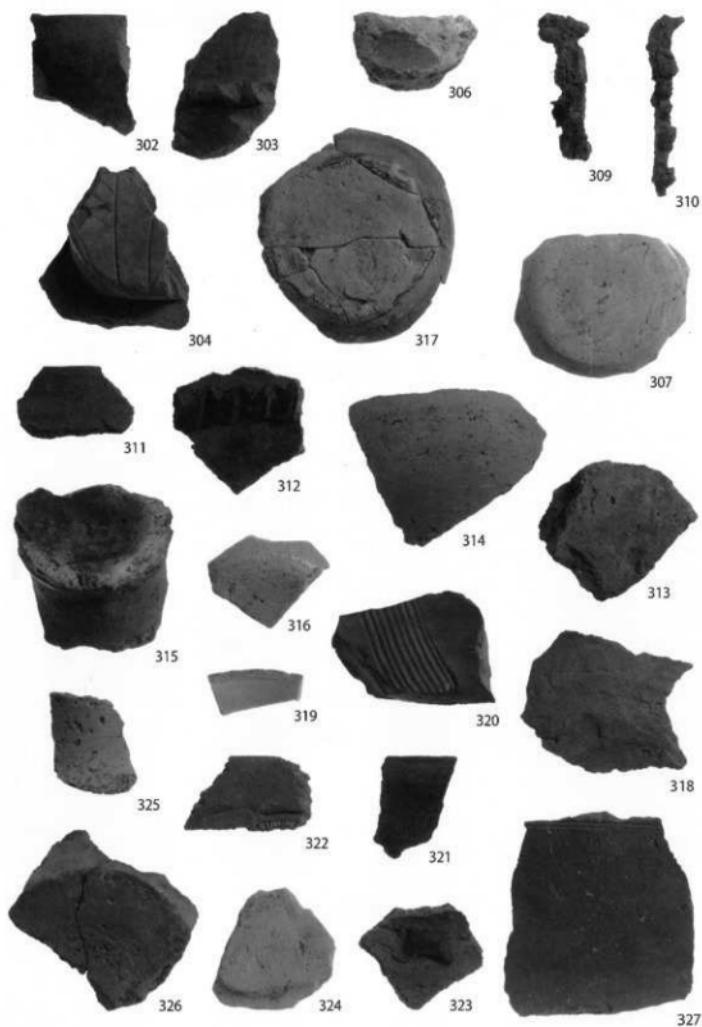
中世遺物（2）



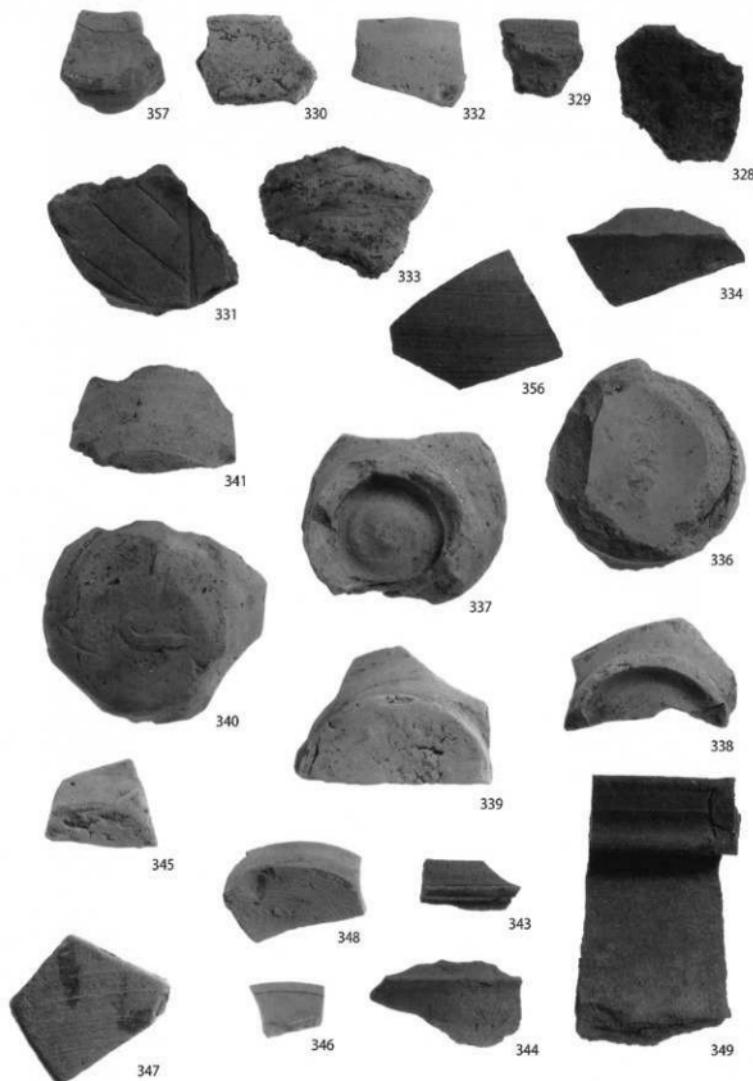
中世遺物（3）



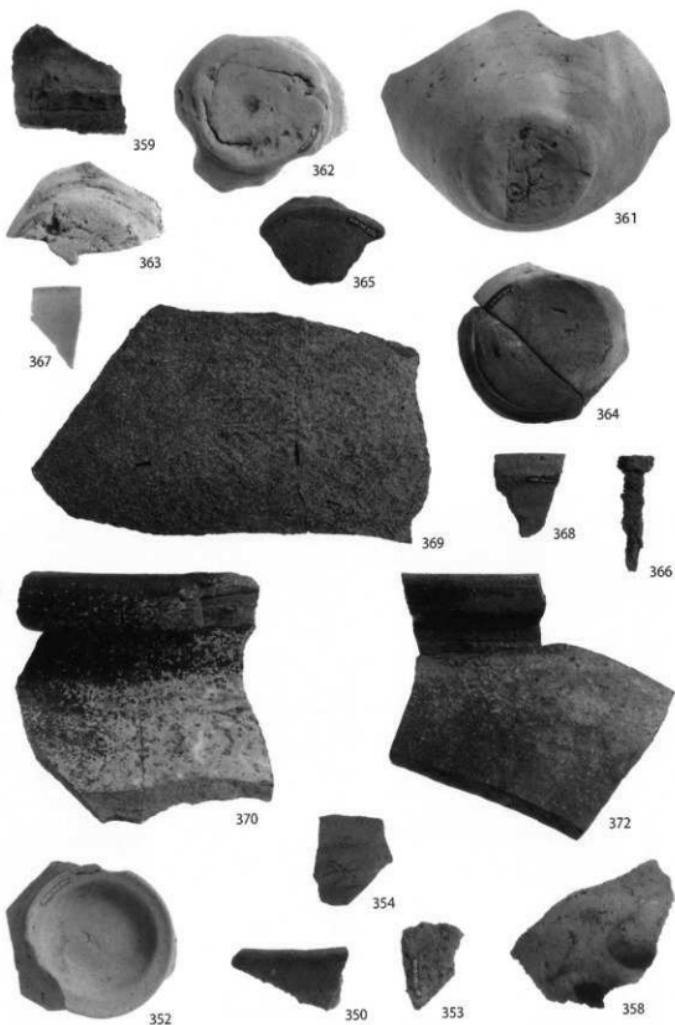
近世・時期不定遺物



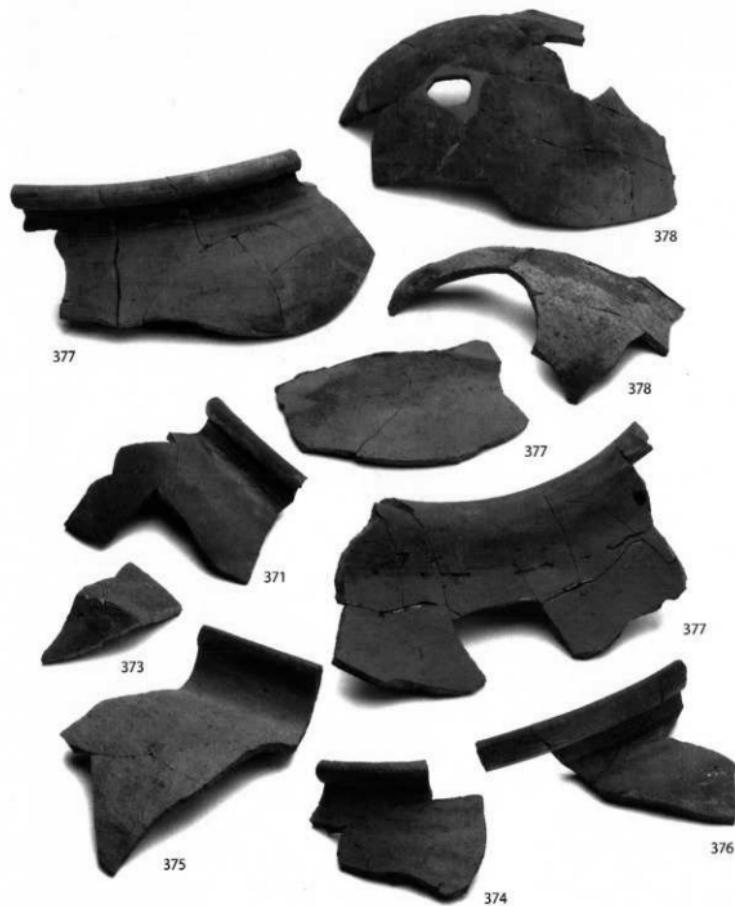
溝状遺構1~3号出土遺物



溝状遺構4・5号及びピット1号出土遺物



土坑1・2号及びピット4号出土遺物



土坑1号出土備前焼

報告書抄録

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
九州電力株式会社鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

安 良 遺 跡

発行年月：2012年3月

編集・発行：鹿児島県志布志市教育委員会

〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号
TEL 099-472-1111 FAX 099-473-1880

印 刷 所：有限会社 志布志新生社印刷

〒899-7103 鹿児島県志布志市志布志町志布志3223-7
TEL 099-472-2422 FAX 099-473-3250